

南坂8号墳跡群
一国山城
一国山古墳群

一下足守地内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査一

2006

岡山市教育委員会

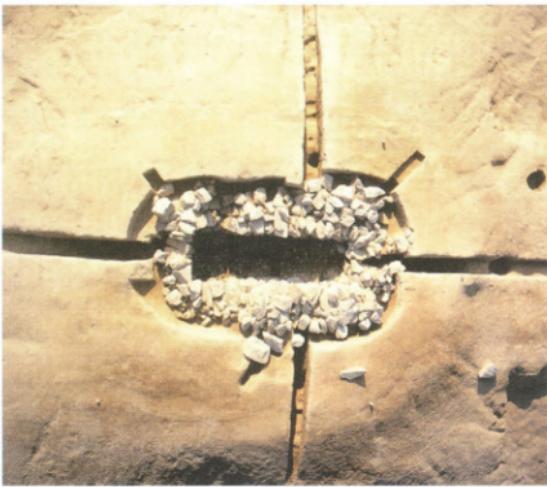
カラー図版 1



南坂 8 号墳全景



南坂 8 号墳主体部出土管玉



南坂 8 号墳主体部

カラー図版 2



一国山城跡遠景
(東から)



玉類（一国山 1号墳石棺 1）



鏡・管玉
(一国山 3号墳石棺 3)

序

私たちの岡山市は、かつて吉備と呼ばれる地域の中核を占めており、現在でも多種多彩な文化財が数多く存在しています。岡山市教育委員会では、先人たちの連綿とした営みの跡であるこれらの文化財の保護と、私たちの営みである都市開発、あるいは地域開発との調和をはかるために、各種の遺跡発掘調査を実施しておりますが、その社会的要請の増大に対して、有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意取り組んでおります。

このたび調査を実施した、南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群が所在する足守地域は、岡山市の中でもとりわけ多くの埋蔵文化財が所在する地域のひとつであります。調査の結果、南坂8号墳では、古墳時代前期の前方後方墳をはじめ古墳時代全般にわたる埋葬施設を、一国山城跡では、郭、土壘などの城郭施設を、そして一国山古墳群では、古墳時代前・中期の箱式石棺や、古代の方墳など、多数の遺構を確認することができました。

これら発掘調査の成果は、発掘調査対策委員会の諸先生方、地権者および地元の方々、関係者各位のご指導、ご支援の賜物であり、みなさま方に對しまして心からの謝意を表する次第であります。この調査成果に関しましては、ご検討、ご批判をいただき、そして岡山地域の歴史を研究する上での基本資料となれば、幸いに存じます。

平成18年3月31日

岡山市教育委員会
教育長 山根文男

例　　言

- 1 本報告は岡山市教育委員会文化財課が、平成12年9月2日から同月30日および平成15年10月12日から平成16年3月25日にかけて実施した、下足守地内遺跡発掘調査等事業に伴う、岡山市下足守字隠地1012他（南坂8号墳）、岡山市下足守624他（一国山城跡・一国山古墳群）の発掘調査に関するものである。
- 2 発掘調査に当たっては、地権者である株式会社林建設、株式会社フジモトから多大なるご協力を得た。記して謝意を表します。
- 3 本報告の作成は岡山市教育委員会文化財課が実施し、その執筆は第2～4章を文化財副専門監神谷正義が、第1～5章を文化財保護主事河田健司が、第3・5章を文化財保護主事西田和浩が担当した。
- 4 本書に掲載した遺物の内、石材については、岡山理科大学自然科学研究所　白石純氏より、石器については広島大学大学院文学研究科考古学研究室助教授竹広文明氏より多大なるご教示、ご指導を得た。記して謝意を表します。
- 5 遺物の実測・トレースは、木村真紀（岡山市教育委員会文化財課嘱託職員）、山元尚子、西田がおこない、写真撮影は西田、編集は河田がおこなった。
- 6 註は各節ごとに、参考文献は章末尾にあげた。
- 7 本書で用いる高度は、標準海拔高度である。
- 8 本書で用いる方位は、図2・図5は平面直角座標第V系（日本測地系）の座標北であり、その他は磁北である。
- 9 図2は国土交通省国土地理院発行2万5千分の1地形図『総社東部』に、『改訂岡山県遺跡地図 第六分冊 岡山地区』の遺跡範囲および遺跡名を加筆・修正したものである。
- 10 出土遺物および本書で用いた写真・図面類は、岡山市埋蔵文化財センター（岡山市網浜834-1）にて保管している。

目 次

カラー図版

序

例言

目次

第1章 位置と環境 1

第2章 調査の経緯と経過

 第1節 調査の経緯 6

 第2節 調査組織 7

 第3節 調査の経過 8

第3章 南坂8号墳

 第1節 調査の経過 12

 第2節 遺構と遺物

 第1項 南坂8号墳 12

 第2項 南坂8号墳築造以前の遺構・遺物 23

 第3項 南坂8号墳築造以後の遺構・遺物 27

 第4項 その他の遺物 33

 第3節 まとめ 34

第4章 一国山城跡

 第1節 調査の経過

 第1項 調査に至る経過 41

 第2項 調査の経過 41

 第2節 遺構と遺物

 第1項 一国山城跡 43

 第2項 一国山築城以前の遺構・遺物 59

 第3項 出土遺物 65

 第3節 まとめ 71

第5章 一国山古墳群

第1節 調査の経過	78
第2節 遺構と遺物	
第1項 一国山1号墳	78
第2項 一国山2号墳	90
第3項 一国山3号墳	93
第4項 一国山4号墳	97
第5項 一国山5号墳	102
第6項 弥生時代後期の遺構・遺物	106
第7項 その他の遺物	107
第3節 まとめ	
第1項 一国山1号墳について	108
第2項 一国山2号墳について	110
第3項 一国山3・4・5墳について	113
遺物観察表	120
写真図版	131
報告書抄録	

図・表目次

図1 南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群の位置	1
図2 周辺部の主要遺跡分布図	2
図3 南坂9号墳地形測量図	3
図4 調査区位置図	8
図5 調査区グリッド図	9
図6 南坂8号墳地盤測量図	13
図7-1 南坂8号墳地盤丘短軸土層断面図	14
図7-2 南坂8号墳地盤丘長軸土層断面図	15
図7-3 南坂8号墳土層注記	16
図8 南坂8号墳主体部平・断面図	18
図9 南坂8号墳主体部内土層断面図	19
図10 南坂8号墳盛土除去後地形測量図・墓壙・排水溝平面図	20
図11 南坂8号墳主体部墓壙・排水溝平面図	21
図12 南坂8号墳排水溝断面図	22
図13 南坂8号墳墓壙・排水溝断面図	22
図14 南坂8号墳石室内出土遺物	23
図15 弥生時代面遺構配置図	24
図16 P1平・断面図	25

図17	P 1 出土遺物	25
図18	P 2 平・断面図	26
図19	P 3 平・断面図	26
図20	P 4 平・断面図	26
図21	P 5 平・断面図	27
図22	P 5 出土遺物	27
図23	P 6 平・断面図	27
図24	土器棺墓平・断面図	28
図25	土器棺	28
図26	埴輪棺墓平・断面図	29
図27	埴輪棺	30
図28	石蓋土墳墓 1 平・断面図	31
図29	石蓋土墳墓 1 出土遺物	31
図30	石蓋土墳墓 2 平・断面図	31
図31	石蓋土墳墓 2 出土遺物	31
図32	主体部 2 平・断面図	32
図33	主体部 2 土層断面図	33
図34	主体部 2 出土遺物	33
図35	その他の遺物	33
図36	吉備の前期古墳・弥生墳丘墓における埋葬施設の主軸と方位	35
図37	古墳・弥生墳丘墓における排水溝類例	37
図38	一国山城跡地形測量図	42
図39	第1郭被熱跡	44
図40	東西トレント（A-B）土層断面図その1	46
図41	東西トレント（A-B、C-D）土層断面図その2	47
図42	南北トレント土層断面図（E-F、G-H、I-J、K-L）土層断面図	49
図43	第1郭サブトレント 1・2・3（Q-R、O-P、M-N）土層断面図	51
図44	第1郭サブトレント 4（S-T）土層断面図	52
図45	第1郭石列	53
図46	第1郭方形基壇状遺構	54
図47	第1郭集石 1	55
図48	第1郭集石 2	55
図49	第1郭集石 3	56
図50	P 2 平面図	57
図51	P 2 出土鉄製品	57
図52	P 2 出土土器	57
図53	第2郭石列	58
図54	第3郭石列	59
図55	弥生時代土壙等	60
図56	弥生時代土壤出土土器	61
図57	第1郭段状遺構 A・B 等平面図	62
図58-1	第1郭段状遺構 A ピット土層注記	62
図58-2	第1郭段状遺構 A ピット平・断面図	63
図59	段状遺構 B 集石 4	64
図60	段状遺構 B 集石 5	64
図61	段状遺構出土土器	65
図62	段状遺構 A・B 出土金属製品	65
図63	第1郭 I・II 区出土土器	66
図64	第1郭 II 区斜面堆積出土龜山焼甕	67
図65	第1郭 III・IV 区出土遺物	68
図66	第1郭 IV 区斜面堆積出土土器	69
図67	第2・3郭出土土器	70

図68	第1・2郭出土金属製品	71
図69	一国山出土銅錢	71
図70	一国山出土石製品	72
図71	足守莊絵図トレー	74
図72	守福寺宝殿・八幡神社鳥居実測図	74
図73	冠山城と一国山城	76
図74	一国山古墳群遺構配置図	79
図75	一国山1・2号墳地形測量図	80
図76	一国山1号墳墳丘土層断面図	81
図77	一国山1号墳周溝平面図	82
図78	周溝内遺物出土状況平・断面図	82
図79	一国山1号墳石棺1平・断面図	83
図80	一国山1号墳石棺2平・断面図	84
図81-1	一国山1号墳石棺1出土遺物	85
図81-2	一国山1号墳石棺1出土遺物	86
図82-1	一国山1号墳石棺2墓壙内出土胡簾	87
図82-2	一国山1号墳石棺2出土遺物	88
図83	一国山1号墳周溝内出土遺物	89
図84	一国山2号墳平・立面図	90
図85	一国山2号墳墳丘土層断面図	91
図86	一国山2号墳石槨平・立面図	92
図87	一国山2号墳石槨内出土遺物	93
図88	一国山3・4・5号墳地形測量図	94
図89	一国山3号墳墳丘土層断面図	95
図90	一国山3号墳石棺3平・断面図	96
図91	一国山3号墳石棺3出土遺物	97
図92	一国山4号墳墳丘土層断面図	98
図93	一国山4号墳石棺4平・断面図	99
図94	一国山4号墳石棺5平・断面図	100
図95	一国山4号墳石棺6平・断面図	101
図96	一国山5号墳墳丘土層断面図	103
図97	一国山5号墳石棺7平・断面図	104
図98	一国山5号墳石棺8平・断面図	105
図99	一国山5号墳石棺7出土遺物	106
図100	溝1平・断面図	106
図101	溝1出土遺物	106
図102	その他の遺物	107
図103	三井谷周辺の前・中期古墳	109
図104	一国山2号墳の築造規格	111
図105	一国山古墳群埋葬施設頭位模式図	114
図106	長坂古墳群	115
図107	殿山古墳群	116
図108	郷境墳墓群	117
図109	前期古墳における埋葬主体の主軸と方位	117
表1	吉備の前期古墳・弥生墳丘墓における竪穴式石室長幅比	35
表2	岡山県下の終末期古墳	110
表3	一国山3・4・5号墳埋葬施設一覧表	114

第1章 位置と環境

南坂8号墳、一国山城跡、一国山古墳群、すなわち今回発掘調査を実施した下足守地内遺跡は、岡山市足守地域内の大字下足守地区に立地している。この下足守地区は、岡山県北部の中国山地と南部の岡山平野の間に広がる、標高200~600mの吉備高原に源を発し、備中南部を南北に貫流する足守川が、吉備高原の山間を脱し、岡山平野に流れ出す部分に形成した沖積平野と、その東側に横たわる吉備高原の南縁に当たる山塊部分より形成されている。

足守地域は、現在では岡山市西端部の一角であるが、昭和46年に岡山市に合併される以前は、御津郡足守町として独立した行政区画を形成していた。またその一部である大字下足守地区も、明治22年に上足守、下足守、上土田の、足守川東岸域の3村が合併して、足守村を発足させるまでは、下足守村として地域的、行政的にまとまりのある単位を構成していた。

調査地点の立地する下足守地域周辺における人の営みは、一国山の西北の丘陵端部に位置する足守深茂遺跡（註1）や、足守川を越えた西側の山麓に位置する余町遺跡において、縄文時代後期の土器が出土しているところから（註2）、このころにまでさかのぼると考えられる。そして西側の平野部に位置する足守庄関連遺跡からは、縄文時代晚期の突帯文土器を伴う遺構も確認されており（註3）、縄文時代の終わりには、丘陵・山麓部のみならず平野部の開発も始まっていたものと推測される。

弥生時代にはいると、上記の足守庄関連遺跡や足守深茂遺跡において、弥生時代前期の遺物を伴う土壤が確認されている。さらに弥生時代中期には、足守深茂遺跡において該期の遺構・遺物が、また南坂8号墳の南西側に位置し、岡山市教育委員会により発掘調査のおこなわれた南坂遺跡においても弥生時代中期中葉・後半の土器が出土している（註4）。このように出土遺物から、縄文時代晚期か

ら弥生時代中期まで、人々の営みが連続とおこなわれていたことは窺えるが、該期の遺構の具体的な様相については、発掘調査が少ないとでもあるが、詳かではない。弥生時代後期に到ると、遺跡の数、遺物の量とも前代と比較して増加する傾向が認められる。前記の南坂遺跡からは複数の住居跡が検出され、集落の一端が明らかとなつた（註5）。また、一国山の南の沖積地上に位置する上土田鶴免遺跡（註6）からは、弥生時代後期末の土器満まりが検出され、さらに前記の足守深茂遺跡では該期の遺構・遺物が、上土田足守遺跡（註7）、上土田門前遺跡（註8）などからは該期の遺物が採取されている。また弥生時代後期後半には、経塚弥生墳丘墓、生石神社裏山1号墳（弥生墳丘墓）、浦



図1 南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群の位置 尾9号墳（弥生墳丘墓）（註9）などの弥生墳



- 記 寺院跡 凸 城跡
- 散布地 古墳群
- 1 南坂8号墳 2 一国山城跡 3 一国山古墳群 4 足守深茂遺跡 5 余町遺跡 6 足守庄関連遺跡 7 南坂遺跡 8 上土田鶴兔遺跡
 9 上土田足守遺跡 10 上土田門前遺跡 11 稲塚弥生墳丘墓・鰐状比定遺構 12 生石神社裏山1号墳 13 潘尾9号墳 14 南坂古墳群
 15 南坂9号墳 16 長坂古墳群 17 長坂1号墳 18 長坂2号墳 19 長坂3号墳 20 長坂7号墳 21 三井谷奥古墳群 22 大塚古墳群
 23 延寿寺跡 24 すくも山道路・すくも城跡 25 冠山城 26 土壘状遺構 27 宮路山城 28 錬冶山城 29 足守陣屋町遺構

図2 周辺部の主要遺跡分布図

丘墓が、北や東側の山塊・丘陵上の足守地域の平野を見下ろす位置に築かれる。岡山市教育委員会により発掘調査された経塚弥生墳丘墓は、東西8m南北12mの方形の墳丘を持ち、特殊壺、特殊器台が出土している（註10）。これらの弥生墳丘墓の築造と、足守地域における弥生時代後期における遺跡数の増加との間には、密接な関係があるものと推測される。

古墳時代にはいると、足守地域には下足守地区の南坂8号墳などの、全長20～30mほどの前方後方墳が築造される。またその尾根筋上には、南坂9号墳（図3）などの10～20mの古墳が多数築かれるようになる（註11）。これらの中には、突出した規模の墳丘を持つものは認められない。これは下足守地区を含む足守地域が、他から突出した規模の墳丘を築き、権力の集中する集団の存在を窺わせる地域とは異なっていたことを推測させる。そして前方後方墳と他の古墳との差異が、墳形以外認められないことから、これらの前方後方墳は盟主的なものではないと推測され（註12）、足守地域内においては複数の「小」盟主的な権力者のもとに、古墳を築造することのできる複数の集団が存在していたとも考えられる。三井谷の奥の標高180mほどの尾根上に位置する長坂古墳群は、岡山市教育委員

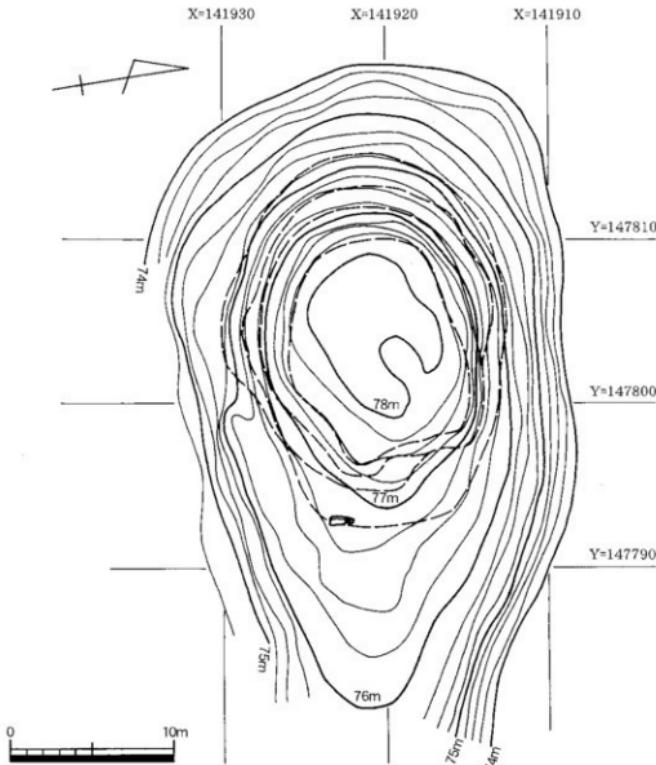


図3 南坂9号墳地形測量図 ($S = 1/300$)

会によって、1・2・3号墳が調査されており、古墳時代前期における小盟主に帰属する小古墳群の様相が明らかになっている（註13）。これらの前期古墳は、平野を西あるいは南に見下ろす丘陵上に位置しており、これに対応する該期の集落は、上記の上土田鶴免遺跡から古墳時代前期の土器を伴う土墳が検出されているが、それ以外は調査例が少なく詳細は不明である。古墳時代後期には、横穴式石室を持つ古墳が多数築かれるようになる。の中には、長坂7号墳のように石室全長が10mを越えるものもいくつかみられる。それらは前半期の古墳とは異なり、特に三井谷周辺の三井谷奥古墳群や大塚古墳群のように、谷地形に面した斜面に集中する傾向がみられる。一方南坂遺跡で検出された多數の玉類を伴う石室墓のように（註14）、前半期古墳の周辺部に築造されている、該期の埋葬施設も認められる。

古代の下足守地区は、備中国、賀陽郡足守郷に属する。賀陽郡は、吉備五国造の一つ賀夜氏の本拠地とされる。統日本紀によれば、天平神麿元（765）年6月には賀夜氏一族の賀陽（統日本紀、日本後紀では賀陽と表記。以下それに従う。）臣小玉女が朝臣の姓を賜ったと記されており（註15）、また日本後紀によれば大同三（808）年には式部大輔賀陽朝臣豊年が下野守に兼任されていることから（註16）賀陽氏は、8世紀後半から9世紀にかけて、四位五位クラスの官人を輩出しており、中央との結びつきのある一族といえる。さらに8世紀前半の官人の中にも賀陽氏の名がみられ（註17）その結びつきはさらにさかのぼる可能性もある。その一方では8世紀後半には、「善家異記」にみられる賀陽郡大領豊仲、統領の豊藤、吉備津神社惣直の豊恒、国府の少目の官位を金で買ったとされる良藤などの人物が、賀陽郡内において要職を独占し富を蓄積していく様子も窺える（註18）。古代後半、下足守地区を含む足守地域は、「足守庄」として莊園化されている。京都神護寺所蔵「備中国足守庄絵図」の裏書きには、嘉応元（1169）年に四至を確定し絵図を作成したことが記されており、足守庄はこのころまでに立庄されたと考えられる。この裏書きには「案主散位賀陽氏」の名が見え、足守庄立庄には賀陽氏が大きく関わっていたことを窺わせる。足守地域は現在でも「備中国足守庄絵図」に描かれた景観がよく残っており、該期の遺跡の調査は、足守庄関連の遺跡を中心に実施されている。上記の足守庄（足守幼）関連遺跡の調査では、条里水田内の調査を実施し、条里水田に伴う溝等の遺構が確認され、条里水田の成立過程が明らかになった（註19）。また、上土田地区の足守庄南半に位置する延寿寺跡の調査では、古代～中世の木棺墓、井戸、柱穴、溝などが確認されている（註20）。そして、大井地区にある、「備中国足守庄絵図」において「大井御庄境藤木山」と記された、榜示の可能性を持つ立石遺構の調査では、この遺構は絵図に描かれた榜示の可能性が極めて高いと判断されている（註21）。

中世の遺跡は、南坂遺跡、延寿寺跡、すくも山遺跡において調査されている。すくも山遺跡からは多数の中世墓が検出され、14世紀前半～16世紀にかけての中世墓の変遷及びそれに伴う骨蔵器の変遷が明らかになっている（註22）。中世後半の戦国時代における足守地域は、東の織田氏と結んだ宇喜多氏と、西の毛利氏との勢力圏の接点、いわゆる「境目」地域となる。備中国は、備中国守護職細川氏の下で南北朝合一後15世紀後半まで、隣接する備前・美作や播磨よりも比較的安定していたと考えられる（註23）。しかし寛正元（1460）年に細川勝久が守護職を承継した後、文正二（1467）年に勃発した応仁の乱以降国内は不安定になり、延徳三（1491）年から明応元（1492）年にかけて起こった守護代荘元資による反乱により、細川氏の勢力は衰えていった。その後備中国は国人領主である石川・三村・新見・多治部・庄氏などが台頭し、その中の庄為資は、在国守護上野頼氏を松山城に滅ぼし

て、備中国最大の国人領主となる。しかしその後は、山陰の尼子氏、西の毛利氏の進出により在地勢力が求心的に成長することではなく、在地国人領主層はそれら国外の大名勢力とそれぞれ結びつき備中国は複雑な様相を呈するようになる。そして最終的には西の毛利氏と、東の織田氏の最終決戦の場となるのである。足守地域で起こった毛利氏対織田氏の著名な戦闘は、備中高松城水攻めの前哨戦として戦われた冠山城の戦いであろう。冠山城は下足守地区の三井谷入り口に位置する、「中国兵乱記」によれば毛利方の山城であるが、織田方は天正十（1582）年にこの城を攻め落としている。この時に織田方が陣をはったと推測される土塁遺構（註24）が、東側の丘陵部分に残存している。足守地域には、冠山城のほかに、大井地区の鍛冶山城、宮路山城、日近地区の日近城等の、室町期から織豊期と推測される城跡が点在している（註25）。その中の、すくも山遺跡における発掘調査では、3つの郭と、堀切、石積等が検出され、冠山城の出城の遺構と推測されている（註26）。

近世の足守地域は足守藩に属し、藩主木下氏の支配下に入る。藩祖木下家定は、豊臣秀吉の正室高台院（北政所）の兄であり慶長六（1601）年、姫路から移封され足守藩を立てた。その後木下家は一時所領を没収されていた時期もあるが、幕末まで藩主として足守地域を治めている。現在の足守の町並みの中に位置する、足守藩陣屋町遺構の発掘調査では、陣屋町が形成されたと推測される17世紀後半（註27）の遺構は検出されていないが、18世紀後半～19世紀の武家屋敷の遺構が検出されている（註28）。近世の下足守地区は、基本的に水田景観を呈しており、その風景は現在まで続いていると考えられる。

註

- （註1）『岡山市埋蔵文化財センター年報1 2000（平成12）年度』岡山市教育委員会 2002
（註2）小郷利幸他「岡山市足守地域の地域史研究（1）」「古代吉備第12集」古代吉備研究会 1990
（註3）『足守庄（足守幼稚園跡）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994
（註4）『南坂1号墳・南坂遺跡発掘調査現地説明会資料』岡山市教育委員会 1984
（註5）註4前掲書
（註6）1994年岡山市教育委員会の実施した発掘調査
（註7）小郷利幸他「岡山市足守地域の地域史研究（3）－弥生時代と古墳時代前・中期－」「古代吉備第17集」古代吉備研究会 1995
（註8）閑壁忠彦「足守上土田採集の弥生土器」「倉敷考古館研究集報 第8集」倉敷考古館 1973
（註9）近藤義郎「第3章弥生墳丘墓の成立と展開 第3節 弥生墳丘墓の実体 三備中」「岡山県史 原始・古代I」岡山県 1991
（註10）『足守庄遺跡緊急調査勝手比定遺構発掘調査概報』岡山市教育委員会1980
（註11）南坂9号墳の測量図は、註6前掲書にすでに公表されているが、今回南坂8号墳の調査に伴い、9号墳の地形測量図に標高、国土座標値を記入することが可能になったため、再測量を実施したものである。
（註12）出宮徳尚「前方後円墳時代の円墳・方墳」「吉備の考古学的研究（下）」山陽新聞社 1992
（註13）『長坂古墳群』岡山市教育委員会 1999
（註14）註4前掲書
（註15）六月辛酉朔備中国賀陽郡人外從五位下賀陽田小玉女等十二人賜姓朝臣（原文）
（註16）式部大輔從四位下賀陽朝臣豊年為兼下野守（原文）
（註17）賀陽邑兄人（鼓吹大令史）賀陽臣田主（造東大寺司史生） 門脇禎二「古代吉備の官人群像」「岡山県史 古代II」岡山県 1989
（註18）註17前掲書
（註19）註3前掲書
（註20）『足守庄園遺構緊急調査・延寿寺跡第2次発掘調査概報』岡山市教育委員会 1979
（註21）註10前掲書
（註22）『すくも山遺跡』岡山市教育委員会 1998
（註23）水野恭一郎「第1節守護の領国支配と国人」「岡山県史 中世II」岡山県 1991
（註24）『改訂岡山県遺跡地図 第6分冊岡山地区』岡山市教育委員会 2003においても時期は不明とされている。
（註25）註24前掲書
（註26）草原孝典「すくも山の城郭遺構について」註22前掲書
（註27）『足守藩武家屋敷跡・II－足守小学校プール建設に伴う発掘調査報告－』岡山市教育委員会 2001
（註28）『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会 1995

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

岡山市下足守地区は、尾根上から山裾部の緩斜面に弥生時代以来の集落遺跡や集団墓群、尾根上に弥生時代末～古墳時代前期を中心とする中小規模の墳墓群、そして谷部の斜面などに古墳時代後期の横穴式石室墳が群集する特異な地域である。また、「足守庄絵図」に象徴されるように古代からの開発が行われていたり、あるいは中世には備中高松城の水攻めで知られるように、織田・毛利両勢力の拮抗する最前線となっていた。そのため山城や小規模な陣跡が各所に残されている、いわば遺跡の集中地域である。

一方、この一帯は花崗岩を母岩とする山で構成され、良質の「山土」が採取できるため、山土採取業者による大小の開発事業が行われてきた地域でもあり、埋蔵文化財との競合は避けられない事態となっているのが現状である。

今回の株式会社林建設による採土事業が計画された南坂8号墳を中心とする一帯には、4基の古墳、數カ所の陣跡跡のほか斜面から山裾部の広い範囲に土器等が散布している。当教育委員会は、尾根上に立地する南坂8号、9号墳、10号墳などの現状保存を強く要求するとともに、林建設との間で数年来埋蔵文化財の保存に関する協議を続けてきた。しかしながら、南坂9・10号墳の保存は同意されたものの、8号墳に関しては採土事業の展開上現状での保存は困難であり記録保存を実施することで合意した。ここに至るには、南坂8号墳は墳丘も低平であり目立たなかったこともあり、腰高の墳丘を持つ9・10号墳を保存するためにはやむを得ないと判断があった。平成14年7月、南坂8号墳及びその周辺部約200mについて、文化財保護法第57条の2に基づく埋蔵文化財発掘の届出が事業者から提出された。また平成14年8月19日付けで、原因者負担による発掘調査実施の依頼が、株式会社林建設代表取締役から岡山市教育委員会に提出された。これを受け試掘確認調査、周辺の分布調査、そして平成14年9月2日からは一部の発掘調査を実施した。

しかし、試掘確認調査結果と異なり南坂8号墳が墳長27mにおよぶ前方後方墳であること、竪穴式石室が良好に遺存すること、墳丘下や周辺に弥生時代にさかのぼる遺構群が存在することが明らかとなるに至り、現時点での原因者負担による調査の続行は困難となった。そこで石室内の調査と実測作業を終了させた後、遺構の養生をし後日の本格的調査に委ねることになった。同年9月27日に文化財保護法第58条の2に基づき文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の報告を提出し、平成14年度の調査はひとまず終了した。

これらの調査成果をもとに発掘調査費用等を算出し、再度原因者負担による発掘調査の実施を協議した。しかし小規模事業者である林建設にとってはこれ以上の負担は過大であり、「埋蔵文化財緊急調査国庫補助」による調査の実施を検討せざる得ない状況であると判断された。なお、調査対象地点は現状保存されていたものの周辺では採土事業が進行中であり、軟質な岩質のため自然崩落の危険もあり、早急な対応が迫られていた。

一方、南坂8号墳と谷を挟んで対面する一国山でも、別業者（株式会社フジモト）による土砂採取事業計画が立案されていた。採土事業計画は事業者である株式会社フジモトが、事前に埋蔵文化財の存在状況を確認したうえで、埋蔵文化財の存在しない地点として当該地を選定、事業実施の計画を立案していたものであった。しかし、平成11年度から4年計画で実施された「岡山県埋蔵文化財詳細分布調査」の結果、山頂部に山城の存在が指摘され、埋蔵文化財としての取り扱いを受けることとなった。そのため株式会社フジモト代表取締役から「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について（依頼）」が提出され、平成14年9月10日現地踏査による確認を行った。その結果山頂部を中心に南西部に2郭東に1郭を持つ連郭式山城であることが確認され、その保存方法に関して協議を重ねることとなった。しかしながら、確認された遺構群は計画地の中心部を大きく占めるため現状保存は難しく、今回記録保存のため当教育委員会文化財課が、事前に確認調査・発掘調査を行い記録保存を実施することとした。しかし、事業者の経済状況から3,000m²にもおよぶ調査対象にかかる費用を負担することもまた難しい状況であると判断されていた。一国山に関して、平成16年9月、文化財保護法第57条の2に基づく埋蔵文化財発掘の届出が事業者から提出された。

2遺跡は、同じ下足守地区にあり直線距離でも400mしか離れておらず、また同様な小規模事業者による土砂採取事業でもあったので、一括して「埋蔵文化財緊急調査国庫補助」を申請し、平成16年度事業として発掘調査を実施することとなった。

発掘調査にかかる経費は、10,324,000円である。内訳は5,162,000円が国庫補助（国宝重要文化財等保存整備費補助金）、1,720,000円が県費補助、残り3,442,000円が単独市費である。なお樹木伐採、表土除去は原因者負担により実施した。

第2節 調査組織

平成16年度

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長 玉光源爾
発掘調査対策委員	稻田 孝司（岡山大学教授） 亀田 修一（岡山理科大学教授） 西川 宏（前岡山理科大学講師） 間壁 忠彦（倉敷考古館館長） 水内 昌康（前岡山市文化財保護審議会会長）
発掘調査担当者	出宮 德尚（岡山市教育委員会文化財課課長） 根木 修（岡山市教育委員会文化財専門監） (調査員) 神谷 正義（岡山市教育委員会文化財副専門監） (調査員) 河田 健司（岡山市教育委員会文化財保護主事） (調査員) 西田 和浩（岡山市教育委員会文化財保護主事） (経理) 福永みどり（岡山市教育委員会文化財課主任）
	（役職名は平成16年度当時）

発掘調査作業員	赤木 悅子	安藤 一江	稻葉 福夫	宇野 順真	小笠原茂豊
	小林 君江	故引 宏昭	小山 笑子	佐藤 勝	鈴村 勝
	千田 正道	柄 孝一	名和 孝江	難波 利信	難波 誠
	難波 光恵	信畠 武士	林 祥介	箕浦 譲	宮崎美枝子

出土物整理作業員 山元 尚子

(平成14年9月の発掘調査担当者)

(調査員) 神谷 正義 (岡山市教育委員会文化財副専門監)

(調査員) 柴田 英樹 (岡山市教育委員会文化財課主任) (平成14年度当時)

発掘調査作業員 川田 正 難波 鷹志 難波 利信

第3節 調査の経過

南坂8号墳 本調査地点は標高約60mの、西へ突き出した尾根上に位置し(図4)、「改訂 岡山県埋蔵文化財遺跡地図 第六分冊 岡山地区(岡山県教育委員会 2003)」によると、南坂古墳群内の北西部端部に立地している。調査区は、南坂8号墳およびその周辺部をも含み、面積は約600m²を測る。一国山城跡・一国山古墳群からは、東へ約400m離れている。

調査は平成14年度に実施された確認調査と、平成16年度に実施された本調査の、2度に分けて実施

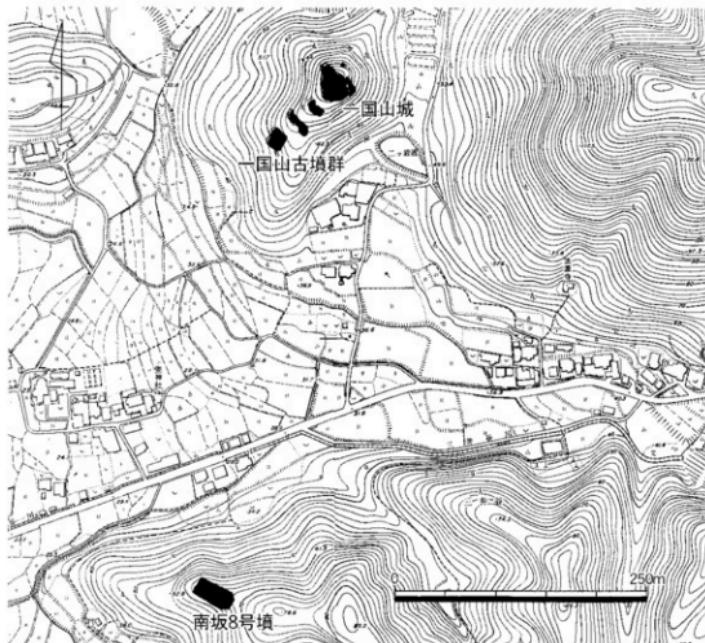


図4 調査区位置図 (S=1/5000)

した。

平成14年度は、調査地点は草が繁茂していたため、調査に先立ち、8月に地権者である株式会社林建設の手により樹木の伐開を行った。その後同じく同社により、バックホーを使用し調査区内の表土（腐植土）の除去作業を実施した。併行して機材の搬入、測量杭の設置、水準点の設置等を行った。

その後9月3日より、南坂8号墳の墳丘を中心とした200m²を対象に、調査員2名、作業員3名で調査を開始した。

この調査は当初現地の踏査及びトレンチ確認の成果から、小石室が2～3基と予測して開始したが、墳丘上に埋納された土器棺、さらに墳丘周辺より石蓋土壙墓を検出したに止まらず、墳形も前方後方墳の可能性が高まってきた。さらに小石室と想定していた石室は、本格的な堅穴式石室と同じ場所に構築された小石室が複雑に絡み合った様相であることが判明してきた。ここに至り、主体部石室の規模と良好な保存状態等から、短期での調査では対応しきれないと判断した。そして検出した遺構は調査及び実測を完了した後シートで厳重に被覆し、調査体制を整えた後の再調査に持ち越されることとなり、9月20日におおよその作業を終了した。

平成16年度の調査は、南坂8号墳と一国山の2個所に調査地点が分かれていたが、まず南坂8号墳の調査から入った。9月下旬に機材を搬入し、10月12日から調査員2名作業員

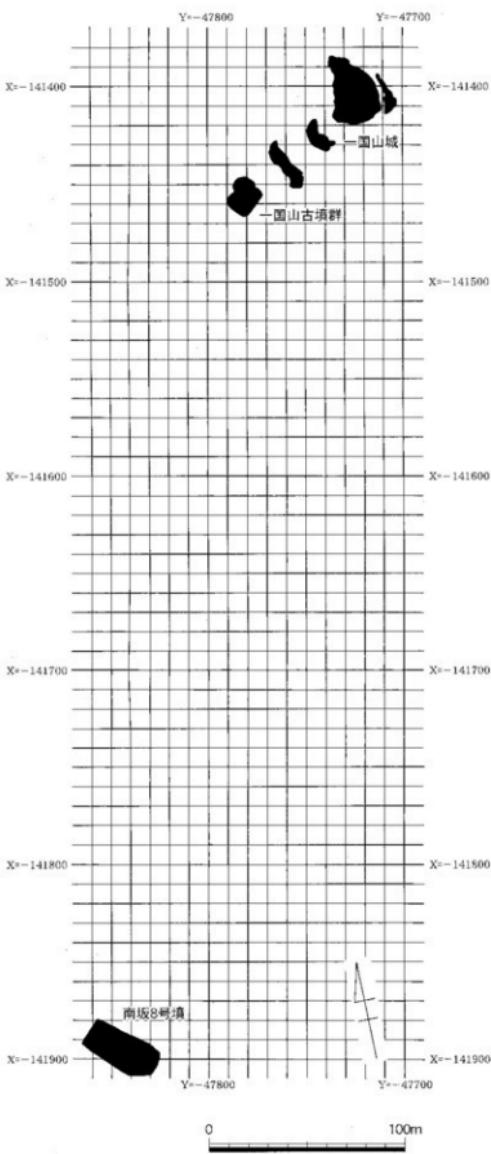


図5 調査区グリッド図 (S = 1/2500)

2名で開始した。

この調査は南坂8号墳埴丘を中心に実施し、さらに調査範囲600m²まで拡大する事により検出された埴丘周辺部の新たな遺構、および埴丘築造以前に営まれていた遺構をも調査した。その結果10月21日には埴輪棺が、11月24日には石蓋土壙墓1を検出した。後方部の盛土除去にともない、12月3日には主体部から埴丘外へ延びる排水溝を確認している。その後12月9日には対策委員会を実施し、対策委員各氏からは、貴重な助言・指導を得た。その後、調査が終わりに近づいた12月18日には研究者対象の現地説明会を開催し、さらに12月24日には石室を解体して調査を終了し、12月13日より開始されていた一国山城跡・古墳群の調査に調査員、作業員とも合流した。

一国山城跡・一国山古墳群 本調査地点は、標高約85mの一国山上に位置しており（図4）、上記の南坂8号墳からは西へ400m離れている。調査区の面積は1000m²を測る。「改訂 岡山県埋蔵文化財遺跡地図 第六分冊 岡山地区（岡山県教育委員会 2003）」によると、一国山は、城跡とされているが、古墳群は未確認であった。

一国山は、事前の踏査で確認されていた4カ所の郭を中心に、城跡の調査として開始された。まず、調査開始前（平成16年11月中旬から12月上旬）に、草木の繁茂が著しいため地権者である株式会社フジモトが立木の伐開およびバックホーによる表土の除去をおこなった。また12月8日から、測量業者により、測量杭及び水準の設定をおこなった。

12月13日より調査員1名で作業員を導入し、調査を開始した。当初はバックホーで除去できなかつた腐植土および木株の除去作業を、第1郭から開始した。この作業はかなりの時間を要し、本格的な調査は1月からとなった。

平成17年1月から、南坂8号墳の調査から合流した調査員、作業員も加えて、第1郭から第4郭までを縦断、第1郭を横断するトレントをはじめ、要所に設定したトレントの掘削および、城跡の地形測量を開始した。また昨年に続き、表土の除去も併行しておこなった。その過程で第3郭上に、1月14日、一国山1号墳を、1月26日には同2号墳を検出した。そこで「一国山古墳群」と命名し、城郭の調査と併行して古墳群の調査もおこなうこととなった。

城郭の調査は、土塁、曲輪の詳細と城造成の状況を確認するなど順調に進み、2月上旬にはほぼ終了した。さらにトレント掘削により第1郭上に存在が判明していた中世・弥生時代の遺構の調査を開始した。さらに、城跡の範囲を探求するため第3郭下の尾根上に複数のトレントを設定したところ曲輪等の痕跡は確認されなかったものの、石棺墓が検出され、新たな古墳群の存在が明らかとなってきた。最終的には3月4・5日にかけて一国山3・4・5号墳が検出され、古墳群が1・2号墳の南西に拡大することが判明した。そのため作業員・調査員を、中世・弥生時代の遺構担当と、古墳群担当とに分けて調査をおこなった。それらの結果を踏まえて、3月18日に対策委員会を実施し、対策委員各氏からは貴重な助言・指導を受けた。翌19日には一国山城跡、一国山古墳群の現地説明会を、約150人の参加を得て開催することができた。

3月25日にはほぼすべての発掘作業は終了し、機材の撤収をおこなった。しかし調査員は、3月上旬に新たに検出された多くの遺構の図面作成及び最終チェックのため、現地でその処理を4月末まで行った。

発掘調査日誌抄

平成16年

- 10月12日（火） 南坂8号墳調査再開。
- 10月21日（木） 墳丘トレーニング掘削。
- 11月26日（金） 墳丘全景写真撮影。
- 12月1日（水） 南坂8号墳空中写真撮影。墳丘盛土除去開始。
- 12月7日（火） 墳丘盛土除去終了。
- 12月8日（水） 業者により南坂8号墳、一国山城跡測量杭打設。
- 12月9日（木） 第1回対策委員会。対策委員稻田・西川・亀田・水内・間壁各氏來訪。現地指導。
- 12月10日（金） 石室解体。弥生時代遺構面調査開始。
- 12月13日（月） 一国山城跡発掘調査開始。
- 12月18日（土） 南坂8号墳現地説明会開催。参加者20人。
- 12月24日（金） 弥生遺構面写真撮影、南坂8号墳調査終了。
- 12月27日（月） 平成16年調査終了。

平成17年

- 1月5日（水） 平成17年調査開始。
- 1月14日（金） 一国山1号墳調査開始。
- 1月18日（火） 一国山城跡空中写真撮影。
- 1月26日（水） 一国山2号墳調査開始。
- 2月14日（月） 城郭築造時の整地層掘削開始。
- 3月1日（火） 一国山城郭調査終了。中世・弥生遺構面調査開始。
- 3月4日（金） 一国山3号墳調査開始。
- 3月5日（土） 一国山4・5号墳調査開始。
- 3月11日（金） 対策委員稻田氏來訪、現地指導。
- 3月18日（金） 第2回対策委員会。対策委員亀田・西川・間壁・水内各氏來訪、現地指導。
- 3月19日（土） 一国山城跡・一国山古墳群現地説明会開催。参加者150人。
- 3月25日（金） 機材撤収。発掘調査終了。

以後実測図作成等現場での残務処理は、当年4月末まで調査員のみでおこなった。

第3章 南坂8号墳

第1節 調査の経過

当古墳の調査は、平成14年と平成16年度の2度実施されている。14年度の調査は、16年度に実施された全面的な調査に先だって実施されたものである。

14年度は、9月から約1か月間、当古墳に伴う竪穴式石室や墳丘上、あるいは墳端の遺構などを約200m²の限られた範囲で調査し、竪穴式石室、主体部2、石蓋土壙墓2、土器棺を検出した。そして当古墳が北西部にのびる前方部を持ち、本格的な石室構造を持つ前方後方墳であることを確認し、本格的な調査は16年度に持ち越して終了した。

16年度は調査範囲を墳丘周辺約600mに拡大し、10月から12月いっぱい、墳丘や墳丘周辺部の遺構を調査した。その結果主体部床面から墳丘西側のくびれ部へのびる排水溝を確認し、墳丘周辺から石蓋土壙墓1、埴輪棺墓を新たに検出した。古墳の調査終了後には、石室を解体し墳丘盛土を除去して、墳丘築造以前の遺構調査もおこなった。

第2節 遺構と遺物

第1項 南坂8号墳

南坂8号墳の概要 南坂8号墳は、岡山市街地と足守平野との間に横たわる山塊から、西へ飛び出す尾根筋上、標高60m付近に位置している。当古墳の北側の、足守平野から分岐して、南坂の集落付近より東へ入り込む谷は三井谷と呼ばれ、この谷筋の南側にやつて状に飛び出す尾根上には、数多くの古墳が所在している。この古墳群は三井谷古墳群と呼ばれ、現在までに23基の古墳が確認されており(註1)、当古墳もその一つである。当古墳の位置するのと同じ尾根上の、標高80m付近には、円墳である南坂9号墳が位置している。

墳丘 当古墳は南東から北西へのびる尾根筋上に立地する前方後方墳で、墳丘はこの尾根を整形した上に盛土をおこなって築造されている。墳丘の規模は、全長約27m、前方部長さ約12m幅約9.5m、高さ0.8~1.2m、後方部長さ約15m、高さ1.7~2.0mを測る。後方部北東側の墳端は、尾根北東側斜面と一体になっており明確にとらえられないが、後方部の平面形が左右対称なら幅約14mであろう。

現況では後方部墳頂に北西~南東約9m、北東~南西約7mの平坦面が認められるが、埋葬施設の石材が一部露呈しており、その蓋石も欠損していることから、この平坦面は後世の削平あるいは墳丘の流出によって形成されたものと判断され、本来の後方部の高さは現在よりも高かったと考えられる。

前方部上には地山削りだしによる平坦面が形成されており、この上に盛土は認められない。後方部の盛土の様子から(図7-2)盛土は当初より前方部には施されなかったと推測される。

外表施設に関しては、周辺部に崩落・堆積した石材が全く認められず、また埴輪も後述する埴輪棺

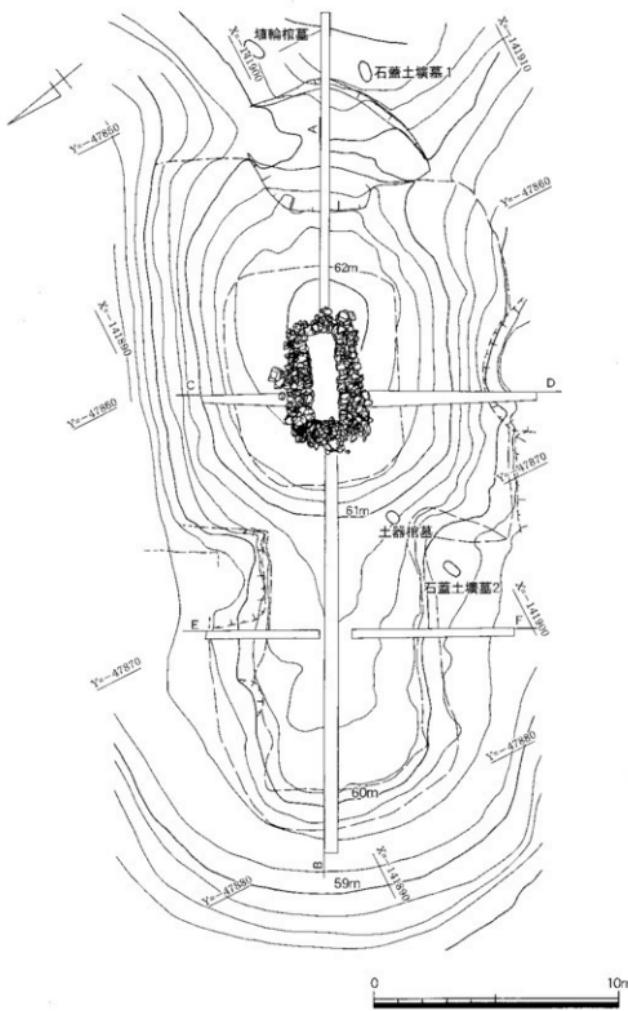
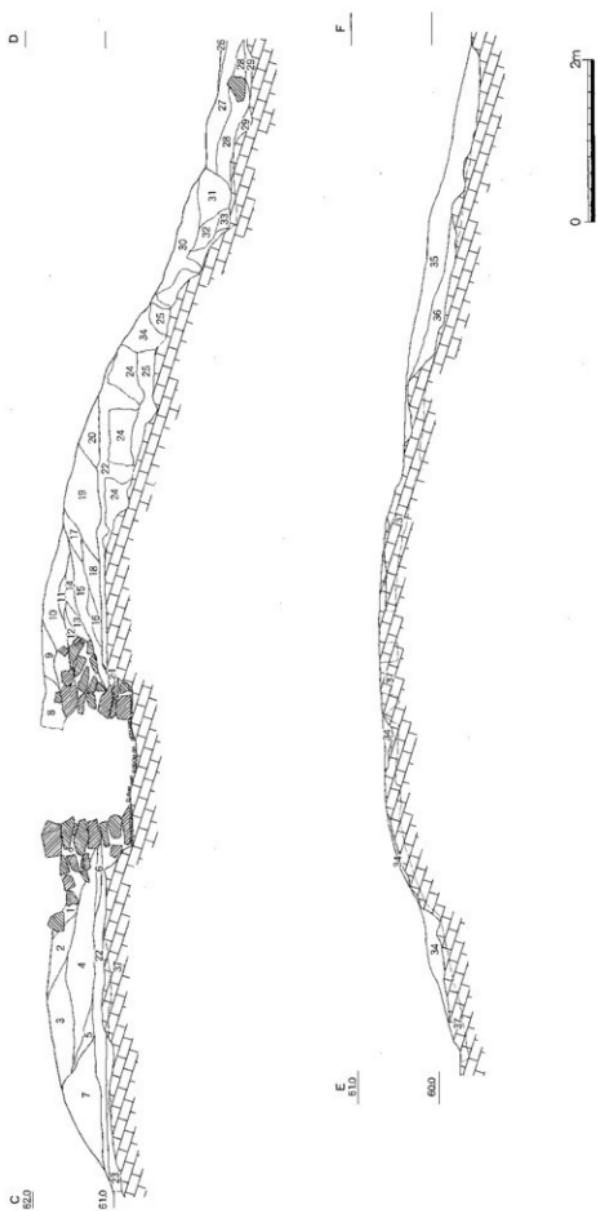


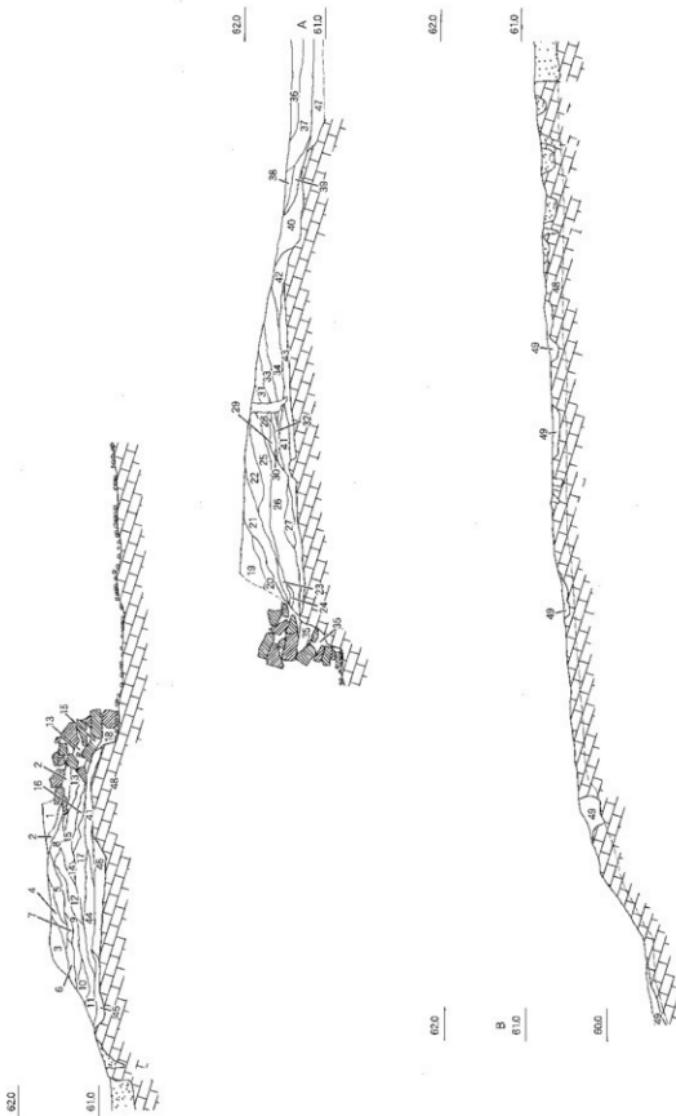
図6 南坂8号墳墳丘測量図 ($S = 1/200$)

图 7-1 南版 8 号塘堤丘短轴土层断面图 ($S = 1/60$)



0 2m

図7-2 南版8号填塡丘陵軸土層断面図 ($S = 1/60$)



南坂 8 号 sondage 壹土壤剖面図	44 黄灰色砂粉 (埴正塗過前の表土。)
1 淡黄色砂粉 (埴正塗土。)	45 黄褐色砂バイランジリ土 (埴正塗過前の表土。)
2 黄褐色細砂粉 (埴正塗土。)	46 黄褐色細砂質粘土 (埴正塗過前の表土。)
3 明黄色砂バイランジリ土 (埴正塗土。)	47 黄褐色砂バイランジリ土 (埴正塗過前の表土。)
4 青褐色細砂粉 (埴正塗土。)	48 黄褐色砂バイランジリ土 (埴正塗過前の表土。)
5 青褐色細砂粉 (埴正塗土。)	49 黄褐色砂 (埴正塗したものの表土。)
6 浅黄色砂粉 - 滑粉 (埴正塗土。)	
7 黑褐色细砂 (白色砂粉土。若干の木炭を含む。埴正塗土。)	
8 明黄色砂粉 (埴正塗土。)	
9 明黄色砂粉 (埴正塗土。)	
10 淡黄色砂粉 - 滑粉 (白色砂粉土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)	
11 黄色バイランジリ土 (埴正塗土。)	
12 淡黄色砂粉 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)	
13 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。)	13 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
14 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。)	14 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
15 淡黄色砂粉 (埴正塗土。)	15 淡黄色砂粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
16 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	16 黄褐色細砂 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
17 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	17 黄褐色細砂 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
18 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	18 黄褐色細砂 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
19 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く方に色彩が付かず入へ。埴正塗土。)	19 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く方に色彩が付かず入へ。埴正塗土。)
20 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	20 浅黄色砂粉 (埴正塗土。)
21 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	21 黄褐色細砂 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
22 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	22 黄褐色細砂 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
23 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	23 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。)
24 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	24 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。)
25 白色砂粉 (埴正塗土。)	25 白色砂粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
26 墓頭砂粉の表土。	26 墓頭砂粉の表土。
27 黄色土 (埴正塗土。)	27 黄色土 (埴正塗土。)
28 淡黄色土 (埴正塗土。)	28 淡黄色土 (埴正塗土。)
29 黄色バイランジ (埴正塗土。)	29 黄色バイランジ (埴正塗土。)
30 淡黄色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)	30 淡黄色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
31 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。)	31 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
32 黄褐色細砂 (埴正塗土。)	32 黄褐色細砂 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
33 黄褐色細砂 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)	33 黄褐色細砂 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)
34 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)	34 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。少量の木炭を含む。埴正塗土。)
35 黄褐色細砂 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)	35 黄褐色細砂 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)
36 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)	36 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)
37 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)	37 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)
38 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)	38 黄褐色細砂 - 滑粉 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)
39 黄褐色細砂 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)	39 黄褐色細砂 (埴正塗土。能く灰白色を示す。能く滑粉を含む。埴正塗土。)
40 淡黄色土 (埴正塗過前の表土。)	40 淡黄色土 (埴正塗過前の表土。)
41 淡黄色土 (埴正塗過前の表土。)	41 淡黄色土 (埴正塗過前の表土。)
42 黄褐色細砂バイランジリ土 (埴正塗過前の表土。)	42 黄褐色細砂バイランジリ土 (埴正塗過前の表土。)
43 淡黄色土 (埴正塗過前の表土。)	43 淡黄色土 (埴正塗過前の表土。)

図 7-3 南坂 8 号 sondage 壤土層注記

以外には確認されなかった。従って、葺石・埴輪ともになかったと推測される。

墳丘盛土 墳丘は前述したように、地山を整形した後、後方部には盛土をおこなって築造されている。現存する盛土の高さは、最大で0.8mを測る。

盛土の方法はかなり特徴的なものである。まず1番目の工程は、標高61m付近で、後方部の形に地山を整形した後、その端部に図7-1の第7層・19・20層、図7-2の第28~34層の土を盛ることである。後方部北西側(図7-2左側)の部分は不明瞭だが、第16・17層がそれに相当すると判断した。これにより一辺14~15mの四角い平面形を持つ周堤状の高まりが形成される。2番目の工程は、周堤状盛土によって囲まれた部分に、外から中に向かって流し込むように土を盛っていくことである。図7-1の第1~5層、第8~18層、図7-2の第19~27層がそれに相当する。北西部は同時に周堤状の盛土の外側にも、内から外へ盛土を行い、後方部を前方部側へ拡張する作業を行っている。図7-2の第1~15層がそれに相当する。

後述するように本古墳の墓壙は、墳丘築成時の地表面から掘り込まれている。このことから2番目の工程段階で、すでに周堤状盛土の内部では、埋葬施設である堅穴式石室の構築が始まっていたと考えられる。石室の壁背後の裏込めに相当する疊は、2番目の工程で「流し込まれた」盛土の層と層との間に位置しているところから、石室の壁を構築しながら、盛土をおこなったことが推測される。この2番目の工程で石室を埋めてしまい後方部墳頂まで完成させたか、あるいは次の工程が存在したかは、墳頂部が削平・流出しているため不明である。

盛土は基本的に、黄褐色を呈する粗砂と微砂が混合したもので、花崗岩バイラン土が混入しているものが多く、周辺の地山に類似した土質である。このことから当古墳の盛土は、周辺部の土、おそらく地山を削り出す際に出土した土を盛土として利用したと推測される。

埋葬施設の位置 本古墳の埋葬施設は、後方部中央からやや北西(前方部側)に築かれた堅穴式石室である。その主軸はE38°Sを指しており、墳丘の主軸よりも約3°北へ振っているが、ほぼ平行といつてよいであろう。床面の標高は60.75~60.80mであり、検出面よりも約1.1m下がったところである。

石室 調査時点の石室の状況は、後述する主体部2の構築等で攪乱されており、内部には石材が転落しており、蓋石も確認できなかった。しかし後世の攪乱土(図9第2層)は石室の床面までは達しておらず、床面付近は未盗掘と推測した。

石室は花崗岩および流紋岩の割石を用いて構築されている。石室内部の規模は、床面近くで長さ3.5m、幅は南東側が1.1m、北西側が0.95mであり、平面形は南東側が若干開いた形をしている。棺床が北西から南東へと高くなっているところから、頭位方向は南東側と推測される。元の高さは、上面が破壊されているため不詳であるが、北東側の壁が棺床から約120cm上まで残存しており、少なくともこの辺りまではあったと推測される。

壁は一辺が20~50cm、厚さ10~30cmの、板石というよりレンガのような角礫で築かれている。北西及び南東の壁は、床面から約30cm上まではほぼ垂直に立ち上がり、それより上の部分は、頭位と推測される南東部はそのまま垂直に、足位と考えられる北西部は顕著に外傾している。南西・北東側の壁は、床面から30cm付近までは、ややせり出して石積みがなされているため、ともに外傾して開き、そこより上は、やや内湾気味に立ち上がる部分と、そのまま外傾して立ち上がる部分とがある。

裏込めは、壁面と同様の石材が用いられており、標高61m付近より下、すなわち後述する墓壙の内

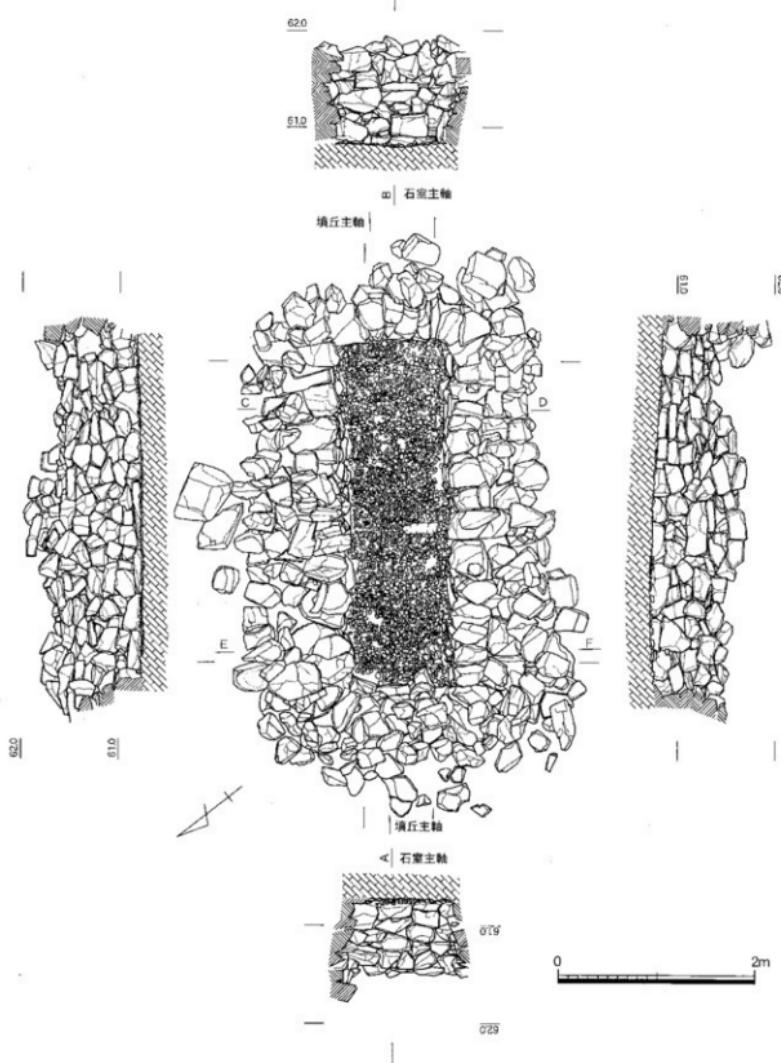


図8 南坂8号墳主体部平・断面図 ($S = 1/50$)

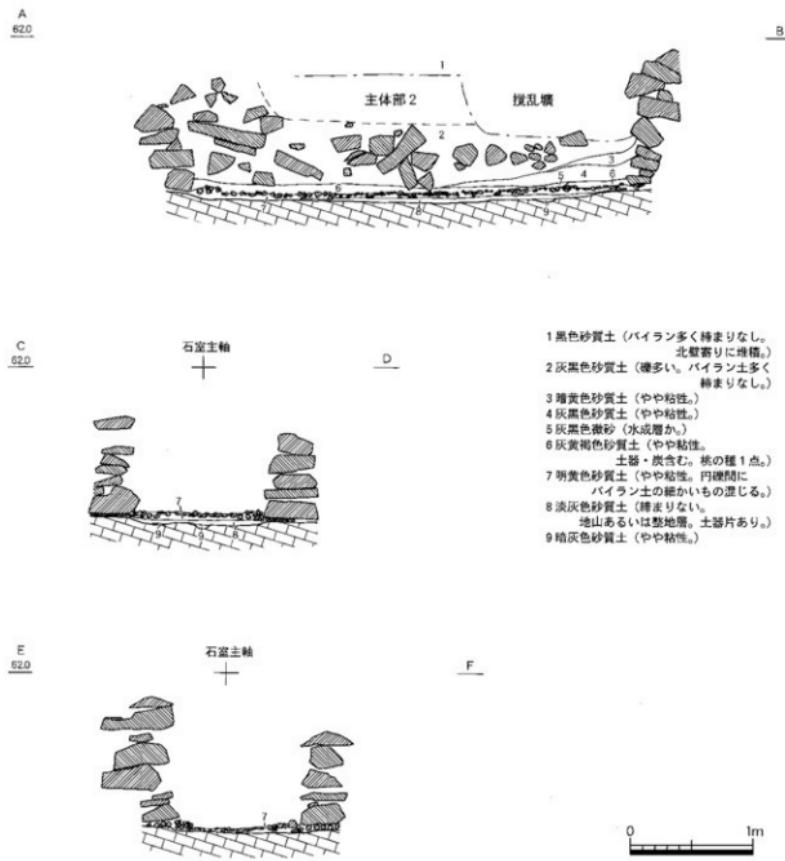


図9 南坂8号墳主体部内土層断面図 ($S = 1/40$)

部に相当する壁の背後は、比較的小型の砾を用い、積まれている数も少ない。一方それより上の壁の背後は、数が増加し、砾も大きくなる傾向を示す。そして後者の裏込めは上述のように、2番目の工程で「流し込まれた」盛土の層と層との間に位置しているところから、その下面是、壁に近いほど下がり、離れるほど上がる様相を呈する。上面は標高66.6mあたりで平らに揃えられているように見えるが、上面が破壊されているため不詳である。

床面には径2~3cmの円礫が、壁を構成する石材の下まで、すなわち墓壙底部一面に敷かれている。厚さは基本的に一重であるが、南西・北東側の壁の近くでは二重になる部分もある。北東部から中央

部にかけては、墓壙底部の地山面に直接敷かれているが、中央から南西端部にかけて地山層と礫の間に淡灰色砂質土の整地層がみられる（図9第8層）。礫は、南西・北東側の壁近くで部分的に高くなる部分もあるが、全体的に平坦に敷かれしており、また円礫下の墓壙断面もほぼ平らである。墓壙底部のうち、石室内部に相当する部分が若干凹んでいるが、墓壙調査時点では明確な掘り方が確認されなかったため人為的なものではないと判断された。

石室内からは、北東壁近くの礫層直上より、管玉が1点出土した。

棺・蓋石 石室内部に棺は残存していないため、大きさ・形態等は不明である。しかし壁の横断面に、前記の如く内湾している部分がみとめられ、また基本的に平らに敷かれている円礫の一部に、壁の内湾した部分につながる形で、盛り上がっている箇所があるが（図8）断面形から割竹形木棺が置かれていた可能性は少ない。小口板の痕跡が認められないため長さはわからないが、南東端を壁際に、北西

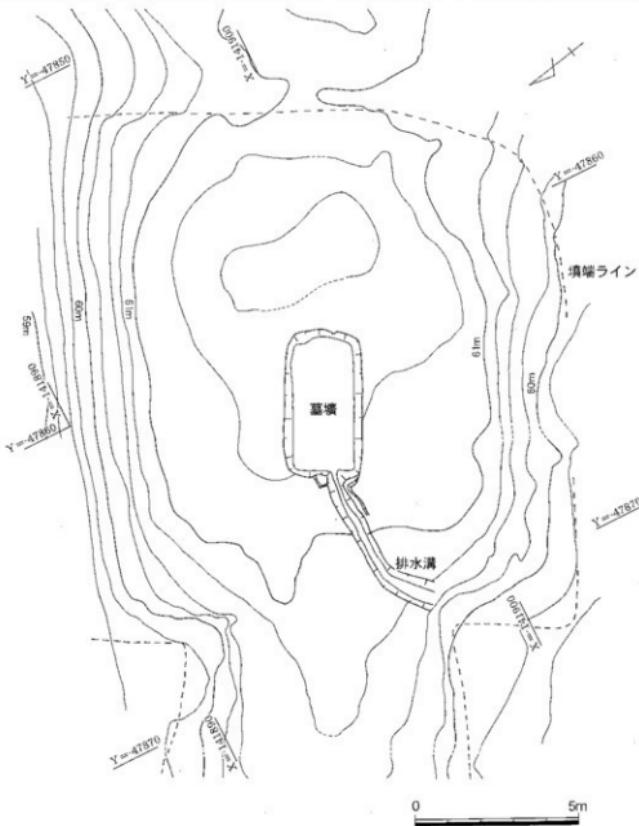


図10 南坂8号墳盛土除去後地形測量図・墓壙・排水溝平面図 (S = 1 / 150)

石室主軸

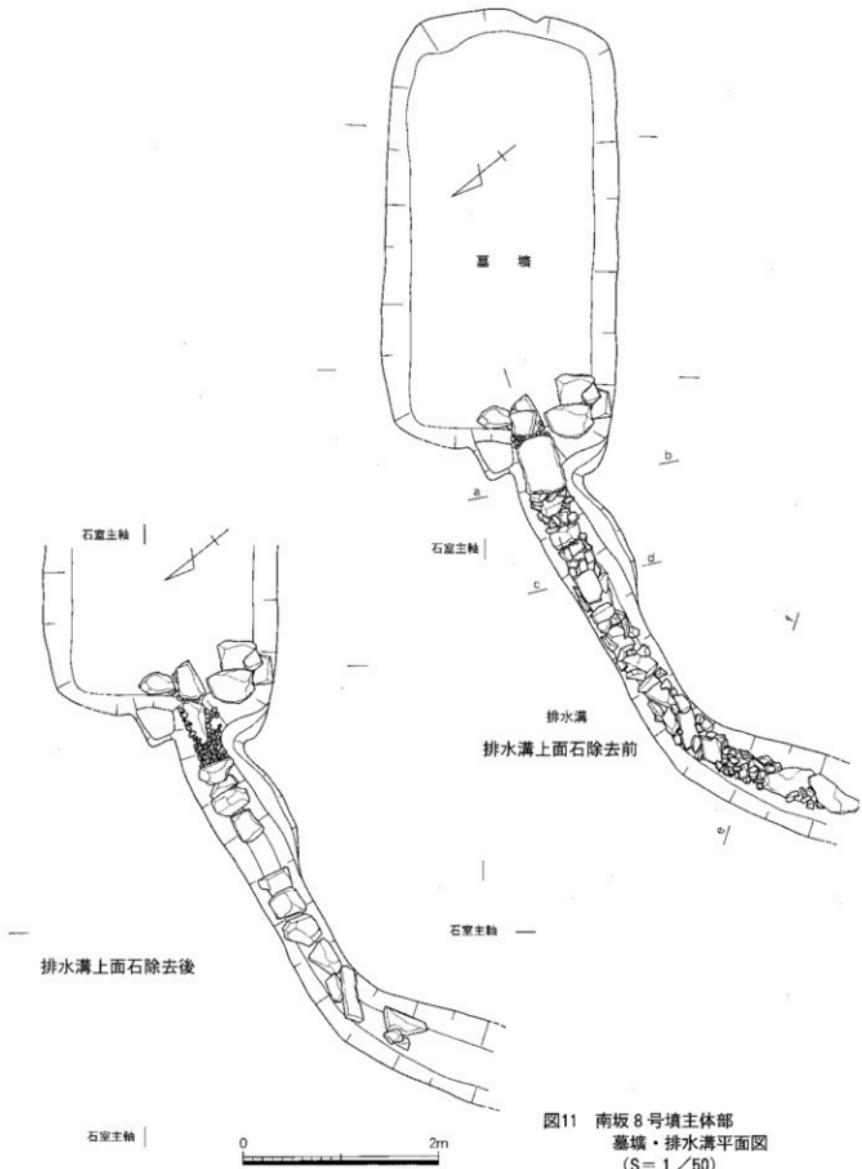


図11 南坂8号墳主体部
墓壙・排水溝平面図
(S = 1 / 50)

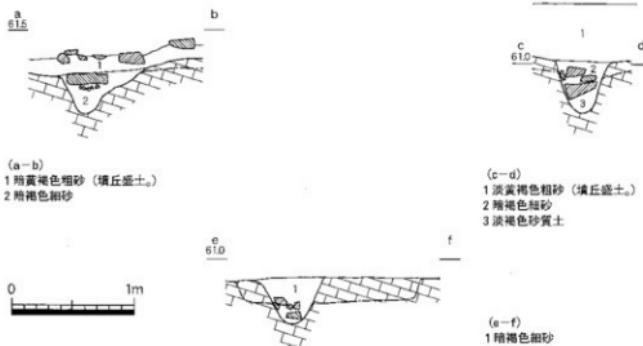


図12 南坂8号填排水溝断面図 ($S = 1/50$)

端を長軸断面図で礫がカマボコ形に盛り上がる部分に想定するなら、長さ3.3m程と推測される。

石室上面が破壊されているため、蓋石の有無、形態などは不明である。

墓壙 墓壙は埴丘築成前の面（図7-1第41層・図7-2第22層）、標高61.1～61.35m

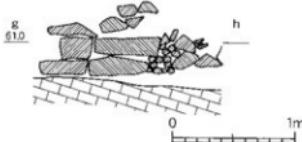
図13 南坂8号填墓壙・排水溝断面図 ($S = 1/40$)

付近から掘り込まれている。平面形は北西-南東約4.5m、北東-南西約2.2mの隅丸長方形である。深さ35～50cmを測り、埴丘築成前の地表面の上がっている南東側が深く、北西部側は浅い。断面形は逆台形状を呈する。中心軸はE40°Sを示し、石室の主軸とほぼ同じと見てよい。西角部分には、南西側の埴丘くびれ部へのびる排水溝がとりつく。

底面は、北東から南西に向けて傾斜しており、また頭位と推測される南東から北東へ向けて、わずかな傾斜が認められる。中央部には周囲よりも1～4cm凹んでいる部分も見られるが、明確な掘り方は認められない。

断面観察によれば、墓壙掘り方と石室石材との間には、図7-1第18層・図7-2第21層の土が認められる。図7-1・2において、南東側は下から4石、北西側は下から1石、北東・南西側は下から2石の石材の背後にこの土が認められる。これらの部分は墓壙に伴う側壁、すなわち側壁の内埴丘築成以前に構築された部分と推測される。

排水溝 墓壙に付設する溝で、墓壙と同様、埴丘築成前の地表面から掘り込まれている。墓壙西側の角より約50cm北東から発し、N77°Wへ約4m延びた後、W27°Sへ方向を変えて約1.7m延び、埴丘西側のくびれ部、標高60.30m付近に開口している。幅は0.5～0.8mを測り、墓壙寄りと開口する部分で広くなっている。深さは40～55cmを測り、断面形は深楕円形を呈する。底部の標高は60.34～60.68mで比高差は約35cmを測る。



溝の内部には、長さ30~50cm、厚さ約20cmの角礫及び、径10cm程度の円・角礫が混在してブロック状に入れられており、水は主にこの中を流れたと思われる。礫のブロックは、出口に近いほど底近くに位置しており、これは礫のブロックに傾斜を持たせることにより、排水機能を高めるためと考えられる。礫の上下は基本的に砂質土～微砂で埋められており(図12)、埴丘盛土は溝内部に落ち込んではいない。またこの排水溝埋土は、墓壙内部に構築された石室背後の土と色・質とも類似しており、排水溝と墓壙内部の石室はほぼ同時に構築されたと推測される。

墓壙と排水溝の境に、段差及び集水部のような掘り込みは認められず、また排水溝につながる部分の側壁にも水門のような施設は見あたらない。しかし両者の境界付近には、溝の底に置かれた長さ約25cmの石の周囲及び西側を、墓壙内に敷かれている径2~3cmの礫とはほぼ同大の小礫で充填し、さらにその上に長さ30cm幅20cmの平たい石をのせた施設が見られる。またその周囲を設掘して、溝の幅を墓壙の北西端辺の半分近くまで拡張している様子も認められる(図11、図13)。これは墓壙内が南西及び北西に緩やかに傾斜しているため、墓壙内の南西側を流れる水を効果的に集め、暗渠内が詰まらないよう、通過して排水するための構造と推測される。

これらのことから石室内の水は、①主に南西側側壁際を流れ、②北西側側壁の石の間から排水溝へ流れ込み、③墓壙と排水溝の間の礫群で通過され、④排水溝内の礫のブロック内を通過し、⑤排出、といった過程を経て処理されたと推測される。

排水溝埋土及び礫の間からも、遺物は確認できなかった。

出土遺物 当古墳から出土した遺物は僅少であり、石室内南東部の礫床直上から管玉1点が出土したほかは、埴丘盛土内および側壁背後の裏込めから土器細片が出土したのみである。

J1は緑色凝灰岩製の管玉で緑白色を呈する。残存長9.3mm、径5mmを測り、片方が欠損している。埴丘盛土内の土器細片は、周辺部の弥生時代の遺構(後述)に属する遺物と考えられるものが出土したが図示できるものはなかった。

第2項 南坂8号墳築造以前の遺構・遺物

概要 南坂8号墳埴丘盛土及び埴丘築成時の表土(図7-1第22・2

3層、図7-2第40~46層)を除去した地山面(図7-1第37層、図

7-2第48層)で検出された遺構群である。盛土を持たない前方部では、埴丘上で検出されている。遺構は後方部北西半部から前方部にかけての、埴丘築成以前は幅10mほどの尾根上平坦面であった部分、標高60.25~61.50m付近に位置しており、平坦面中央をはずれた急斜面寄りの部分に多く見られる。これは平坦面中央付近は、埴丘築成に伴う地山整形により削平されているためと思われる。

遺構は大きさ・形態とも多様なピット群であり、出土遺物から、弥生時代中期と後期に分けられる。埋土の様子から木痕の可能性があるものが大半である。本項では遺物を伴うピットを中心に記述する。

P1 前方部上の平坦面北西端部に位置する。平面形は東西0.57m南北0.59mの円形を呈する。深さは約0.40mを測る(図16)。底部の標高は、約60.15mを測り、断面形は深楕円形を呈する。埋土は2層認められる。遺物は第1層に多く、多量の土器片が、東側から淡黒褐色細砂と一緒に投げ込まれた形で出土している。

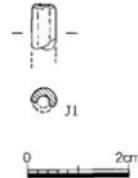


図14 南坂8号墳
石室内出土遺物
(S=1/1)

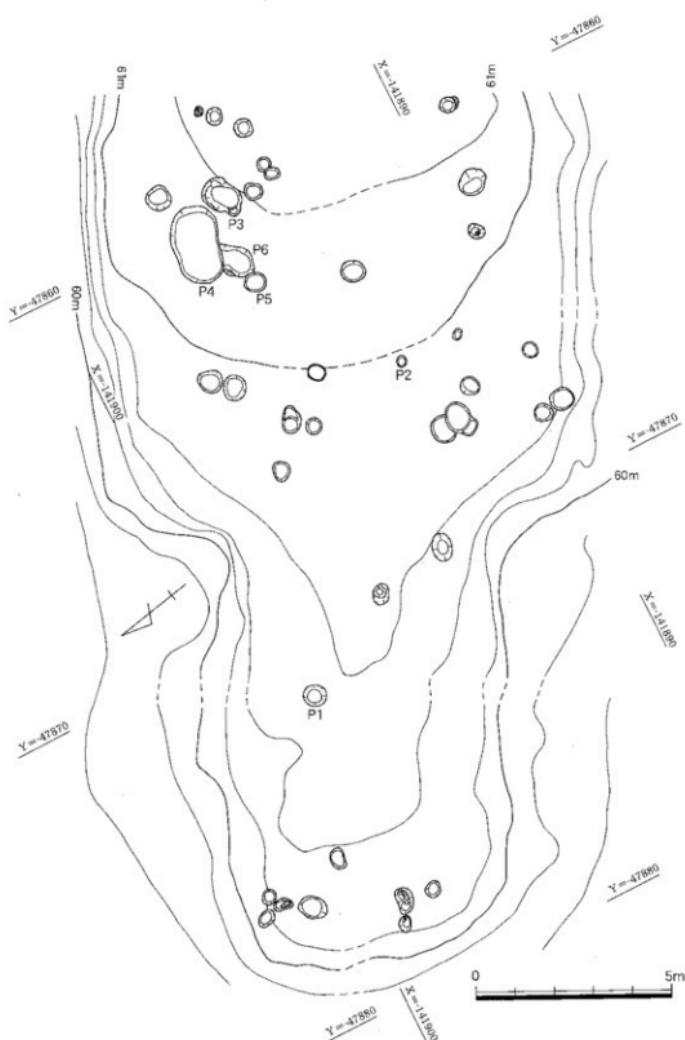


図15 弥生時代面遺構配置図 ($S = 1/125$)

図示できた図17の土器をはじめ、すべてが破片であり、完全に復元できるものはない。2の台付鉢と5の脚部は別個体であり、4・6・7の高坏もそれぞれ別個体である。

出土遺物から、本遺構は弥生時代中期後半の範疇にあると考えられる。

P 2 尾根筋の中央やや南寄り、後方部築造以前の面の、表土直下から検出されたピットである。平面形は、径約0.25mの円形を呈し、深さは約0.22mを測る。断面形は、急な逆台形状を呈する。検出面は、標高61.0m付近、底部の標高は60.80m付近である。埋土は1層確認された（図18）。

遺物は若干の土器片が出土しているが、図示できるものはない。

本遺構の時期は、出土した土器片から弥生時代中期後半と推測されるが、埋土が周辺部の木痕と推測されるピットのそれと同じであるところから、人為的に掘削されたピットではない可能性がある。

P 3 後方部築造以前の面の表土直下、標高61.25m付近より検出されたピットである。尾根上平坦面の北東側急斜面際、標高61.25m付近に位置する。平面形は東西に軸を持つ、いびつな楕円形を呈する。長径約1.1m、短径約0.85m、深さは約0.7mを測る。断面形は逆台形状を呈し、底部は平らである。底面の標高は約60.50m付近である。埋土は6層確認され、木痕と推測される第6層以外は、ほぼ水平に堆積している（図19）。

埋土各層からは、土器細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

出土遺物から本遺構の時期は、弥生時代後期の範疇にあると考えられる。

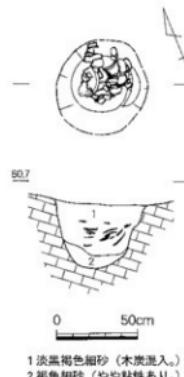


図16 P 1 平・断面図 (S = 1 / 30)

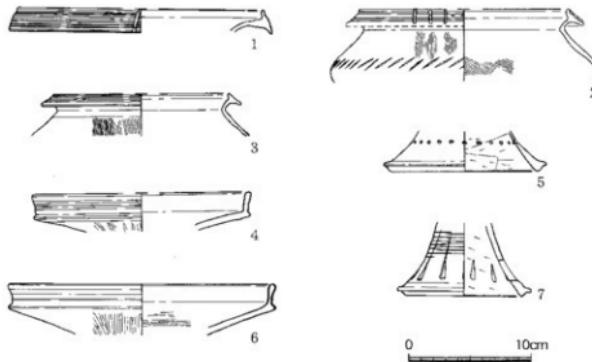


図17 P 1 出土遺物 (S = 1 / 4)

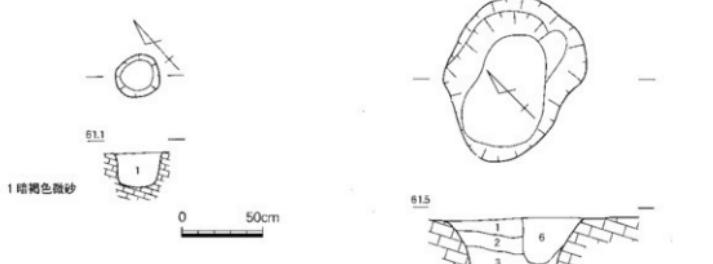


図18 P2 平・断面図 (S = 1 / 30)

P4 P2の北側、標高61.15m付近に位置している。平面形は、長径約2.0m、短径約1.2mの、東西方向に軸を持つ楕円形である。深さは0.3~0.4mを測り、断面形は底部東側の下がる深皿形を呈する。埋土は4層で、第2層と第3層の間には、焼土層及び木炭層が認められる(図20)。底部は標高60.80m付近である。

堆積状況は、西からの斜め堆積であるが、木炭及び焼土層はほぼ水平に堆積している。このことから、半ばまで第3・4層によって自然に埋没した後、火を焚くために利用され、その後再び第1・2層によって自然に埋没した過程が想定できる。

埋土中各層から、土器細片が少量出土しているが、図示できるものはない。

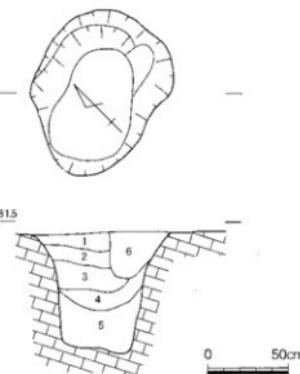


図19 P3 平・断面図 (S = 1 / 30)

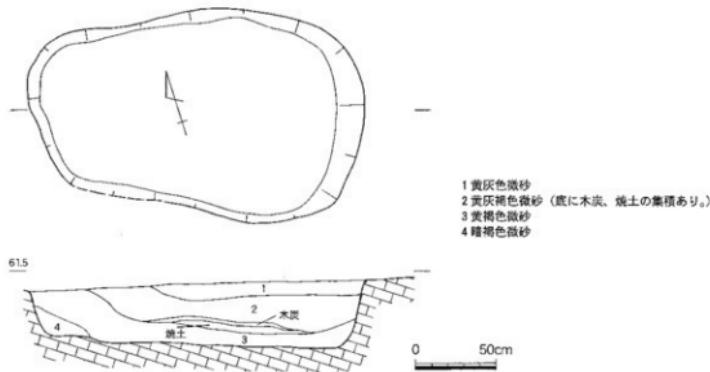


図20 P4 平・断面図 (S = 1 / 30)

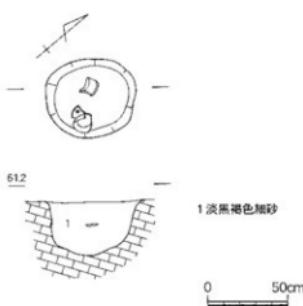


図21 P5 平・断面図 (S=1/30)

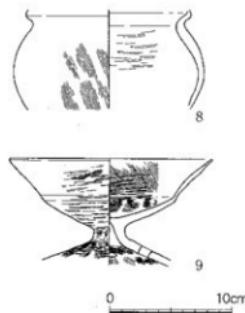


図22 P5 出土遺物 (S=1/4)

出土遺物から本遺構は、弥生後期の範疇にあると推測される。

P5 前方部築造以前の面の表土直下、標高61.1m付近に検出されたピットである。後述するP6の西で切り合っておりP6を切っている。平面形は、径約0.5mの円形を呈する。深さは約0.35mを測り、断面形は深楕円形である。底部の標高は約60.75mを測る。埋土は1層である。

遺物は土器片が埋土中に散在しているが、図示できるのは図22の2点だけである。9はほぼ完形の高環であり、横倒しになって、底から20cmほど浮いた状態で出土した。その他の遺物の中には図示できないが、丹塗りの高環片も混じっていた。

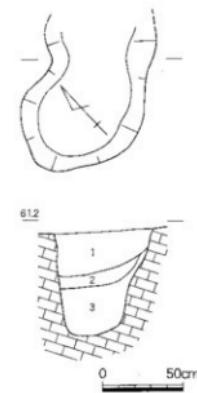
遺構の時期は、出土遺物から、弥生時代後期後葉と推測される。

P6 前方部築造以前の面の表土直下、標高61.10m付近で検出されたピットである。P4の西側に位置し、P4に北東側を切られている。平面形は、長径1.0m以上、短径約0.75mの南西—北東に軸を持ついびつな楕円形を呈すると推測される。底部の標高は60.50m付近であり、深さは約0.65mを測る。埋土は3層認められ、東側から埋没していた様相を呈している。

埋土中からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。しかし周辺には、弥生時代後期のピットが集中しており、本遺構の時期もそのころと推測される。ただし本遺構は、P5にもわずかに切られているところから、弥生時代後期後葉より下ることはないと考えられる。

第3項 南坂8号墳築造以後の遺構・遺物

概要 本項で報告する遺構・遺物は、南坂8号墳の墳丘・石室上、及び墳丘周辺部から検出されたものである。墳丘周辺部に位置する遺構は、墳丘盛土が及んでいないため、前述した弥生時代中・後期



1灰色微砂 (バイラン粒入る。)
2棕褐色微砂 (バイラン粒入る。)
3褐色微砂 (バイラン粒入る。)

図23 P6 平・断面図
(S=1/30)

の遺構が形成された地山面と、基本的に同じ面（図7-1第37層、図7-2第48層）から検出されている。ただし弥生時代の遺構と、位置的な重複は見られない。遺構はすべて埋葬施設である。

土器棺墓（図24） 後方部の北西斜面、前方部と連結するあたりで発見された土器棺墓である。腐植土および表土を除去中に検出され、擾乱は受けていなかった。また、土丘で若干押しつぶされていたが、土器内部は中空を保っていた。この状況からすれば、南坂8号墳との前後関係は明らかで、8号墳築造後に土器棺は埋葬されている。

土器棺は、長軸55cm、短軸45cmほどの土壇に、前方部側にやや傾斜して壺（11）が、その上部に高環（10）が置かれた状態で検出された。その土壇の下半は直径30cmほどになり、壺がちょうど収まり安定していた。また、壺の頸部・口縁部は打ち欠いて使用されている。高環も、脚部の裾が出土土器の中からは発見されておらず、やはり打ち欠いて使用されたものと思われる。

土器棺内部には、ほとんど土砂等は堆積しておらず、土器棺の一部の破片が重なっていただけである。そこで注意しながら土砂等を取り去っていったが、骨や歯の痕跡は認められなかった。

土器棺の壺の体部は、球形に近い形態であるが、土丘によりひずんでおり、実際はもう若干、肩の張りも弱く細身体となる。底部は申し訳程度に、平らな面を残す丸底である。成形・調整痕は、外面ハケメのち下半にヘラミガキ。内面下半は指頭圧痕が見られる。上半は斜めにヘラケグリ。また、肩部に暗文風のヘラミガキが縦に、さらにハケメ具による列点文が2つ施されている。

高環は杯部が大きく開き、口縁部がやや外反する。柱状部はやや開き気味である。

また、杯部に柱状部を差し込んで接合している。中心部分に刺突による孔が認められる。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。

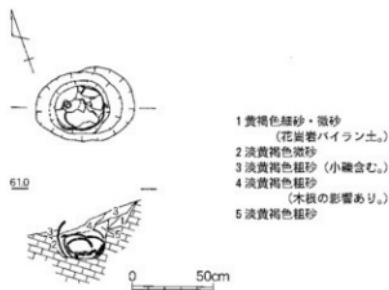


図24 土器棺墓平・断面図 (S = 1/30)

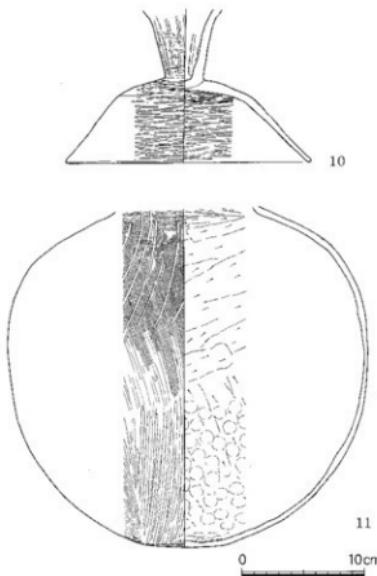


図25 土器棺 (S = 1/4)

これらの土器は、古墳時代前半期（津寺土器編年の古墳前期II）の特徴を示す。この土器棺の年代は、主体部石室の排水溝が、この下部から検出されていることから、南坂8号墳の年代決定の下限資料となる。

埴輪棺墓 南坂8号墳の北東に位置する。墓壙は地山を掘り込んで形成し、円筒埴輪二個体を棺としている。埴輪棺両端が墓壙床面から浮かないようにするために、円筒埴輪の破片を敷いて、埴輪棺を固定している。さらに埴輪棺の隙間を埋めるように、円筒埴輪片で棺を覆っていた。墓壙は暗黄褐色を呈する花崗岩の風化土で充填されており、副葬品等は確認できなかった（図26）。

接合作業の結果、3個体分の円筒埴輪を確認した（12～14）。3個体とも黄褐色を呈し、外面調整は二次調整を省略し、一次調整の縦ハケのみ観察できる。

口縁部はいずれの個体も端部を外傾させ、完形に復元し得た12・13の埴輪の最下段タガに押圧技法はみられず、底部調整のみ施されている。また倒立技法の痕跡はみられなかった。ヘラ記号は3個体とともに確認されるがいずれも同一の記号ではない。また、黒斑もみられなかった。いずれの円筒埴輪も川西編年のV期の特徴を示しており、本埴輪棺の年代も5世紀末から6世紀初頭の時期と思われる。

石蓋土壙墓1 後方部の南東、標高約60.30m付近に位置する。埴輪棺より南西方向に約5m離れている。平面形は、長軸約1.05m、短軸約0.60mの東西に軸を持つ、いびつな楕円形である。底部の標高は60.1m付近で深さは約0.3mを測る。断面形は底部が凹凸した浅皿状を呈する（図28）。埋土は2層みとめられ、第1層上に蓋石であったと考えられる、長さ約0.4mの角礫が2石所在している。遺物は図29の須恵器（15～17）が、第1層内及びその上の角礫の間から、底から浮いた状態で出土している。

本構造は、出土遺物や検出状況から石蓋土壙墓と判断したが、掘り込まれている地山や、埋土中に木根が多数入り込み、残りが非常に悪い。そのため、遺物や蓋石の配置、頭位方向なども不明である。

本構造の時期は出土遺物から、6世紀中葉と推測される。

石蓋土壙墓2（図30） 前方部の西側裾部で検出された石蓋土壙墓である。腐植土、表土の除去過程で石が露呈していたが、当初は8号墳の墳端を画する石列の一部と想定して掘り進めていた。しかし石の配列が、古墳墳端とは関係なく露呈してきたので、石蓋土壙墓と判明した。一部上半の石を除去した後に気づいたので、断面図では上半の石が表現されていないなど若干の齟齬がある。蓋石4個、その上部にさらに4個の石が積まれていた。

土壙は長さ0.9m、幅0.4m、深さ0.2mほどの規模である。土壙内には須恵器杯身（19）と蓋（18）とが、長軸方向に対して埋納されていた。枕とするには配置が不自然である。副葬品の一つと理解しておく。他の副葬品は検出されていない。

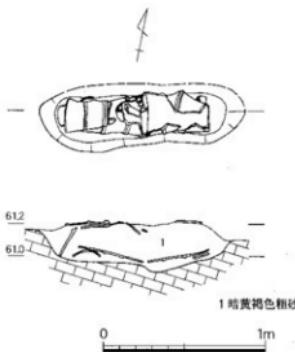
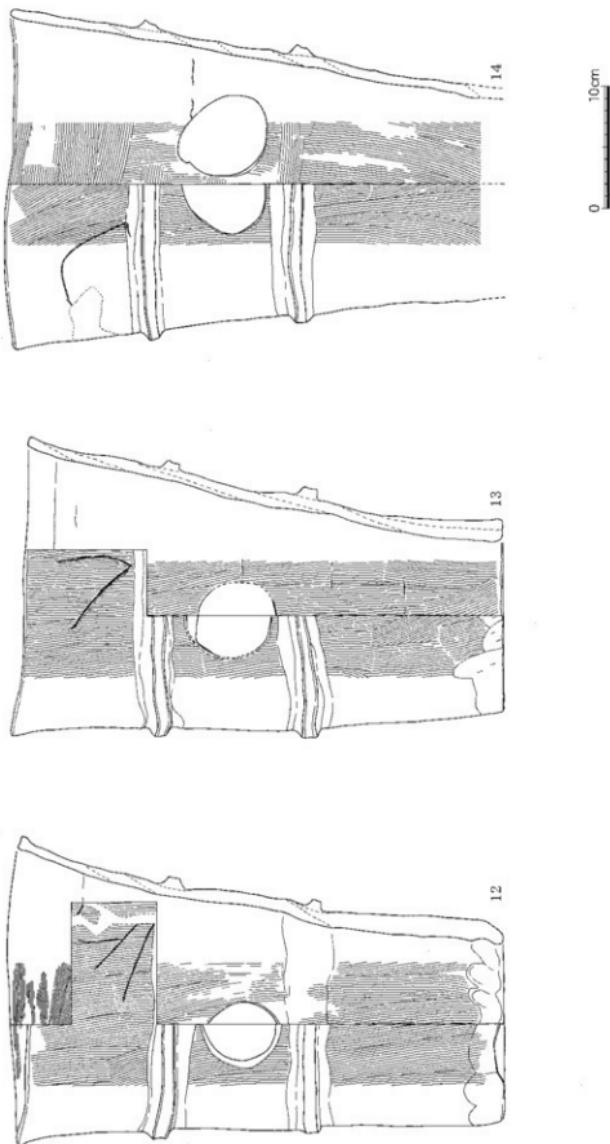


図26 壱輪棺墓平・断面図 (S = 1/30)

圖27 插繪棺 (S=1/4)



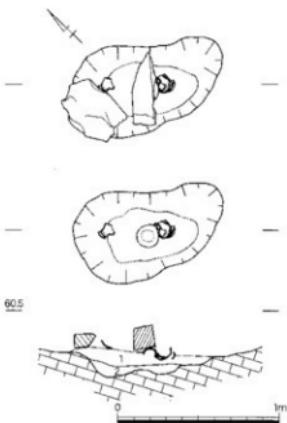


図28 石蓋土壤墓1平・断面図
(S=1/30)

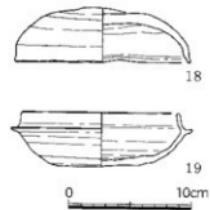


図29 石蓋土壤墓1出土遺物 (S=1/4)

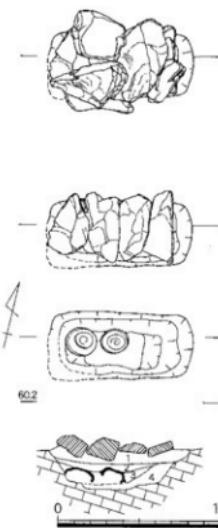


図30 石蓋土壤墓2平・断面図 (S=1/30)

須恵器の特徴は、杯身が口径13cm、立ち上がりが1.4cmほどで、直立気味である。蓋は口径1.4.5cmほど。口縁部の稜は明瞭ではないが、内側に段を形成している。ケズリ痕は、両者とも体部半ばまでは及んでいない。また蓋内部には当て具痕が残されている。主体部2の須恵器と比べると、杯身の返りが大きく、また蓋の口縁部内側に凹線が巡るなど古式を示し、6世紀後半中頃である。

主体部2(図32) 当初、主体部の内部に落ち込んでいた攪乱石を除去していたところ、須恵器が検出された。須恵器は、杯身(21)と蓋(20)が対に配置され、枕石を彷彿とさせる状況であった。

そこで周囲に注意を払うと、主体部とは別個の石室が認識できた。この石室を主体部2とする。

この石室は、幅1.1m、長さ1.8m以上（一部欠損）の土壌に構築されている。石室内寸は、幅0.5m、長さ1.45m以上、深さ0.5mを測る。石室下半に比較的大きな平たい石を使用し、上半に人頭大の石を3ないし4段ほど積み上げているようである。西端の壁は、主体部の石室に接するように築かれているが、それとは全く別個に構築された石室である。残念ながら攢乱により、片側の小口部が欠損しているので、羨道ないし入口が構築されていたかは不明である。枕石としての須恵器が出土していることから、大きくは欠損していないと思え、石室の長さが1.8mぐらいの小形石室と推定される。石室内部は、土層断面図（図33）のように、荒らされた形跡の見られない第2層と流入土の第1層とで埋まっていた。須恵器・副葬品は、石室床面から出土している。副葬品は、須恵器を除くと、鉄鎌（M1、M2）の2点である。また石室は大きく攢乱を受けている状況であるが、床面周辺は荒らされおらず、副葬品も埋葬時の位置を保っていると推定できる。

須恵器の特徴は、杯身が口径12.5cm、立ち上がりが3mm程度で大きく内傾している。蓋は、口縁部に稜はほとんど見られず、ナデにより僅かに区別される。口縁端部も丸く収まり段を形成していない。ヘラケズリ痕は体部1/3程のところまで残されている。6世紀末～7世紀初頭頃であろうか。

鉄鎌は、平根式。同一の形式である。茎には木質が残存している。北側壁に沿うように、おそらく

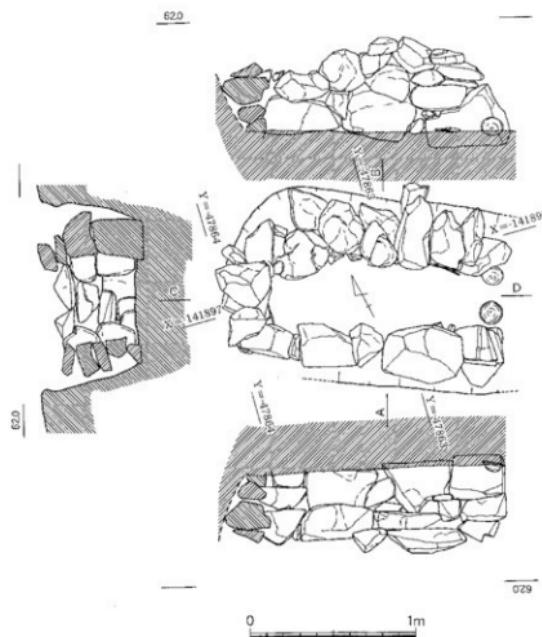
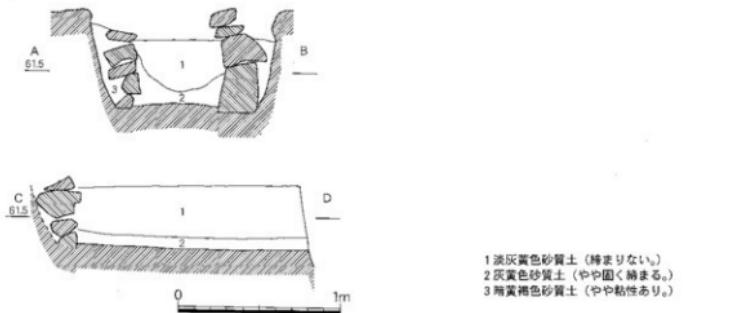


図32 主体部2平・断面図 (S=1/30)



肩部ぐらいの場所に置かれていた。

この主体部2は、当尾根に散見される石蓋土壤墓の被葬者と、階層的には同類であろう。前半期古墳との関わりは不明だが、石蓋土壤墓群の被葬者はおそらく同族関係にあり、この尾根を墓域としていたと思われる。

第4項 その他の遺物

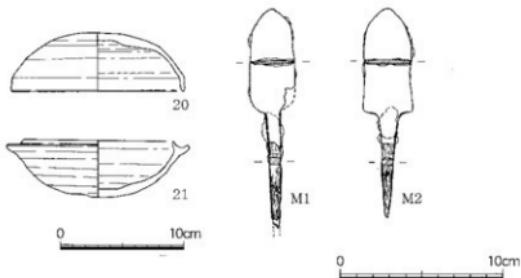


図34 主体部2出土遺物 ($S = 1/4 \cdot 1/3$)

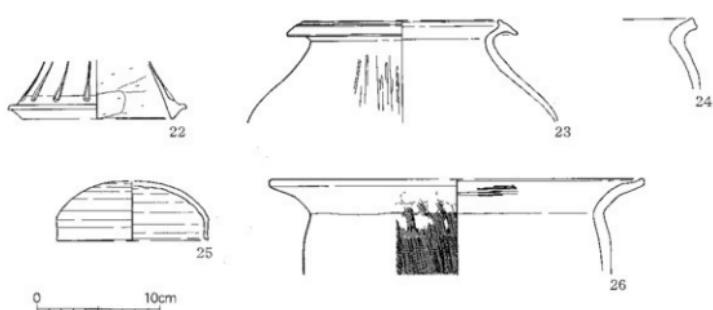


図35 その他の遺物 ($S = 1/4$)

南坂 8 号墳周辺や、墳丘築造以前面の表土中からは、土器片が散在している。大半は小破片で、図示できたのは図35の22～26のみである。22の高環脚部及び24の甕は、弥生中期後半、23の甕は弥生時代後期の範疇にあると推測される。25は須恵器の环蓋で、時期は6世紀前半～中葉と推測され、出土地点が、後方部の東側であるところから、石蓋土壙墓1に伴う遺物であった可能性がある。26は、土師器の甕で、時期は6世紀後半～7世紀初頭と推測される。

註

- (註 1) 岡山市埋蔵文化財分布地図 岡山市教育委員会 1983
(註 2) 『津寺跡3－山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104
　日本道路公团広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1996
(註 3) 陶邑編年のTK43 田辯昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981
(註 4) 陶邑編年のTK209かTK217 田辯昭三 註3前掲書

第3節　まとめ

南坂 8 号墳の築造時期について 本古墳は発掘調査の結果、全長約27mの前方後方墳であることが判明した。当古墳の主体部である竪穴式石室から出土した遺物は、管玉1点と少なく、遺物から時期を確定するのは困難である。

しかし後方部の高さに対して前方部が平たく、そして前方部前端がほとんど開かない柄鏡状を呈している当古墳の墳形は、古墳時代前期に築造された可能性を示していると推測される。

また当古墳の墳丘上に築造された土器棺の年代は、前述のように古墳時代前半期(津寺土器編年の古墳前期Ⅱ)(註1)と推測され、また墳丘盛土直下より検出された弥生時代後期の土器(図21-9)は後期後葉(註2)の時期を示す。

土器棺の時期は、当古墳の墳丘築造時期の下限をあらわしていると考えられるところから、当古墳の築造時期は、古墳時代前期前葉と推測される。

南坂 8 号墳の石室について 当古墳主体部の竪穴式石室は、石室主軸が南東-北西であり、推定頭位が南東である。図36の左側は前期古墳の埋葬施設の主軸と方位を、右側は、吉備南部の弥生墳丘墓の主軸と方位を示したものである(註3)。吉備における、前期前半における古墳の埋葬施設は、主軸方向が南北で、かつ頭位は北を示すものが優位であると指摘されている(註4)。一方弥生墳丘墓の埋葬施設は、東西と南北の主軸方向を指向する2群が存在し、量的には前者が優勢であるとされている(註5)。当古墳の主体部主軸方向は、前期古墳よりもむしろ弥生墳丘墓に近い値を示している。

また石室壁面の壁面は、かなりの部分が、垂直あるいは外傾して立ち上がりっている。一般に前期古墳の竪穴式石室は、棺を設置してから構築されており、壁面が内傾しているが、弥生墳丘墓の竪穴式石室壁面は垂直あるいは外傾して立ち上がり、内傾するものは見られない(註6)。

そして竪穴式石室の規模は、内法で長さ約3.5m幅0.95～1.1mを測り、いわゆる短小型である(註7)。前期古墳と弥生墳丘墓の竪穴式石室の長さには、顕著な差があり、弥生墳丘墓の方が短小であることはすでに指摘されている(註8)。表1は吉備地方の弥生墳丘墓における竪穴式石室の寸法と、長幅比を示したものである(註9)。弥生墳丘墓は2.44～3.19、前期古墳の値は4.00～6.88の値を示す。当古墳の値は3.18～3.68を示し、前期古墳より弥生墳丘墓に近い。

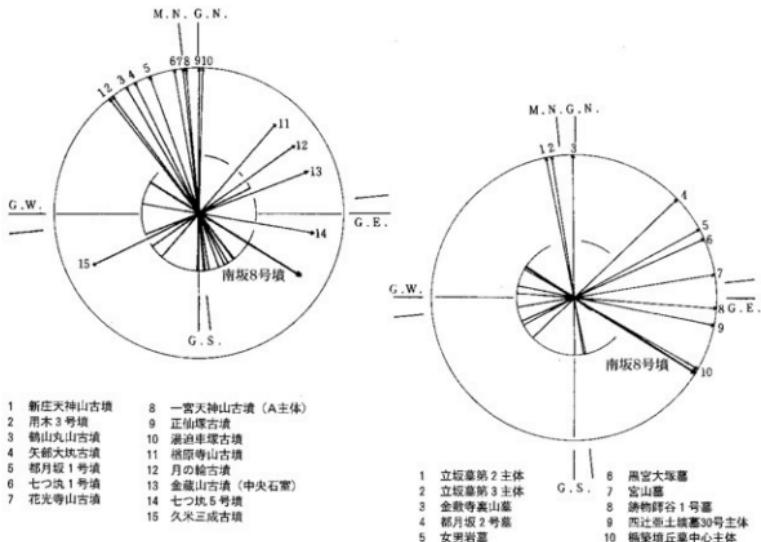


図36 吉備の前期古墳・弥生墳丘墓における埋葬施設の主軸と方位

種類	名称	長軸／短軸	長さ(m)
古墳	南坂8号	3.18～3.68	長3.50短南東1.10北西0.95
弥生墳丘墓	鶴物谷1号A	2.99～3.19	長2.90短西0.97東0.91
弥生墳丘墓	黒宮大塚	2.44～2.75	長2.20短東0.90西0.80
弥生墳丘墓	矢藤治山	2.70	長2.70短北1.00南?
弥生墳丘墓	都月坂2	2.94	長2.65短0.9.0
弥生墳丘墓	鶴物谷2号F	2.75	長2.20短0.80
弥生墳丘墓	宮山古墳	2.70	長2.70短1.00
弥生墳丘墓	金數寺裏山	2.89	長2.60短0.99
古墳	七つ塹1	4.42～5.30	長5.30短北1.2南1.0
古墳	一宮天神山2号	6.88	長5.50短0.80
古墳	一宮天神山1号A	4.00	長4.00短1.00
古墳	雲山鳥打1号	4.54～4.92	長5.9短1.2～1.3
古墳	都月坂1号	5.0～5.71	長約4.0短約0.7～0.8
古墳	金藏山	主石室4.69～5.30 南西室5.33～6.26	長6.1短東1.3西1.15 長7.2短東1.35西1.13
古墳	鶴山丸山	2.67	長4.0短1.5
古墳	浦間茶臼山	5.83	長7.0短1.2

* 小数点第3位以下は四捨五入

* 雲山鳥打弥生墳丘墓は図面から計測したところ2.78の値を示した

表1 吉備の前期古墳・弥生墳丘墓における堅穴式石室の長幅比

これらの特徴は、当古墳の堅穴式石室が弥生墳丘墓の影響を強く残すものであることを示していると推測される（註10）。

排水溝について 前方後円墳には、しばしば石室床面の下方に連なる礫使用の排水溝がみられるが、弥生墳丘墓にも似たような排水溝が設置されることがある（註11）。

堅穴式石室に連なる排水溝は、県内でも数カ所で確認されている。当古墳の南西10kmのところに位置する七つ塹1号墳（前期初頭・岡山市）で検出された排水溝は、当古墳とは異なり、墳丘盛土の上から掘り込まれており、そして主体部の主軸に対して約4°ずれて、わずかに湾曲しているが、ほぼまっすぐ墳丘の中軸付近を前方部側へのびている（図37）（註12）。そしてこの排水溝のラインは後方部の南北方向の墳端ラインとほぼ平行である。このことから七つ塹1号墳の排水溝は、墳丘・主体部を意識してまっすぐに掘削された、規格性の強いものであったといえる。

川東車塚古墳（前期後葉・真庭市）で検出された排水溝は、七つ塹1号墳と同様、墳丘盛土上面から掘り込まれ、墓壙下段の中央付近（中心埋葬の主軸線から西へ20cmほどずれた位置）を起点として南南西に向かってほぼ直線上にのびる（註13）。この排水溝は端部が攢乱により失われており全貌は把握できないが、墓壙が墳丘主軸に直交して南北に軸を持つため、七つ塹1号墳とは異なり、後円部墳端にのびてゆくと推測される。しかし、実測図より判断して、墓壙の主軸とほぼ同一方向にまっすぐ掘削されているところは、七つ塹1号墳と同様に計画性の強いものであることが推測される。

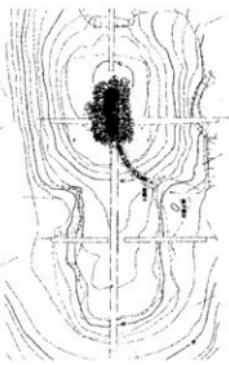
従ってこれらの排水溝の形態や掘削方向は、墳丘あるいは主体部の主軸の方向と、厳密な関係にあったことが推測される。

それに対し当古墳の排水溝は、主体部の主軸に対して約30°ずれた方向に掘削されており、しかも「への字」に屈曲してのびている。また墓壙あるいは（墓壙の主軸は、墳丘の主軸とほぼ平行であることから）墳丘を意識して掘削することが可能だったにもかかわらず、そのようになされていない。このことは当古墳の排水溝が、七つ塹1号墳や川東車塚のそれとは異なり、墳丘や主体部を意識することなく、また直線を指向する事もなく掘削されたことを示していると考えられる。

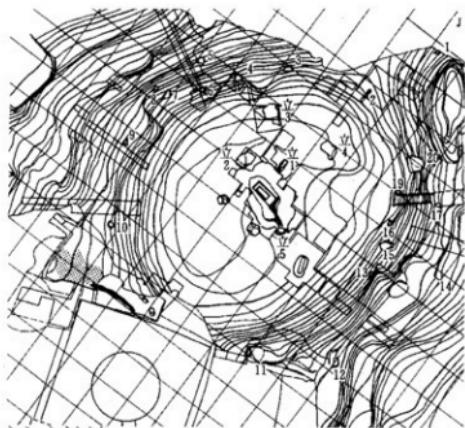
一方当古墳から約6km南に位置する橋築弥生墳丘墓でも堅穴式木槧ではあるが、中心主体から墳丘外へのびる排水溝が確認されている（註14）。この排水溝は、全部発掘調査されていないため全体的な方向は不明であるが、木槧の中軸に対して約20°南西にずれた方向へ掘削されている（註15）。そして七つ塹1号墳の排水溝が墓壙に接する辺りすでに直線状であるのに対し、この排水溝はすでに蛇行気味である。このことから、橋築弥生墳丘墓の中心主体排水溝は、七つ塹1号墳とは異なり、主体部を意識することなく、また直線を指向することなく掘削されていると推測され、当古墳の排水溝により近い性格を持つものと考えられる。

七つ塹1号墳あるいは川東車塚の排水溝と、橋築弥生墳丘墓のそれとの差異が、前期古墳と弥生墳丘墓の排水溝の差異をあらわす普遍的なものかどうかは、排水溝を伴う弥生墳丘墓の調査例が少ない現況では不明である（註16）。しかし少なくとも、当古墳の排水溝が橋築弥生墳丘墓のそれにより近い性格を持つことは確かなようである。

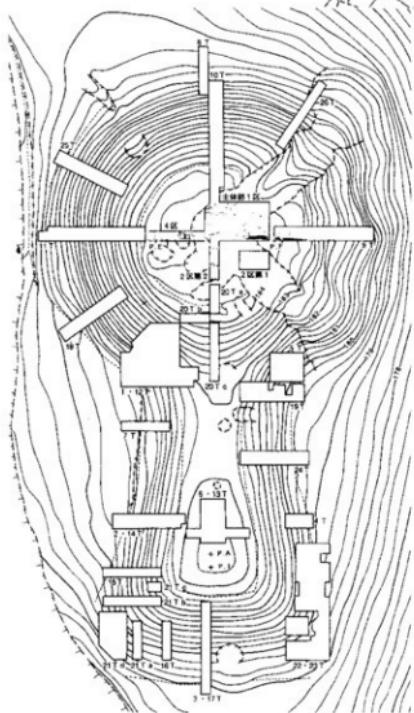
構築墓壙について 今回の調査によって、南坂8号墳の墳丘は、地山を整形した後、後方部側に盛土をおこなって築かれていることが確認された。盛土はまず、整形された地山上の後方部に相当する部分の端部に、断面三角形の土堤状に盛土をおこない、次に土堤状の盛土の中に、外から中へ土を流しこみながら墳丘を築き、その時点で堅穴式石室の壁面を構築していることも判明した。



南坂8号墳



桶築弥生墳丘墓



川東車塚古墳



七つ塚1号墳

図37 古墳・弥生墳丘墓における排水溝類例

盛土によって構築される墓壙、いわゆる構築墓壙（註17）は、本来、墓壙を墳丘築成時の地表面あるいはそれに若干の整地をおこなって造られた面から掘り込み、墳丘築成後に墓壙を掘り込む掘り込み墓壙を持たない弥生墳丘墓（註18）と不可分の関係にあると推測される。当古墳から約8km南東に位置する矢藤治山弥生墳丘墓にみられる構築墓壙はその例であろうと考えられる（註23）。

しかし構築墓壙を伴っている古墳は、メスリ山古墳（註19）（奈良県）、森将軍塚古墳（註20）（長野県）、国分尼塚1号墳（石川県）（註21）など全国に所在し、最近では発掘調査の増加に伴いその数も漸増している。これらの古墳の築造時期は前期に限られず、森将軍塚古墳に近接する森1・9・10号墳のように6世紀に下るものもあり（註22）、古墳の規模や形態も、当古墳のような全長27mの前方後方墳に限られず、メスリ山古墳（全長220m）や森将軍塚古墳（全長98m）のような前方後円墳、成塚向山1号墳（一辺22m）のような方墳、森2号墳（直径20m）のような円墳などさまざまである。そして調査例の少ないためでもあるが、現在のところ地域的なまとまりも顯著にはみられない。

これらのことから、構築墓壙は、地域的、時代的に限定される方法ではない可能性が高く、従って当古墳の墳丘は、弥生墳丘墓の影響が認められる堅穴式石室及び排水溝とは、性格が異なると推測される。

被葬者について 今回の調査において、堅穴式石室から被葬者の性格の判明する遺物はほとんど出土しなかった。ここでは当古墳の立地から、被葬者の性格を考えてみたい。

当古墳の位置する足守川上流部の足守地域においては、25m以上の比較的大きな盟主的古墳が、古墳時代前期の前方後方墳→古墳時代中期前半の方墳→古墳時代中期後半の円墳と形態を変えながら、複数の単位に分かれて築かれている。当古墳は規模的に、古墳時代前期の足守地域における盟主的立場の古墳の一つと考えられ、近接する位置にあり古墳時代中期前半と推測される方墳である南坂2号墳、同じく古墳時代中期後半と考えられる円墳である南坂9号墳と続く、盟主的古墳の単位を形成していたものと考えられる（註23）。

一方当古墳から約2km南の上土田地区には、全長27mの前方後方墳である上土田4号墳、全長26.5mの前方後方墳である上土田1号墳が立地している（註24）。この2墳も規模的に当古墳と同様盟主的立場の古墳と推測され、言い換えれば当古墳より2km南には別の盟主的古墳の単位が存在したことになる。

これらのことからは、当古墳の被葬者は、盟主的立場にあり、古墳時代中期後半まで続く盟主的古墳の単位の始祖ともいえる人物であるが、その勢力範囲は、三井谷を中心としたあまり広くない範囲に限られていたと推測される。

古墳築造以前の遺構について 今回の調査の結果、当古墳の位置する尾根上からは、弥生時代中期後半、弥生時代後期後半の遺構が確認された。これら2時期の遺構は、後方部の盛土の下から検出されている。

現在当古墳の周辺部や山際や尾根上には、当古墳南西部の尾根上に位置する南坂遺跡や、北側の谷入り口の扇状地に広がる、三井谷遺跡などの弥生時代の遺物を含む散布地が位置しており（註25）、該期の遺構の存在が想定されている。実際に発掘調査の実施された遺跡は多くはないが、岡山市教育委員会によって調査された南坂遺跡では、弥生時代後期の住居跡や、弥生時代中・後期の遺物が確認されている（註26）。今回の調査で確認されたのは、少數のピットと少量の土器のみで、遺構の性格は判断できなかった。しかし上記のように立地的に近似している、南坂遺跡において弥生時代中期後

葉～後期の集落が確認されており、また今回の調査区の外側の尾根の流土中には、弥生土器片が散布していることから当古墳の立地する尾根上にも、弥生時代中・後期の集落の存在が予想される。そして当古墳の立地する周辺は、その末端と推測される。

古墳築造以降の遺構について 今回の調査において、当古墳の墳丘上及び周辺部から、土器棺墓、埴輪棺墓、石蓋土壙墓1・2、主体部2の計5基の埋葬施設が確認された。

土器棺墓は、墓壇の掘り方主軸の方向が東西を指向していると考えられ、8号墳主体部のそれとは20°近くのずれがある。しかし、後方部の末端とはいえ、墳丘上に構築されている点、使用された土器が、古墳時代前期前半を示し、南坂8号墳の築造年代と大きく隔たっていないと推測されるところから、南坂8号墳の被葬者との密接な関係が推測される。被葬者の性別、南坂8号墳の被葬者と具体的な血縁関係は不明である。

また被葬者の年齢に関しても不明である。しかし時期は弥生時代後期にさかのぼるが、鹿田遺跡の土器棺（壺棺2）から生後まもなく死亡した乳児の歯冠が出土しており、（註27）その歯冠の出土した壺棺よりも当壺棺は一回り小さく、また打ち欠き口縁の径も約12cmとかなり小さいことから、乳児である可能性がある。

この土器棺墓は蓋に高環を使用している。岡山県内における土器棺の蓋に高環を使用する例は、美作地域で弥生時代後期終末まで下る例が確認されているが、おおむね弥生時代後期までである（註28）。当土器棺墓は南坂8号墳の堅穴式石室同様、弥生時代の土器棺墓に近い性格を持つと考えられる。

土器棺墓の次に築かれた埴輪棺墓は、5世紀末～6世紀初頭の年代を示し、土器棺の築造から、埴輪棺の築造までは100年以上の断絶が認められる。一方埴輪棺墓の後に築造される石蓋土壙墓1、石蓋土壙墓2及び主体部2の築造時期は、それぞれ6世紀中葉、6世紀後半、6世紀末～7世紀初頭であり、築造時期の断絶はみられない。従って今回検出された埋葬施設は土器棺墓と、埴輪棺墓・石蓋土壙墓1・同2・主体部2の2グループに分かれることになる。

石蓋土壙墓1、石蓋土壙墓2、主体部2は、1世代を20年とするならば、ほぼ3代連続してこの場所に構築されたと推測される。さらに埴輪棺墓と、石蓋土壙墓1との築造年代の差も比較的少なく、埴輪棺も含めて4世代連続して築かれたとの推測も可能であろう。

以上のことから当古墳の位置する尾根上は、古墳時代前期前半に南坂8号墳及び土器棺が構築され、その後一時中断するが、5世紀末～7世紀にかけて再び連綿と埋葬施設が営まれる、墓域ともいえる場所であったと考えられる。

註

（註1）高橋編年10-d・吉備の考古学的研究I-4・亀川上層

（註2）高橋編年VIII-d・弥生土器の様式と編年V-5・鬼川市Ⅲ・津寺弥生後Ⅲ

（註3）北條芳隆「墳丘と方位から見た 七つ塹1号墳の位置」『七つ塹古墳群』七つ塹古墳群発掘調査団 1987の図に南坂8号墳のデータを加筆したものである。

（註4）註3前掲論文。なお前期の新段階においてこの北頭優位の伝統は崩れつつある。

（註5）註3前掲書

（註6）宇垣匡雅「弥生墳丘墓と前方後円墳」『新版日本の古代4・中国・四国』角川書店 1992

（註7）都出比呂志氏は長幅比4.5未満を短大型、以上を長大型に分類している。『堅穴式石室の地域性の研究 昭和60年度科学研費補助金（一般C）研究成果報告書』大阪大学文学部国史研究室 1986より

（註8）近藤義郎「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学6・変化と画期』岩波書店 1986

- (註9) 弥生墳丘墓の石室の寸法は宇垣匡雅『堅穴式石室の研究－使用石材分析を中心に－（上）』『考古学研究133』考古学研究会 1987及び註5、註8前掲書より、古墳の堅穴式石室の寸法は都出比呂志『堅穴式石室の地域性の研究 昭和60年度科学芸術研究費補助金（一般C）研究成果報告書』大阪大学文学部国史研究室 1986及び註5前掲書より引用した。
- (註10) 註7前掲書において都出氏は養久山1号墳（兵庫県）や鶴尾4号墳（香川県）の例を挙げて、弥生墳丘墓の石室はこれら典型的な長大型ではない堅穴式石室を媒体として、古墳時代の長大型石室につながる可能性を指摘しておられる。
- (註11) 註8前掲書
- (註12) 註3前掲書
- (註13) 『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅱ 川東車塚古墳の研究発掘調査報告』監修 近藤義郎 編集 倉林眞砂斗 澤田秀美 鸟飼俊行 吉備人出版 2004
- (註14) 『橋築弥生墳丘墓の研究』橋築刊行会 1992 なおこの排水溝の他に西くびれ部からも排水溝が検出されているが、接続する遺構が破壊されているため、遺構との関係は不明であった。
- (註15) 註14前掲書の掲載図面から測定した。
- (註16) 排水溝を伴う主体部を持つ前期古墳をいくつかあげると
①下池山古墳（奈良） 排水溝は墳丘中軸上を前方部側に向いてほぼ直線で走り、途中でほぼ直角に屈曲して前方部斜面にのびる。（『大和の前期古墳 下池山古墳 中山大塚古墳調査概報』学生社 1997）
②長法寺南原古墳（京都） 堅穴式石室東南部からのびる排水溝は石室より南9mほどは石室主軸と同方向にのびる。（都出比呂志「排水溝」「長法寺南原古墳の研究」長岡市教育委員会 1992）
③大成古墳（島根） 堅穴式石室の中軸線に掘られた排水施設が、南壁を抜けて墳丘南側のテラス上に延びるのが確認されている。配水施設推定ラインは、東西の墳端ラインとほぼ平行に延びている（『安来市埋蔵文化財調査報告書第27集 荒島古墳群発掘調査報告書』安来市教育委員会 1999 より）。
④遠見冢古墳（宮城） 粘土櫛が2基確認されているが、東櫛からのびる排水溝は、粘土櫛の主軸とは若干ずれるが、ほぼ墳丘中軸上に位置し前方部側へ直線上にのびる。（『仙台市文化財報告書第48集 史跡遠見冢古墳』仙台市教育委員会 1983）
- (註17) 和田晴吾氏は、墓壙の構造方法を、地山や盛土に掘り込まれたものと、土や石で構築されたものとに分類し、前者を「掘込墓壙」後者を「構築墓壙」としている（和田晴吾「葬送の変遷」「古代史復元6」講談社 1989より）。ここでは和田氏の分類に従い、墓壙構築前の地山あるいはそれに類する層に掘りくぼみが認められる場合も、「構築墓壙」として記述する。
- (註18) 宇垣匡雅『弥生墳丘墓と前方後円墳』『新版日本の古代4中国・四國』角川書店 1992
- (註19) 氏平昭則「石槨の構造」『岡山市矢筈治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 1995 但し氏平氏は「この石槨は盛土を積みながら構築したもので墓壙は存在しない。（P36）」と記述しておられ「構築墓壙」の語は使用されていない。
- (註20) 『メスリ山古墳』奈良県橿原考古学研究所 1977
- (註21) 『史跡森将軍塚古墳』長野県更埴市教育委員会 1992
- (註22) 註21前掲書
- (註23) 草原孝典「吉備地方の古墳群－前・中期を中心－」『季刊考古学71号』雄山閣 2000
- (註24) 小郷利幸・小野雅明・草原孝典・後藤信義・佐守学・弘田和司・前角和夫「岡山市足守地域の地域史研究（1）－古墳測量調査の成果を中心として－」『古代吉備第12集』古代吉備研究会 1990
- (註25) 小郷俊幸・小野雅明・草原孝典・高橋伸二・森宏之「岡山市下足守地域の地域史研究」『古代吉備第17集』古代吉備研究会 1995
- (註26) 『南坂1号墳・南坂遺跡発掘調査現地説明会資料』岡山市教育委員会 1984
- (註27) 小田嶋悟郎「岡山市鹿田地区出土・弥生時代の乳歯」『鹿田遺跡I』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (註28) 小林利晴「岡山県内の土器棺墓」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会 2002

第4章 一国山城跡

第1節 発掘調査の経過

第1項 調査に至る経過

足守平野周辺の山塊は主として花崗岩質で構成されており、良質な真砂土が採取できる地域である。そのため足守川沿いの平野に面した山塊部は、大小入り乱れた規模の土取りによって虫食い状態に陥っている。それに伴って古墳や遺跡などが危機に瀕し種々の発掘調査がおこなわれてきた。岡山市教育委員会においても、南坂遺跡（註1）、すくも山遺跡（註2）、長坂古墳（註3）などの調査が実施されてきたところである。最近でもその情勢に変化はなく、三井谷から竜泉寺越えの谷沿いでは、いまだ土砂採取が盛んである。そのような周辺の環境事情のもと、一国山でも土砂採取の計画が為されることとなつたのである。

一国山山塊は、『岡山市埋蔵文化財分布地図（1983年版）』（註4）では遺跡の空白地となっていた。しかし、周辺の遺跡展開状況からすれば、弥生、古墳あるいは城跡などの遺跡が所在していてもおかしくないと認識される場所であった（註5）。そして、一国山での土砂採取事業の計画が為され、それに伴う事前の踏査をおこない、初めて曲輪状の平坦部と土壘状の盛り上がりを確認、認識するに至ったのである。一国山頂部には山城あるいは陣跡が所在すると判断し、事前に確認調査が必要であり事業計画によっては発掘調査の実施も視野にいれて協議をすすめた。

第2項 調査の経過

一国山は、龍王山山塊から派生する尾根の末端にあたるが、尾根が切断されているため独立丘陵のように見える。この標高85mの丘陵を「一国山」と呼んでいる。一国山は、やや平坦な頂部から急傾斜ながら西方に尾根が延びており、この尾根上に一ないし二の平坦面が形成されているように見えた。この平坦面を曲輪とみなし、土層観察のためのトレンチが各曲輪を貫くよう軸設定をおこない、調査にはいることとした。また、土壘の明瞭な部分を断ち割り、土壘築成土層の確認とその形成状況の把握につとめた。

当初、確認調査対象地は樹木が繁茂していたので、土砂採取業者に樹木の伐採を依頼した。腐植土及び表土の除去は人力で始めたが、表土を除去した時点で土壘と曲輪の所在はよりいっそう明らかとなってきた。しかし、城に備えられている虎口などを見いだされず、城に登る道なども明らかに出来なかつた。本格的な城と言うよりは陣跡や砦的な施設であった可能性を念頭にいれだした。

一方、地誌類には城跡としての紹介がなく見過ごすこととなっていたが、「中國兵亂記」（註6）に「一国山の峰・・に人数を備え」と記述されていることを知った。「中國兵亂記」の中には、ほかに「陣城を築く」「陣城を構え」「人数を備へ」との記述が散見されるが、一国山に関しては、城を築い

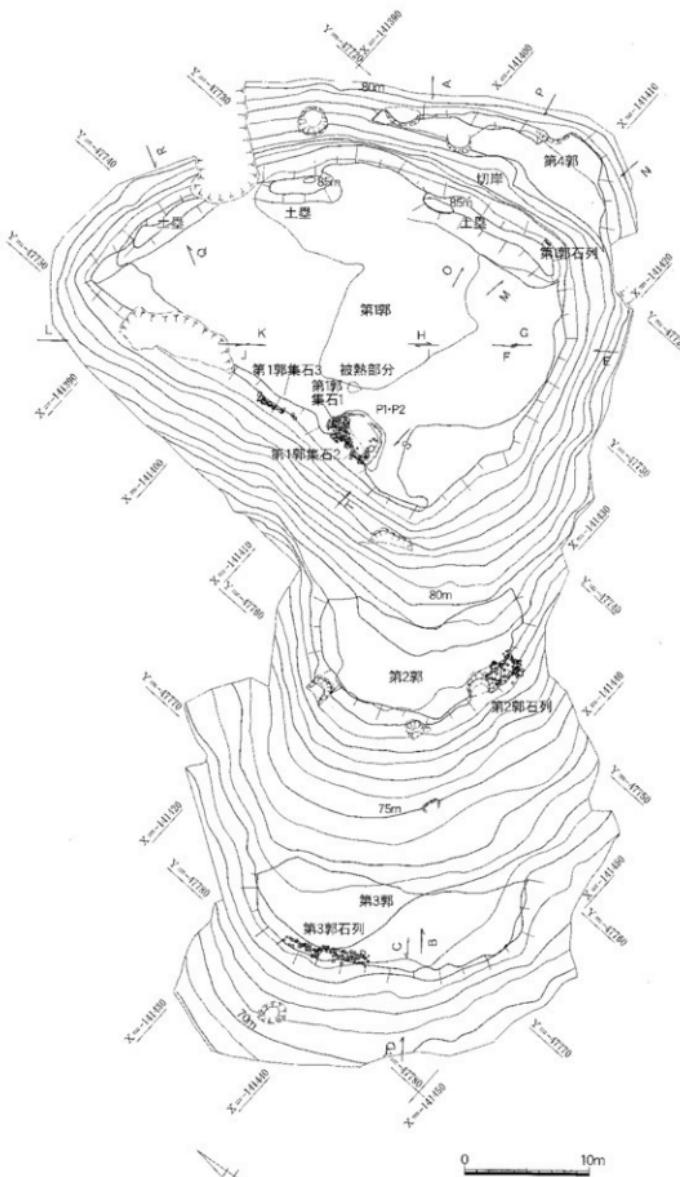


図38 一国山城跡地形測量図 (S = 1 / 400)

たとの表現は見あたらなかった。その表現の違いが、普請の規模を反映しているとすれば、一国山は本格的な城普請をしていない場所であったと想定できる。ただ、すでに存在していた砦を再利用したため、あえて「築く」「構え」等の表現を用いなかったとも考えられるのであり、そのあたりの事情を念頭において、調査計画を策定し実施することとした。すなわち、縦断・横断の土層堆積状況を観察することにより城造成の様子を理解し、土壌造成、曲輪、そして建物などの遺構が所在するか否か、また先行する時期の遺構の有無を確認し、一国山城跡の平面的・立体的構造を把握すること。そして、毛利・織田勢の対峙する最前線に位置していた一国山城の実態と役割を明示することなどが主たる目的となろう。

註

- (註1)『南坂1号墳・南坂遺跡発掘調査現地説明会資料』岡山市教育委員会 1984
- (註2)『すぐも山遺跡—城郭、中世墓、古墳の発掘調査報告ー』岡山市教育委員会 1998
- (註3)『長坂古墳群』岡山市教育委員会 1999
- (註4)『岡山市埋蔵文化財分布地図(1983年版)』岡山市教育委員会 1983
- (註5)『改訂 岡山県遺跡地図(第6分冊 岡山地区)』岡山県教育委員会 2003 「11-309(遺跡番号)、頂部が平坦になっているが人工的かどうかは不明。堀、土塁などはない。城跡か?」とされている。
- (註6)『中国兵乱記(秀吉御備中冠山城攻附城主福屋七郎兵衛衛の事)』『吉備群書集成』「三井谷南のうね日指山の峰に築_陣城_、北の平・扇子谷山の峰、一國山の峰、朱福寺山へ人數を備へ」とある。

第2節 遺構と遺物

第1項 一国山城跡

1. 城の概況

一国山は、地元住人の話によると、戦中戦後に芋畑として耕され、そのおりに土器等を拾うことが出来る場所として周知されていたようでもある。また、頂上に祠が建っていて、西側山裾の墓地から登る道があったという。現在の地形はこのような開墾の及んだ状況を示しており、本来の形状をそのまま残しているとはいえない。そうはいっても、まず概況を述べることにより一国山城跡理解の助としたい。

調査区は、頂部平坦面を第1郭(主郭)、曲輪とおぼしき平坦面を西に向かって第2郭、第3郭とし、東側の平坦面を第4郭とする。第4郭→第1郭→第2郭→第3郭を貫く長軸を東西トレント、それと直交する短軸を南北トレントとする。その2つのトレントで十字に区画された第1郭を、北東側から時計回りにI・II・III・IV区とし、遺物等を採集している。

第1郭 頂部の平坦面。主郭であり、4つの郭の中では一番広く、南北にやや長い形状を呈している。西側に尾根は続き、東側は急峻な斜面である。肩部には低いが土壌状の高まりが巡る。ただしこの土壌は、東側(背後)は良好な遺存状況であるが、西側(前面)は不明瞭であった。その代わり、方形の高まりや土壌の残存と思われる地形が観察でき、第1郭の四周には土壌様高まりが築成されていたと想定はできる。

この方形高まり(方形壇)には細石が集石しており、しかもこの石は部分的に配列されていることから、人為的な構造物である可能性が高い。現状では、中央部に盗掘孔があり、備前焼の破片が散乱している。埋土には炭層がみられ、中世墓を想定したが人骨等は認められず、その確証をつかむことはできなかった。祠や樋などの基壇の可能性も残されている。

方形壇に隣接して、熱を強く受けた場所がある(図39)。標高84.4m付近で基盤層が被熱のため径

約1mの不整円形状に変色していた。その範囲内には、焼土・木炭・灰が散布していた。また、北西よりの部分は特によく焼けており、地面が赤変していた。凹めたり掘った様子はなく、地表面から5cm程度が赤変しているだけである。地表面で繰り返し火を焚いた痕跡と考えられる。時期を示す遺物は出土していない。城に伴う遺構かどうかかも不明である。最近の痕跡である可能性も否定できないが、腐植土は焼けてはいなかった。

西側に続く尾根の脇を通るように道の痕跡が確認される。前述した墓地からの道はこの道のことと思う。この道が第1郭に接続する部分には、大きく凹みが生じており、一定の平坦面を構成する。L字形に曲がって第1郭中央に至る導線は、この部分があたかも一国山城の虎口であると見なすこと也可能である。方形壇が構築物の基礎であり、望楼や見張り所とすれば、虎口との関連性はより親密となり、城の構成としては興味深くなる。しかし、この道の築成が、城の時期まで遡上する確証は得られなかつた。

一国山城跡が冠山城の攻撃のための陣とすれば、防衛の正面は尾根が延びる西側にある。そして、西側には第2郭、第3郭を造成し備えを構えている。東側背後は急斜面であり、ただでさえ攻撃には不利な地勢である。しかも第4郭を作成し、さらに「切岸」を形成し備えを強めているように見える。第2郭 第1郭から5.5m程下ったところに第2郭が形成されている。さほど広くないが、確かに平坦面を形成している。東側（山側）は岩が露出していて削平されていると観察できる。一方、西側（尾根側）は山土の堆積により形成されている。すなわち山を崩し、その土を造成してかろうじて平坦面を形成しているように思える。この第2郭には、露岩の凹みや土のしみ状の痕跡はあったが、遺構と思われる痕跡は認められなかった。ただ、南に石列及び石の集中個所（第2郭石列）が確認された（図53）。

この場所は、南側が尾根に続く斜面になっていて、そこに石を積み上げ、方形区画の積石塚を形成しているように見える。たしかに集石部分の下部からは、中世土器細片等が検出されたこともあり中世墓を想定したが、遺構の性格を特定するには至らなかった。

いまのところ、第2郭の造成土部分を補強する石列および集石と理解している。

第3郭 第2郭から5m程下ったところに形成されており、やはりさほど広いとは言えない平坦面である。表土を除去するとすぐに地山が露呈する。南半部は堆積土が主であるが、北半部は岩が露呈する。

後述するように、この第3郭は、一国山1・2号墳の2基の古墳を削平して造られている。古墳築造により改変されていた地形を基に、さらに曲輪として拡大整備したものと思われる。1号墳・2号墳とも墳丘は全く削平されていて、外観では古墳の存在すら予想できなかった。1号墳は、ちょうど第3郭中央部を占めていて、石棺の蓋石が城門の敷石のように露出していた。しかしその蓋石は動か



図39 第1郭被熱跡 (S = 1/40)

された形跡もなく、石棺は未盗掘であった。城の造築時に、1号壇・2号壇の石材を利用したとしても、突出部分の除去、取り崩し及び若干の再配列を行った程度であり、必要以上の改変はおこなっていないようである。

なお、西側肩部には石列が確認されている（図54）。露岩を整形利用しつつも、確かに石を配列している箇所も見受けられる。郭の造成のおり、露岩の整形と石の追補をおこない肩部を整備したものであろう。平面や見通し図では一見整然と整備されている様にみえるが、各土層断面図によると、規則的に積み上げているように思われる。露岩箇所を若干整形した程度であり、肩部の土盛が流失しにくいように、基底部に石を配置したものであろう。

この第3郭の下方にも、緩やかに尾根は続き、所々平坦面が認められる。さらなる曲輪の存在を予測して探査したが、意識的な平坦面を形成しているとの判断には至らず、城関係の遺構はこの第3郭までと考えた。

第2・3郭は曲輪といっても、一定数の兵が常時待機していたというイメージではなく、急激な落差をもつ尾根筋を、人が移動しやすいように所々平坦面を形成して、待機あるいは進軍しやすいように整形した印象である。この曲輪が防御上どれだけ有効に機能していたかは疑問であるが、この曲輪の配置をみると、兵の移動を含めて冠山城を、あるいは足守平野側を意識していたとは言えよう。

2. 縦断面

山城の縦断面および土塁、曲輪の造成の様子を把握するために東西及び南北トレンチを設定。また状況によってサブトレンチを設定し、城構築の土木作業量なし造作の実態を推測するための資料とした。

東西トレンチ（A-B,C-D）（図40・図41）第1郭から第4郭までを貫き主郭と各曲輪（郭）の関係等が捉えられる主要な土層断面である。ただし、第4郭は一部をかすめるだけあり有効な設定となっていない。それを補うためサブトレンチ2およびサブトレンチ3を設定し、第4郭との関係の把握に務めた。

A-A1（図40上段）は東側の土層断面で、第1郭肩部から第4郭にかけての様子が観察できる。4層（以下土層番号は断りのない限り、当該事項と関連する図の土層番号）は土塁の基底部分の土であるが、5層付近は細礫を多く含み安定した基礎地形を形成している。また9層も小角礫がおく、安定した基礎地形を意識したものであろう。第4郭が土盛りによって形成されている事が理解できる。また、第1郭の土塁内部が若干凹んでいるのは、掘り起こした土を土塁に盛り上げた跡かもしれない。

A1-A2（図40中段）は第1郭の中心部であるが、基本的には地山を平らに削平した状況を示している。

A2-A3（図40下段）は第1郭西側肩部の土層堆積状況である。この部分の土層堆積は複雑な様相を示している。その中でも一つの鍵層となるのが、20層と21層である。この下部に、炭あるいは炭化物を含む黒色土層が確認される。この黒色土層（炭層）は、後述する段状遺構Aの床面にあたり、14世紀代に属する遺構である。この炭層が広がる箇所は、地山が二段にわたって下がっているのがわかる。山側を段状遺構A、裾側を段状遺構Bと把握している遺構である。この断面を観察する限り段状遺構BはAに先行する遺構と認識できる。

さて、20・21層は段状遺構の覆土、さらに17・18層も覆土ないし埋土と想定するので、少なくとも土塁にかかる造成土は、10-15層であろう。丁寧に盛り上げている過程が読みとれる。

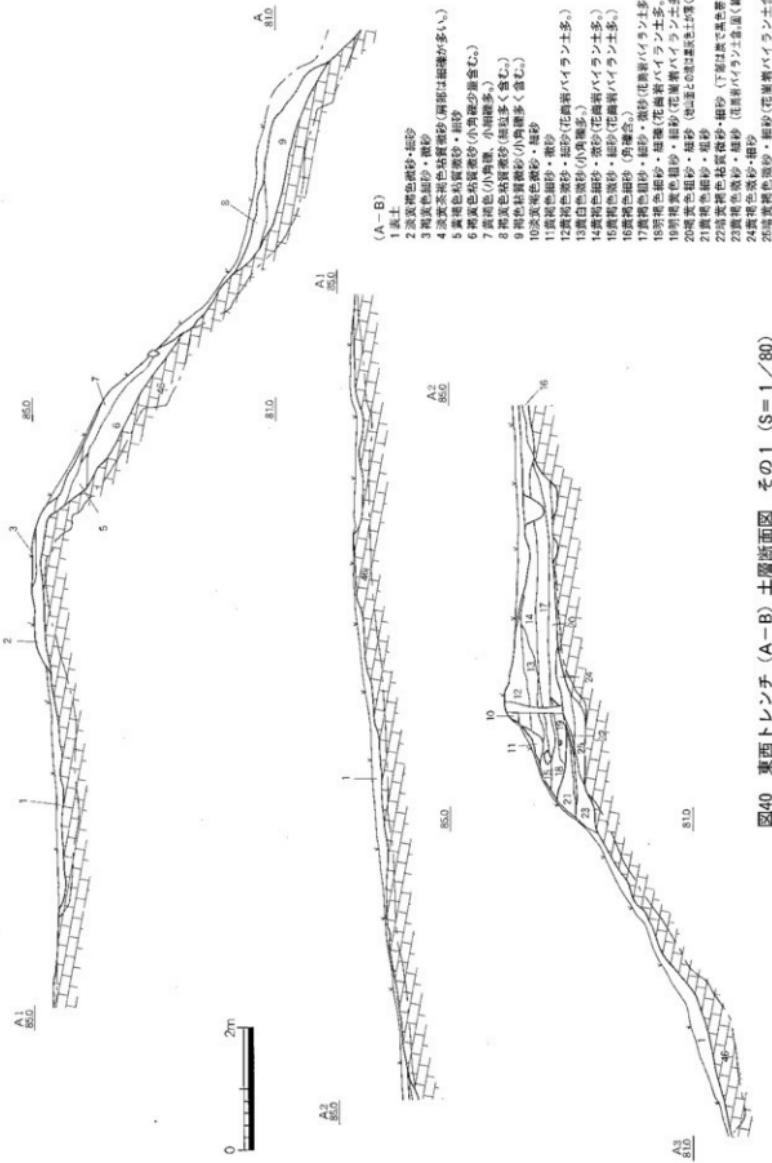


図40 東西トレンチ(A-B) 土層断面図 その1 (S=1/80)

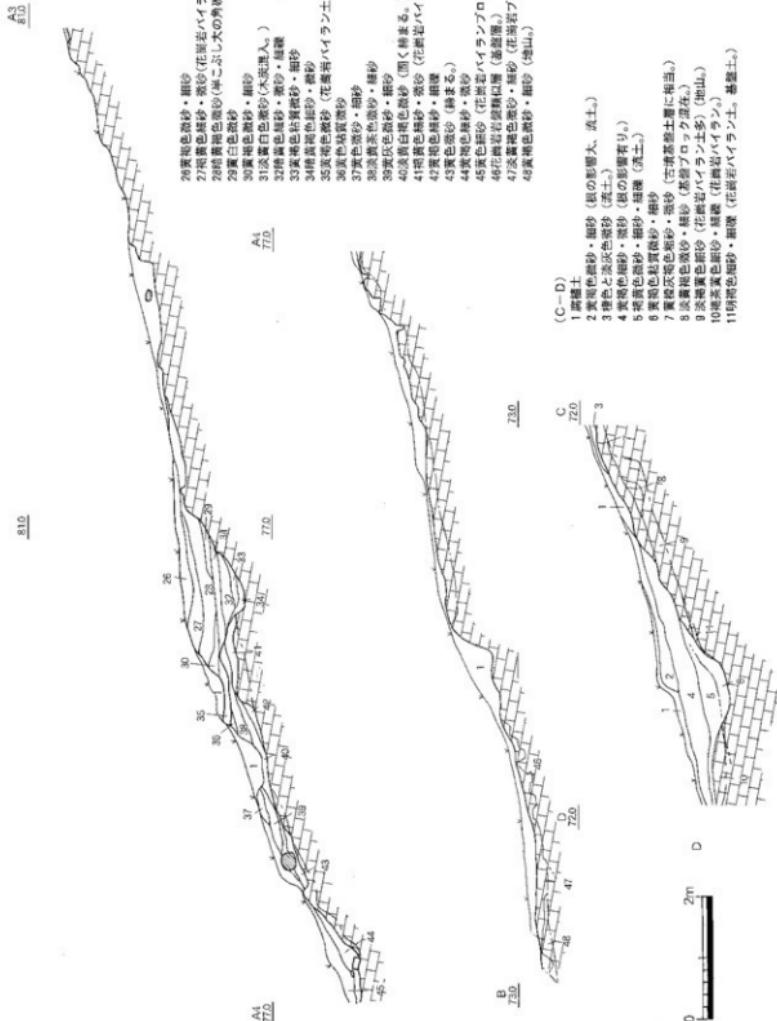


図41 東西トレンチ (A-B, C-D) 土壌断面図 その2 (S = 1/80)

A 3-A 4（図41上段）は第2郭の土層断面図。山側は地山削平、尾根側は土層堆積の状況がわかる。36・38・40層は自然堆積土層と認識しているので、旧地形の名残である。26～34層は、溝ないし落ち込みの埋土のようであったが、面的には溝ないし落ち込みの遺構であるとの確認はそれなかった。むしろ27・28層に礫や拳大の礫を意図的に混在していると思え、第2郭平坦面を形成する造成土と判断した。

A 4-B（図41中段）は地山（岩盤）を削り成形している様子が窺える。末端の削平は、古墳造成時の影響である。

東西トレント（A-B）の土層からは、ほとんど地山を成形して城を築いているということや、肩部、曲輪部分は土盛が認められること、すなわち、頂部を削り出して、平坦部あるいは土壘を形成していることが判明した。しかし、造成は単純に高所から低部へと土を移動させ、平坦面を形成させているだけではない。第1郭の肩部には一段削平された面が形成されており、先行する遺構の存在を予測させる。この土層観察により、第1郭（主郭）、第2郭等の地形が人為的に形成されたものとの確証が得られた。

C-Dは第3郭裾端部の状況をあらわしている。第3郭における東西土層断面は、1号墳の断面と重複する部分は省略し、古墳埴丘外から図示した。また軸線も北に若干ずれた設定となっている。1～3層は表土ないし流土、7～11層は地山。4も流土かもしれないが、5・6層は落ち込みに堆積した埋土である。この落ち込みは、第3郭を画する堀切状の遺構の可能性がある。しかし、明瞭に画された状態ではなく、部分的に落ちが検出できた状況であった。

南北トレント（E-L）（図42） 第1郭（主郭）を南北に貫く土層断面。

E-Lは南肩部の土層断面。45層付近から地山が一段落ち込んでいる。その落ち込み部分の土層（18～26層）は整地層と判断しているが、土器などが多く出土する。23層の下部には炭層も確認されるなど、東西トレント（A 2-A 3）の様相と類似する。第1郭II・III区斜面の出土物は、この土層から検出されたものである。中世段階の遺構面あるいは包蔵土を整地した可能性が高い。1～5層は流出土である。

G-Jは第1郭平坦部を貫く土層断面であるが、土盛は確認できず、地山を削平している様子を窺うことができる。

K-Lは北半部分の土層断面であるが、今までの肩部の状況とはその様相が異なる。地山は緩やかに傾斜しながらも下っていき、自然地形そのままの状況を示す。その斜面に大幅な土盛りを実施し、平坦面を形成している。つまり当初の地形では、第1郭部分はもっと狭かったが、造成で北側に拡張していることが判明したのである。その造成土は、南半部の削平により生じた土を用いたのであろう。36・37層に対応する土層から、中世陶磁器類、銅錢（渡来銭）が出土しており、また33層は炭の混入が顕著であった。段状遺構のような生活面を確認することはできなかったが、生活面であった場所を成形し造成土に用いたようではある。12～17層は流土である。

サブトレント1（Q-R）（図43上段） 遺存良好な土壘部分に設定したトレント。この部分は岩が多く、基盤層は岩盤。腐植土を除去するとすぐに岩が露呈した。したがって、土層断面でも岩以外の土は基本的に整地層で、炭、土器の混入がみられる。土層部分では礫の混入率で分層が可能であった。3～8層が整地層である。

土壘を構築する場合、地形そのままの上に土盛するのではなく、岩盤であるにもかかわらずある程

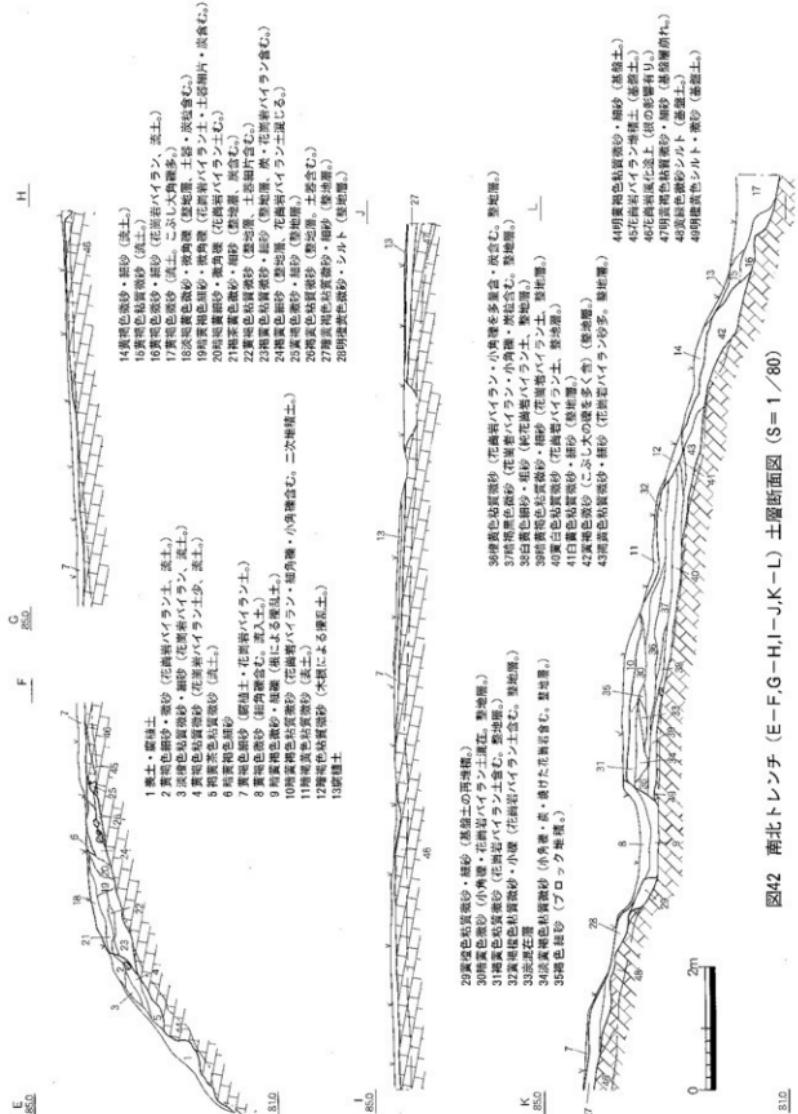


図42 南北トレンチ (E-F, G-H, I-J, K-L) 土層断面図 (S=1/800)

度水平に均してのち土を徐々に盛り上げている。そのため基盤部分は段が生じることになる。また、整地層下部は礫の混入率が高く、土が容易に流出しないよう工夫されているようだ。さらに4層にも、角礫が大量に混入されており、土壌基礎部分の強化にも留意していたであろう。しかしながら、盛土部分はだいぶ流出していると思われ、土壌はもう少し腰高と推測される。

7層に混入していた土器片は14世紀代であるから、中世後半以降の整地時期と判断される。このトレントチからは、段成形が城普請の一環であったのか、あるいは先行する遺構に属するものであったのかを判断することは困難であった。

サブトレントチ2（O-P）（図43中段） 土壌残存状況および第4郭の造成の様子が把握できることから設定した。5～7層は土壌の盛土。8層も土壌構築時の整地層の可能性がある。ここでも土壌下はある程度地下げされ、造成が行われている。また、9～11層は曲輪の造成整地層である。山側を削り、斜面側に土を搔き出し平坦面を築いている様子が観察できる。なお、11からは龜山焼甕片が出土している。第1郭からも造成土が運ばれ、造成に供されていたのであろう。

サブトレントチ3（M-N）（図43下段） サブトレントチ2と同様、土壌断面と第1郭～4郭の土層断面を把握するために設定したトレントチである。

このトレントチでは、3～15層までが肩部の造成・整地土層であるが、外側のほうは細かい土層に分離でき、水平を意識して形成させているように思える。そして中央を盛り上げ、断面かまぼこ形に築成している様子が見て取れる。また、肩部には小礫を配し（第1郭石列、図45）、土止めとしている。

9層は焼土と炭が集中しており、炉跡の可能性がある。15層には龜山焼甕片の混入が認められる。12層以下と3～8層とには、明らかに整地の過程で中断が認められる。ここで観察される土壌下の状況は、この土層堆積がすべて土壌構築に伴う一工程と断言できるほど単純な様相ではない。12層以下は、中世のある時期に、人々がここで生活するために基礎地形を実施していた可能性があり、城の造成とは関係がない。そうであるとすれば、3～8層までが土壌にかかる土層となろう。

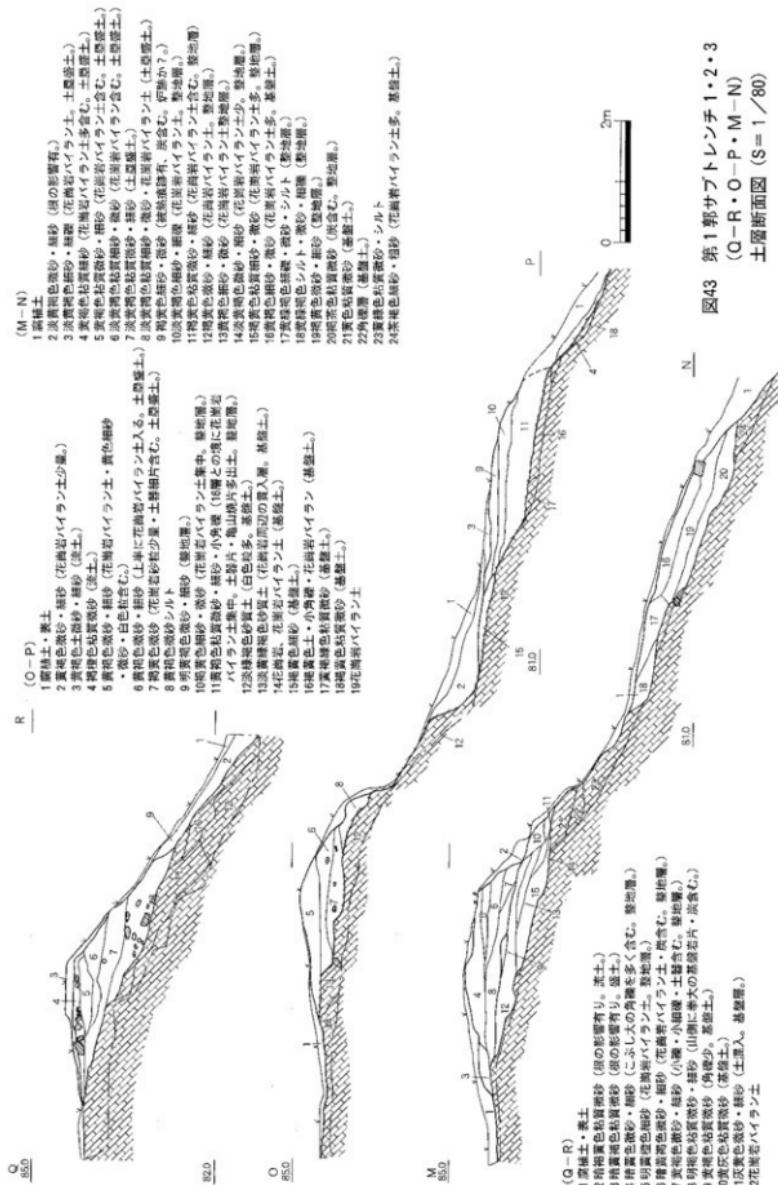
16～20層は、第4郭の平坦面を作り出すための造成土である。

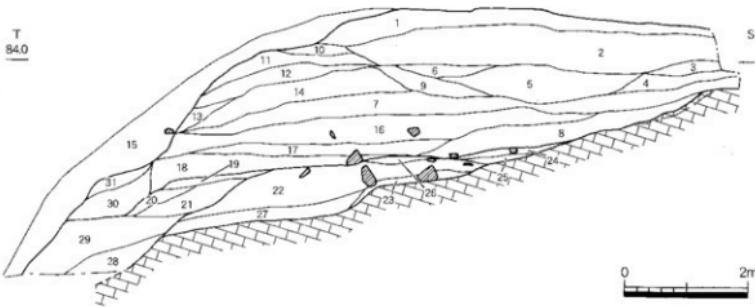
サブトレントチ4（S-T）（図44） 第1郭方形壇周辺は、土壌あるいは壇の築成が見られ、また下部には段状遺構や弥生土壙なども所在しており、土層堆積の様相が複雑である。しかし19層に炭の堆積が認められるので、段状遺構A床面で検出された炭層に対応していることがわかる。したがって19層以下は中世後半以前の堆積層、また27層からは弥生土器が検出されることから、この層は弥生時代の堆積土層と見なし得る。その上層の22層は、細かな薄層が堆積しており、長期の形成による自然堆積と思われる。一方、8・16・17層は段状遺構が埋没する過程の土層であろう。その上層が土壌に伴う整地層である。しかし、5層下部にはまた炭層が認められる。これは方形壇の堆積の一部で検出された炭層に対応している。2層は、ほとんどが小角礫からなる層で、特徴的である。盛土を縮める効果に有効と思われる。1～6・9・10層は一連の堆積状況で方形壇の盛土であろう。そして、7・11～14層が土壌や城の築造に係わる造成土である。

また、20・21層は段状遺構Aに先行する土層、すなわち段状遺構Bの埋土であり、ここに石が集中的に配されている（集石3・4）。段状遺構Aに係わる一連の作事である。

以上各トレントチの土層観察から多くの情報を得ることが出来、以下のことが判明した。

1. 頂部平坦面は、人為的改変が加えられ、意識的に平坦面を形成していること。
2. 頂部平坦の肩部は、意識的に盛り上げている部分が確かにあり、土壌と見なして差し支えないこ





1 褐黄色細砂・細砂（花崗岩バイラン土含む。盛土。）
 2 褐色細砂・小角礫（盛土。）
 3 明褐色細礫（盛土。）
 4 單色灰色粘質細砂・細砂（根の影響か。）
 5 明褐色細砂（花崗岩バイラン土・盛土。）
 6 明褐色細砂・細砂（盛土。）
 7 暗褐色細砂・細砂（盛土。）
 8 暗褐色細砂・細砂（花崗岩バイラン土、盛土。）
 9 單色褐色細砂・細砂（花崗岩バイラン土、盛土。）
 10 單色褐色細砂（小角礫若干含む。）
 11 黄色微砂・細砂（盛土。）
 12 暗褐色粘質細砂（花崗岩バイラン土・基盤ブロック混在。盛土。）
 13 暗褐色細砂（花崗岩バイラン土、盛土。）
 14 白褐色細砂・微砂（花崗岩バイラン土。）
 15 單色茶色粘質細砂・細砂（根の影響有り。流土。）

16 貴褐色細砂・微砂・シルト（花崗岩バイラン土・粘土をブロック状に含む。）
 17 白褐色細砂・微砂（花崗岩バイラン土。）
 18 暗褐色細砂・微砂（花崗岩バイラン土・粘土をブロック状に含む。）
 19 白灰色細砂（淤泥が薄く堆積。）
 20 淡褐色細砂・細砂
 21 褐褐色微砂・細砂
 22 暗褐色細砂・微砂（花崗岩バイラン土。）
 23 黃褐色細砂（花崗岩バイラン土。）
 24 黄白色シルト
 25 暗褐色細砂
 26 黄色シルト・微砂
 27 暗褐色粘質細砂（劣生土器混在。）
 28 暗褐色粘質細砂（花崗岩バイラン土。）
 29 暗褐色細砂・微砂。
 30 黄褐色細砂・微砂（根の影響有。）
 31 黄白色細砂

図44 第1郭サブトレーン4 (S-T) 土層断面図 (S=1/80)

と。しかも当初、頂部を削平してその土を端部に盛り上げ土壘としたと単純に考えていたのであるが、肩部はある程度段状に基盤地形をしてから整地を行い、山頂周辺部を削平した土を土壘状に盛りあげていったと確認できた。

3. 北側は、地山を切り落とし、いわゆる「切岸面」を形成していること。
4. 曲輪は、山側を削平し、外に土を張り出し、平坦面を形成していること。
5. 土壘は見掛けの単純さに反して、意外ときちんと造作している印象が感じられる。また、肩部に小石を配置したような部分（第1郭石列）も見いだされ、おそらく土が流出するのを防護する役割を期待した敷設であろうと思われる。
6. 段状部は北ないし東側、すなわち当地では穂地側ではその造りは顕著ではなく、南ないし西側では明瞭な段を形成して、遺構の所在が確認できた。その段には、柱穴だけでなく炭粒、焼土粒が散在していて人の居住が想定できる状況であった。城の造作以前に建物が建てられ、人が居住していたことは疑いない。山城築城以前、少なくとも弥生時代後期、中世後半期の遺構の存在が推

測でき、山城築城時の整地により、それら時期の遺構は大部分が削平されてしまったこと。

7. 第1郭の表面ないし斜面堆積土の中から、弥生土器の出土が認められるが、大部分は二次堆積であり、遺構に伴う状況ではなかった。また、石室あるいは石棺の石材として適當な大きさと厚さの平石も散見されたが、これらも遺構と確認されるには至らなかった。可能性としての石室部材及び土器の散在性からすると、弥生の遺跡が所在していたと思われるが、中世遺構或いは城造成によって徹底的に損壊したようだ。弥生土器の中には高壺、壺などの器種が多い傾向があるとともに、赤色顔料の痕跡が認められるものもあることから、弥生の墓地が展開していた可能性があること、などが判明した。

3. 土壘の造成

土壘築造工程の概略を、ここでまとめておきたい。

まず、基礎地形の件。典型例はサブトレンチ1・2の状況である。

サブトレンチ1では、もともとの地形が斜面部分にあたり、その傾斜面を徐々に均している。水平面を形成してから、土壘の盛土を積み上げている。ここに土層は疊混じりの顯著なこともあります、傾斜面ではあるが崩落に対して安定していると思われる。この斜面造成土のなかに中世土器片が混在することから、整地時期の上限が想定可能である。基礎地形は4層までで、土壘盛土は3層にその一部が残存しているだけと思われる。土壘は、本来もっと腰高であったことであろう。この部分は、造成により張り出し部を形成し、そこに土壘を築いている例である。

一方、サブトレンチ2は、地山を一段下げて平坦面を形成し、そこを基礎に土壘を築いている例。土壘は地山を段上に成形してから後、花崗岩の真砂土を主体として盛りあげているので、基礎は安定している。土壘の残り具合も良好であった。なお、この部分は、直下に第4郭が存在することもあり、地山を切り盛りしながらも、基礎地形の安定を心掛けた造成を実施したのであろう。

サブトレンチ3は、地山の段造成が城の作事にかかる地形でなく、先行して形成されていた遺構の所在を窺わせる例。12層形成後造成工程に中断が認められるが、15層出土の遺物はその中断時期とそれほど隔たりがない可能性もある。一国山に、中世後半の居住域が形成されていたことを予測させる内容である。

またサブトレンチ3は、土壘肩部に一種の土留めが施されていた例である。すなわち土壘肩部に検出された石列（第1郭石列）（図45）である。この石列は、標高84.5～84.6m付近に、長さ約20cmの角礫が幅0.2～0.4m、長さ約1mにわたって並べられていた。石列の位置する地点は、土壘の盛土が切岸に向かって急角度で下がる傾斜変換点に当たり、また礫は土壘盛土の表面に並べられているところから、土壘が崩落するのを防ぐために築かれたと推測される。第3郭の端部に配列されている石列も同様の機能を果たしていたことであろう。

本来土壘の高さがどのくらいであったかは不明である。基底部の幅が4m程度であることを考えると、高くとも2～3mを越えることはない土壘といえようが、実際は1m前後の高さではなかったかと想定している。それでも、周りを急斜面に囲まれそれほど広くないこの城にあっては、柵や塀を築けば十分な防御機能を発

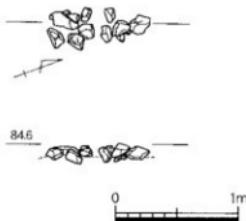


図45 第1郭石列 (S = 1/40)

揮したことであろう。

4. その他の遺構

方形基壇状遺構(図46) 第1郭西側の一画に、方形状の高まりが残存している。この高まりには、石列および石の集積が見られ、方形基壇状遺構と呼称した。この基壇状遺構には、中央に擾乱壙及び土坑があり、備前焼大甕等が出土した。当初は中世墓あるいは龕の様な施設の残骸ではないかと考えていたが、結局遺構の性格は把握できなかった。それは、類似する第2郭の集石遺構も同様である。

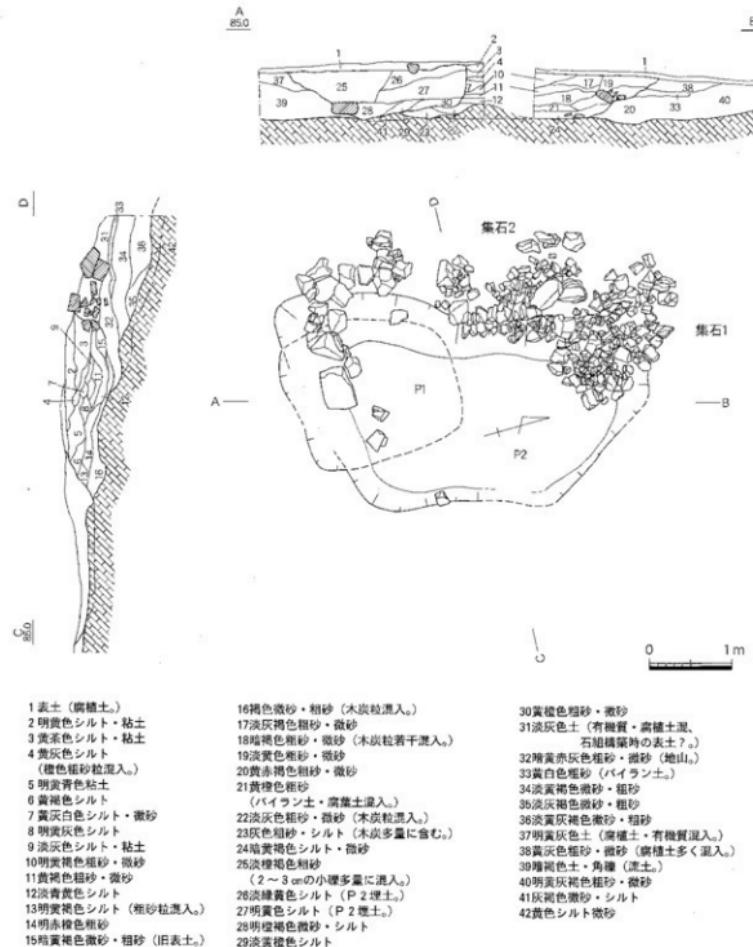


図46 第1郭方形基壇状遺構 (S = 1 / 60)

いまでは城関連施設と判断しているが、築城以前の遺構の可能性も捨てきれない。どちらにせよ、城の造成においても大きく破壊されていなかったということは、城の施設として再利用されていた可能性がある。おそらく一国山には、これら集石遺構のようなものが多く存在していたものと思われる。

さて、方形基壇状の高まりは、一辺5m、高さ0.3m程の台形状を呈している。その縁辺には石の集中個所があり、集石1・集石2とし、また中央には擾乱壙、土壙が複数検出され、P1・2とした。この基壇状の高まりは、これら複数の遺構が複合して形勢された結果と想定しているので、それぞれ個別に紹介することとする。

第1郭集石1（図47） 方形基壇状遺構の北西端、標高82.35～82.45m付近に、東西約1.8m、南北約1.0mの範囲で、拳大あるいはもう少し大き

めの角礫が集積している。南東側の礫群は

P2埋土（図46-20層）に落ち込み、北西側の礫群は第1郭西側斜面に沿ってレベルを減じている。このことから本遺構はP2を掘削した後に、その西端に集められた礫群が崩れたものと考えられる。礫の下に遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。本遺構は、礫の大きさ・遺構の立地から、城関連の飛礫石を集積したもの可能性がある。

第1郭集石2（図48） 曲輪肩部と斜面との傾斜変換点付近に、集石1の南西部に接するように検出された石列、石集中個所である。長さ約4m、幅0.3～0.5mにわたって、

約0.4m×0.2mの角礫が、郭

造成時の整地層内に半ば埋め

込まれる形で並べられている

（図46、C-D）。この石列が

位置する周辺は、曲輪の肩部

を地形に沿ってわずかに盛り

上がる様相を呈しており、か

つて土壙が存在していたと推

測される。このことから本遺

構は石列1と同様に、土壙の

崩落を防止するために築かれ

たものと推測される。一方、

本遺構とP2は併存すると考

えられるから、P2の山斜面

側（西側）の端部を保護する

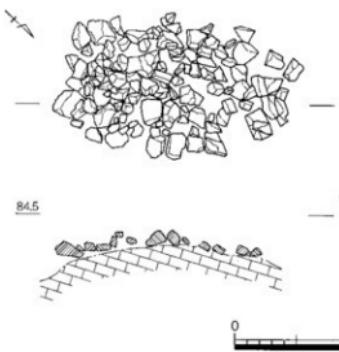


図47 第1郭集石1 (S=1/40)

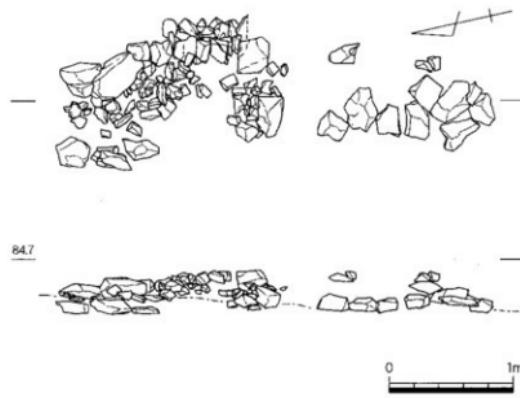


図48 第1郭集石2 (S=1/40)

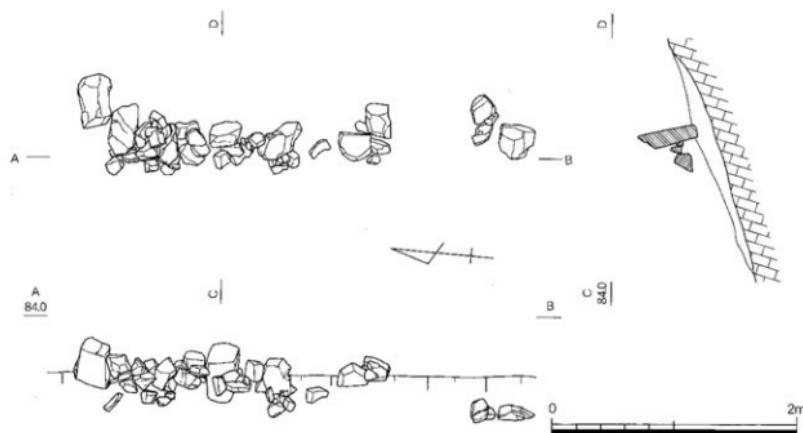


図49 第1郭集石3 ($S = 1/40$)

ための石積とする考えも成り立つ。

ところが、石群を1・2と分離して把握したが、石積状況からすると、両者を一連の遺構と見なすことも可能である。大きめの石で端部を囲い、小振りの石で内部を詰める。とすると集石とP2は一連の遺構で、全体でやはり方形基壇状遺構と理解することとなる。

第1郭集石3(図49) 第1郭西側中央肩斜面に検出された集石ないし石列である。ほぼ等高線に沿って配置されている。今までの集石ないし石列と若干異なり、意識して平石の面を外に向けて配置しているかのようである。また、平石は土圧のためか、斜面側にやや傾斜しており、土圧を受け止めていた様子が窺える。ただし基底部は地山を掘りくぼめて安定させているように見えず、基盤強化を意図して盛土しない整地時に埋めていたものであろう。周辺からは弥生土器片が出土する。しかし、この遺構の年代の決め手になるような出土状況ではなかった。

P1・2(図46・図50) 第1郭西端に位置するピットである。2基のピットが複合しており、新しい方をP1、古い方をP2とした。

P1は、図46-25層を一つのピットと認識して調査していた。しかし掘削後、埋土の状況から26層～30層までを含む一回り大きなピットと判断した。平面形は南端部やセクションベルト部分の掘り方のラインから、東西約1.5m、南北約2mの方形を呈していたと考えられる。深さは0.5～0.6m、底部の標高は約83.9mである。埋土は6層(25～30層)認められた。25層の下には約 0.4×0.3 mの比較的大きな角礫が数個認められ、これらを基礎しないし控え石として柱状のものを立てていた可能性もある。掘り方が第1郭の整地層(37・39層)を切っているところから、第1郭築成以後に掘られたピットと推測される。

P2(図50)は、南北に伸びた平面形で、長辺約4.5m、短辺約2.0m、東西辺約2.6mのいびつな台形を呈し、深さは約0.6mを測る。底部は標高83.9～84.1m付近で、部分的に炭化物(図46-22・23層)が広がっている。火を焚いた跡と推測される。また埋土の状況は東および南から自然に堆積したと推

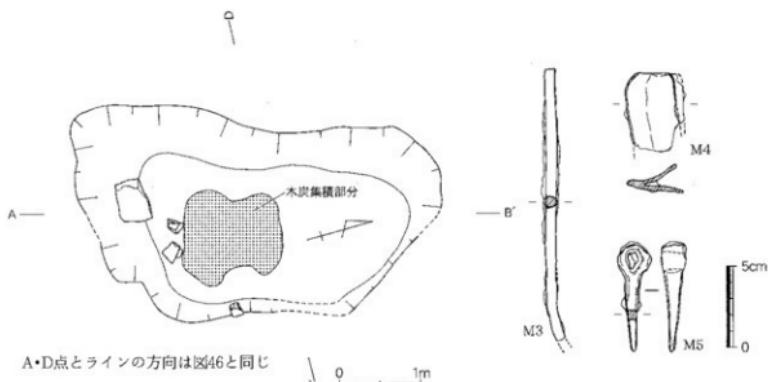


図50 P2 平面図 ($S = 1/60$)

図51 P2 出土金属製品 ($S = 1/3$)

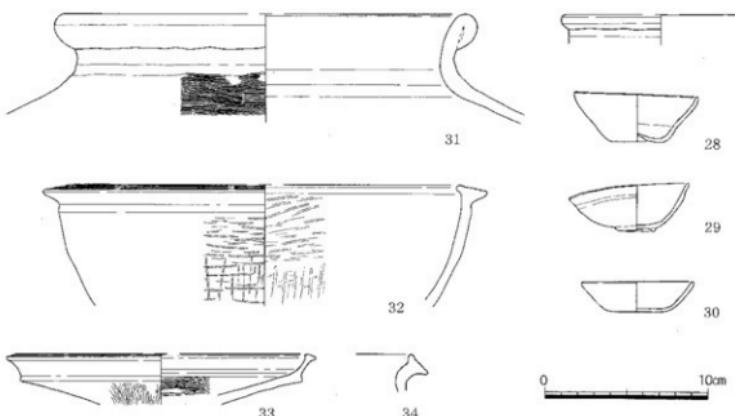


図52 P2 出土土器 ($S = 1/4$)

測されるが、図46-12～18層の堆積状況からは、ある程度埋没した段階で再度掘り直された可能性もある。埋土中には第1郭集石1の一部と考えられる角礫が含まれている。このことから本遺構は、集石1に先行して掘削されたと考えられるが、西側掘り方に沿って集石2が築かれている様子から、時期差はあまりないと推測される。

P1・P2を土壠及び土層観察用トレンチから出土した遺物が若干ある。しかし、当初P1・P2を一土壤としていたため、両者の遺物は混在した状況で取りあげられている可能性がある。図51は、P2出土の金属製品をまとめた。M3は断面円形の棒状鉄製品、M4は鍔か鎧の刃先の一部、M5は留金具の一種であろうか。図52は、P2出土の土器類をまとめた。31は口縁部が橢円形に近い玉縁の備前焼の大盤片であり、27は備前焼の壺口縁である。いずれも時期は14世紀後半と推測される。28・29は

土師質の深椀。28はへそ椀であるが、底部がそれほど凹んでいない形態である。29は痕跡程度の輪高台付きの椀、30は杯。14世紀代前半～中葉と推測される（註1）。32～34は弥生土器。土層観察用のトレンチから出土した。弥生時代後期前半～中葉ごろである。

出土物からすれば、P 2は14世紀代の遺構の可能性が高い。しかし本遺構は、曲輪の造成に伴う整地層（図46-37～40層）を切り込んでいることから曲輪築成後の遺構である。ただトレンチ部分は、弥生土器を含む包含層まで掘り抜いており、それら土器が混在している可能性が高い。さらにP 1・2の下部に所在している段状遺構も、やはり14世紀代後半の土器等（図61-45）を出土する遺構である。整地層のなかにそれら土器が混在していた可能性がある。曲輪の築成が14世紀代以降と判断し、P 1・2はさらに後世の遺構とする資料であろう。

第2郭石列（図53） 第2郭の南端、標高78.0～78.5m辺りに、東西約2.5m、南北約2.5mの範囲で角礫が散布している。角礫は大きさ、形とも様々であり加工した痕跡は認められない。特に、東辺にあたる傾斜変換点には角礫が集中しており、長さ約2m、幅約0.4mの石列を構成している。これらの礫は、第2郭の整地層に半ば埋め込まれるように並べられており、曲輪の端部が崩落するのを防ぐために築かれたと推測される。

この石列より西側に散布する礫は、石列を構成する礫と似ており、また整地された層の表面に位置するところから、石列を構成

していた石材の一部と考えられ

る。その様相は第1郭集石1・

2と類似している。同様の役割

を持っていた施設と考えられる。

第3郭石列（図54） 第3郭の西端に検出された石列である。

一辺0.1～0.2mの角礫を、幅0.7～1m、長さ約7mにわたって並べている。標高は72.6～72.8m付近である。角礫に加工した痕跡は認められない。石列の位置は、郭平坦面とその西側の斜面との間の傾斜変換点にある。第2郭の石列と同様、平坦面端部の崩落を防止するために築かれた石列と推測される。

ただし、この石列の石は第2郭石列と異なり、露岩を打ち割き整形しそのまま利用している様にみえる。しかしながら、確かに石を配列している個所もみうけられ、露岩の整形と石の追補



図53 第2郭石列 (S = 1/40)

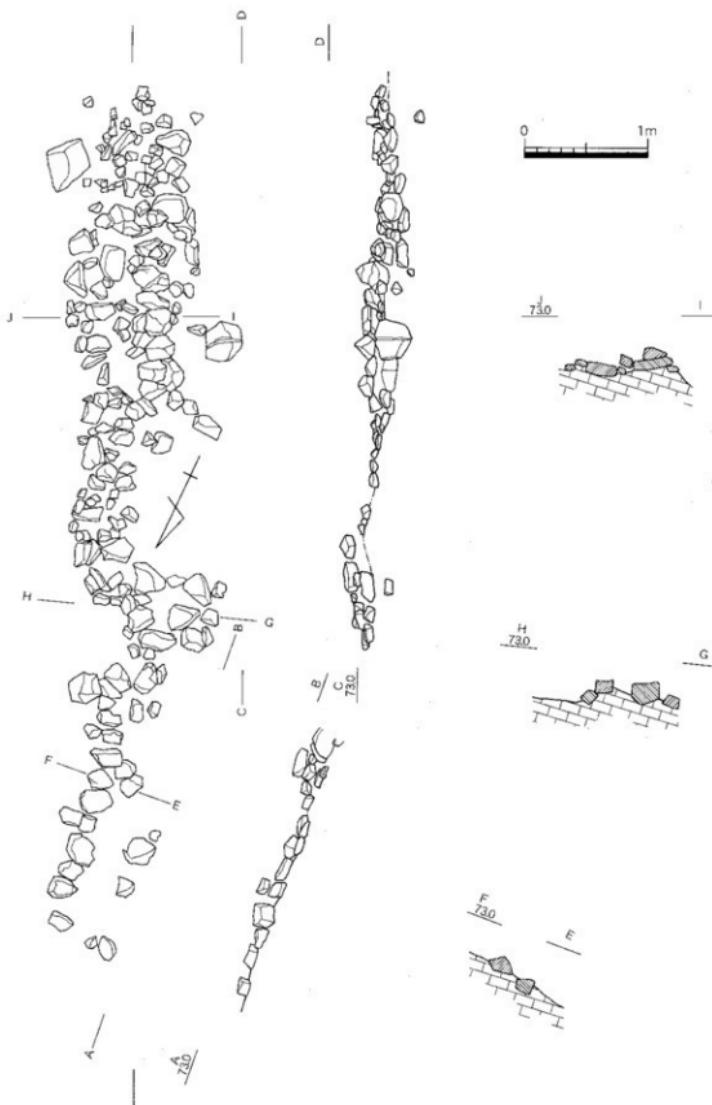


図54 第3郭石列 ($S = 1/40$)

を実施していることは確かである。それでも各セクションによると、規則的に積み上げているとは思われず、露岩個所を若干整形し、肩部の土盛が流失しにくいように基底部に石を配置した個所もある程度のものであろう。

この石列から須恵器（図83・123・124）が出土している。そのほかにも、第3郭の表土除去中から、土師器片、鍬刃先、鉄鐸などが出土していた。この第3郭は後述する一国山1号墳の墳丘および周溝を削平して築かれており、古墳周溝内から多くの須恵器・土師器が出土している。この石列の石間から出土した須恵器も、石列の年代を示す物ではなく、周溝内の須恵器の一つと推測されるものであろう。

第2項 一国山築城以前の遺構・遺物

城以前の遺構 腐植土を剥ぎ、表土を掘り下げる過程で、弥生土器片・中世陶磁器片が採集されていたことから、山城以前の遺構の存在を想定していた。しかし、表土を剥ぎ取り地山を露出させても、遺構の確認は出来なかった。さらに、土壘の造成土・整地土を掘り下げる過程においても、弥生土器や中世土器、亀山焼等の出土がみられ、築城の際すでに先行する遺構を削平してしまっているものと判断した。結果的にそれら遺物が、整地層に混入したのであり、深度が深く削平を免れたものだけが、明確な遺構として検出できたのである。検出できた遺構は、弥生時代の土壤と中世段状遺構である。

弥生時代遺構（図55・図56） 第1郭の表土及び斜面から弥生土器が採集されていたが、特に南西側斜面に顕著であった。この斜面から遺構が検出された（図57参照）。この部分は築城に際しても、土壘が構築されていた場所であるから、削平よりもむしろ土盛り作業が中心であったろう。そのため、

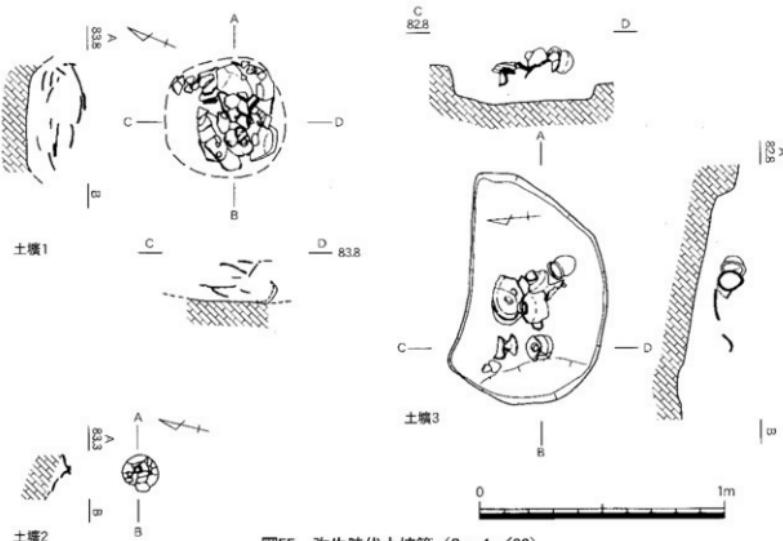


図55 弥生時代土壤等 (S = 1/20)

後世の削平が及ばなかったためと思われる。検出できた遺構は、土器がまとまって出土した土壤が二基である。一国山全体から出土した土器量からすると、もっと多くの遺構が所在していても良いと思うが、城造成で大部分が削平されてしまったものと思っている。

弥生時代遺構としては、土壤1～3を検出。土壤1・土壤3は土器溜まりである。土壤2は、高坏の単独出土であるが、土壤として紹介している。

土壤1は、頂部平坦面の肩部で検出され、壺形及び壺形土器が重なるように出土した。緩やかな斜面に位置しているが、土壤の底は水平である。土器棺墓を想定させる状況であった。土器の保存状況は非常に悪く、底部（図66-95）を除いては細片でありしかも磨耗等が著しく、復元及び図化は困難であった。それでも底部などから、2個体分は確認できる。

土壤2は高坏の脚部（38）であるが、流出再堆積しているものの、それほど流れていない状況の土器と思われる。

土壤3は、土器埋納土壤である。高坏や台付鉢などの機種が主体であり、なおかつ赤色顔料が塗られている土器が多い。しかも調整等も丁寧である。35～37が土壤3出土。図示の土器すべてに肩部穿孔があり、赤色顔料が塗布されている。いずれも祭祀あるいは埋葬にかかわる遺構の可能性がある。そのように考えると、石室の石材として良好な板石が周辺に多く散在していることが注目され、弥生墓群を壊して城が築成されたと想定できる余地がある。第1郭に他の遺構が確認されないのは、意外と地下げなどが深く及んでいることを表しているのかもしれない。

段状遺構A・B（図57）

第1郭の南西側、尾根が延びる方向に一段低い平坦面があり、当初は城の虎口と想定した部分であった。トレント設定の段階から、その一段低くなる面が自然の地形か人為的か気になっていたのであるが、その後トレントや全面の掘り下げを進めていくにつれ、山の一部を削平し、生活面を形成していくことが判明してきた。東西土層断面の、土墨下に観察された一段低い平坦面は、この遺構の一部である。全面露出をおこなうと、その平坦面には炭が散布し、被熱のため赤く変色している部分も観察できた。

生活面と思われる平坦面を段状遺構Aとした。また、Aからさらに下方へ一段落ちる平坦面があり、これを段状遺構Bとした。段状遺構BはA造成に伴う副次的な地形である可能性が高い。この段状遺構は、第1郭の南西側肩部に残されている。この部分は足守川ないし平野にも面しており、しかも尾

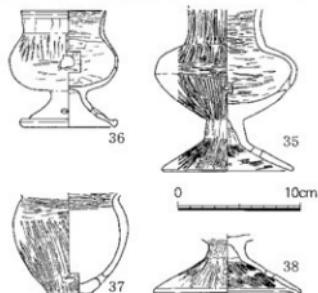


図56 弥生時代土壤出土土器等 (S = 1 / 4)

根に延びる部分でもある。平地部との連絡や、日当たりなど生活環境としては良好な場所である。この平坦面には、柱穴が検出されるにとどまらず、焼土面（炉跡）や釘・鉄器なども検出され、さらには全面にわたって炭層が見られる。建物が建っていたが、火災で崩壊し廃棄されたと考えるのに十分な状況である。段状遺構は、花崗岩の地山を20～30cmほど削平して居住面を形成している。そして、図57に示されるように、段に沿って柱穴が並び、また2～2.5mの間隔をもって前面にも柱穴が並んでいるように見える。すなわち段に沿っ

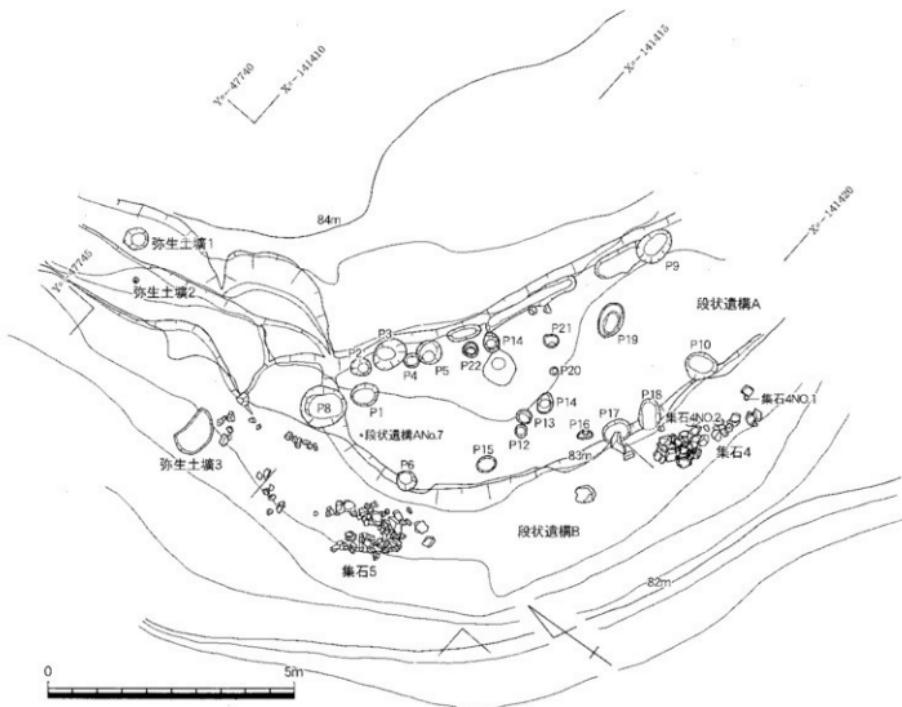


図57 第1部段状遺構A+B等平面図 ($S = 1/100$)

P 8	1 黄褐色細砂・微砂 (炭含む。) 2 褐黃茶色細砂細砂 (花崗岩バイラン土が生。)	P 5	1 緑黃褐色粘質細砂・微砂 (花崗岩バイラン土が生。) 2 暗褐色粘質細砂	P 20	1 黄褐色粘質微砂 (根の影響有。)
P 2	1 暗褐色微砂 (根の影響有。)	P 22	1 緑褐色粘質微砂・細砂 (根の影響有。)	P 19	1 黄褐色細砂 (炭粒含。) 2 灰黑色シルト・微砂
P 1	1 黄褐色微砂・細砂 2 淡黄色微砂・細砂	P 14	1 暗褐色微砂 2 黑褐色粘質シルト・微砂 (炭層の一部か?) 3 黑褐色粘質微砂 (炭含む。) 4 暗褐色細砂	P 16	1 淡黄褐色微砂
P 6	1 暗褐色細砂 (花崗岩バイラン土が生。)	P 15	1 淡黄褐色微砂	P 9	1 黄白褐色粘質細砂 (花崗岩バイラン土。) 2 黄褐色粘質細砂
P 3	1 暗褐色粘質細砂・微砂 (根の影響有。)	P 12	1 暗黄褐色粘質微砂	P 21	1 暗灰褐色粘質微砂 (炭層の落ち込みに上層 の土がたまつもの。)
P 4	2 暗褐色微砂 (花崗岩バイラン 土が生。根の影響有。)			P 10	1 暗褐色粘質細砂・微砂

図58-1 第1郭段状遺構A ピット土層注記

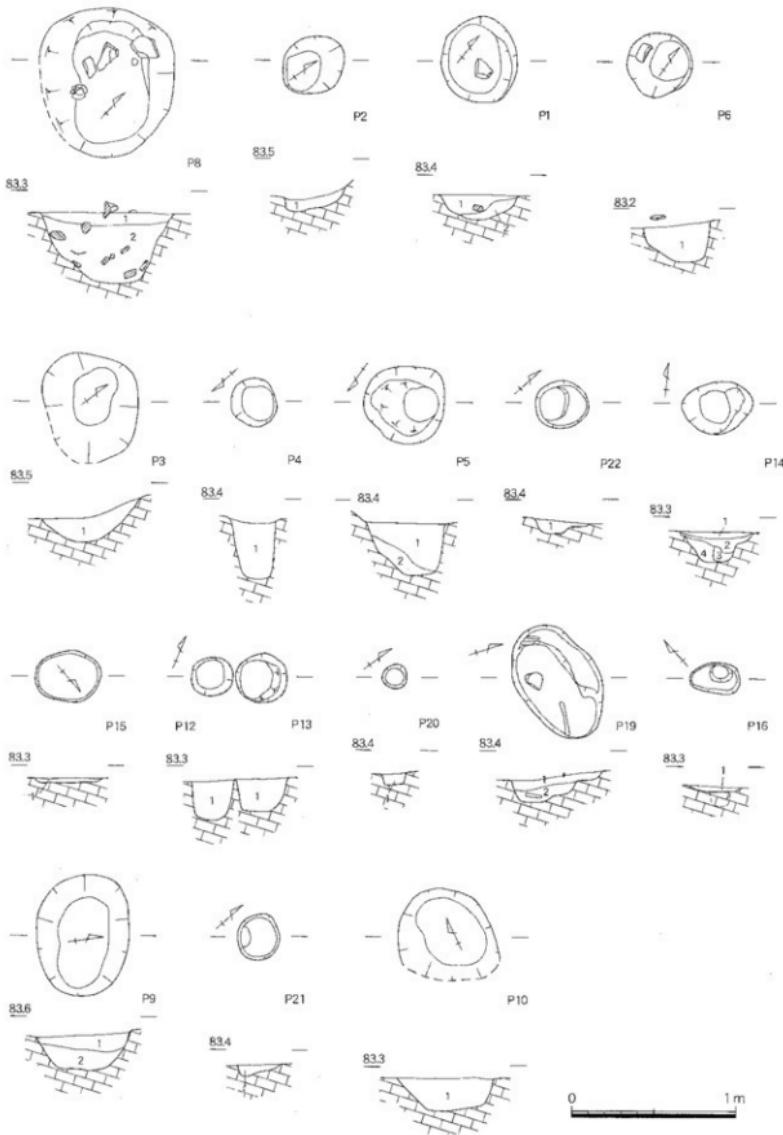


図58-2 第1郭段状造構A ピット平・断面図 ($S = 1/30$)

て建物が建っていた情景が想像できるのである。しかし規格的な建物が建っていたと想定できるほど柱穴は整然としてはおらず、一連となる柱穴の配列も読み取れない。規則的な柱間を持つ建物ではなく、仮設的な建物である可能性がある。各ピットの状況（図58）も、柱穴だけでなく、貯蔵穴など種々の用途を考慮したほうがよいことを示している。P21は下部に炭層が広がっており、意図的な穴というよりは、炭層の凹みに上層の土がたまっただけかもしれない。

また、炉跡周辺の地山が熱変している状況からして、全面に床が張られていた建物を想定することも出来ない。掘立柱建物といつても、雨風をしのぐ一時的な建物で、土間が主たる面積を占める建物であったろう。しかし、炭層ないし床面から鉄釘が検出されることからも、板ないし柱などの建材を用いて建築されていたことは確かである。

集石4・5（図59・図60） 段状遺構Bには、集石4・5と把握している石の集中堆積箇所が顕著である。一定のレベルで意識的に配石しているように見受けられたこの集石は、先行する遺構の残骸ではないかとの期待をもって掘り進めた。集石4はあたかも土壤墓上部の蓋石ないし置き石のような印象であったし、集石5は石室墓の一部かと思われた。しかし、両者ともその下部にはなんらの遺構も確認できなかった。また石の下から検出される土師質土器（図61-40・41）の形態からは、段状遺構

Aと同様の年代観が得られた。そこで、この石の配列は、段状遺構Aと一連の造成で、斜面に張り出す床面の流出を防ぐ基礎地形、つまり段状遺構の盛土部分の掛け積みではないかと判断し、一種の土止めであると結論づけた。

段状遺構の床面やピット（柱穴）及び集石遺構から、土器や鉄器などの遺物（図61・図62）が出土している。39～45は土師質土器椀。なかでも40・41・44・45は中央がわずかに凹むへそ椀タイプである。41・45は、椀形態はへそ椀と同様であるが、痕跡的な高台が付く器形。47・48は小皿、49は壺である。これら土器は、覆土（44・45）、炭層中（42・47・49）、床面（43・

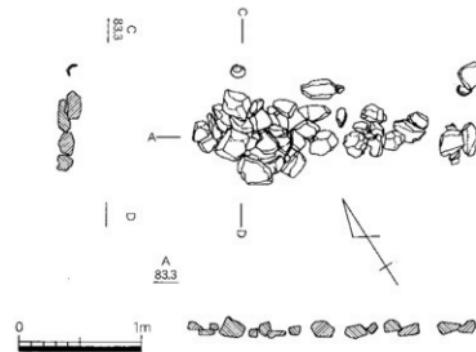


図59 段状遺構B集石4 (S=1/40)

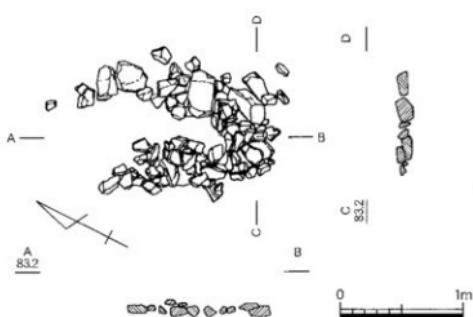


図60 段状遺構B集石5 (S=1/40)

48) そして P 8 (39) から出土しているが、いずれも中世土器の範疇である。なかでも 48 は段状遺構 A 床面からの出土、41 は集石 4 の石下から出土しており、遺構年代の参考となる。特にヘソ椀が年代限定の有力な資料となる。おおよそ 14 世紀前半～中葉の時期にならうかと思われる。ただ 46 は、「早島式土器」の範疇としてとらえられ、高台もしっかりしていて古式の型を示す。なお 40・41 は段状遺構 B 集石 4 の土器であるが、覆土出土の 44・45 とに差異が認められず、段状遺構 A・B とともに同時代性を示すものと想定できる。さらに、ここでは図示されていない小片であるが、段状遺構の各ピットから (P 3 から 小皿底部細片・椀体部の破片、P 9 から 弥生土器片・深椀片、P 10 から 土師質の土堀胴部片、P 11 は 土師質小皿の底部細片、P 12 は 亀山焼残片・土師質小皿片、P 18 では 中世須恵器細片) も出土している。

図 62 は段状遺構出土の金属製品。ほとんどが段状遺構 A のピットあるいは床面からの出土であるが、M12 は段状遺構 B、M16・17 は東西トレチでの出土である。M6 は P 6 からの出土。鍔刃先と判断しているものであるが、刀の大部分は空洞になっていて、中に仕切り板を設け強度を確保している。M7 も P 6 出土で、柄と他の物を固定する締具的金具と思われる。M14 は二叉に分かれ先端が細くなっている。鍔にしては両端が長すぎ不自然であるが、二つの材を固定する鍔のような機能

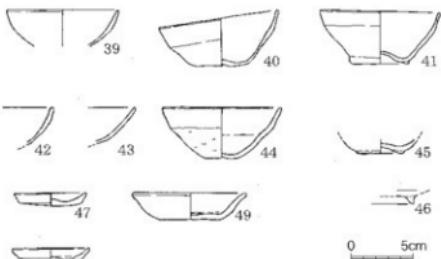


図 61 段状遺構出土土器類 (S = 1/4)

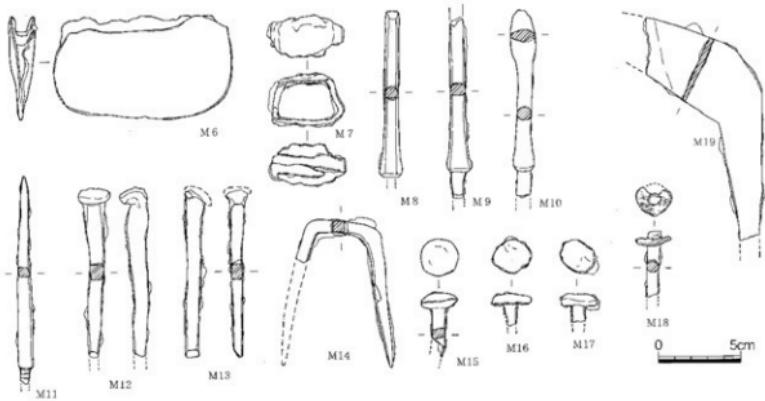


図 62 段状遺構 A・B 出土金属製品 (S = 1/3)

をもった金具ではある。M8～M11は茎があり柄がみられる形状。しかも先端が平らで片刃になっていることから、鑿、突き鑿のような工具と想定している。M10はその形状から鍔鉤の可能性はある。M12・13は頭部を折って使用した釘、M15～17は頭部が平らにつぶれた釘、飾り釘か紙のようなものであろう。M18は断面が円形で他のものとは異質である。詳細な用途が限定できないが、釘や紙類かもしれない。M19は鎌刃。M13は段状遺構Bの集石4から出土した。

第3項 出土遺物

一国山城跡出土の土器・鉄器類を地区ごとにまとめて紹介する。

図63は、第1郭I～II区出土の土器類をまとめて図示した。I・II区は第1郭の東半部にあたり、搦め手側にあたる。50～55は弥生後期土器。甕、壺、鉢の各器種が出土しているが、54・55は装飾高坏の破片である。56～62は中世の陶磁器・土器類。56は亀山焼甕の口縁部、57・58は青磁碗、59・60は土師質土器壠である。59には内耳が確認される。60も形態的には59と類似するから、内耳があるタイプかもしれない。61は深碗、62は小皿である。多くは表土、流土からの出土であるが、55・59は土壘盛土中からの出土。また58は、第1郭を形成していた造成土からの出土である。59から土壘築成時期の上限が推定できるが、当該地域における内耳付壠の具体的な変遷が把握されているとは言い難い。岡山県浅口郡沖の店遺跡2区溝の出土物の分類に従えば、内耳壠AのSタイプとなり、15世紀末～16世紀初のことと推定されよう(註2・註3)。図64も第1郭II区であるが、南斜面肩部から出土した亀山焼甕である。表面は格子目叩き、内面は青海波文が観察でき、底部周辺はハケ目で調整している。亀山焼編年の中3段階(註4)に相当すると思われ、13世紀後半から14世紀初頭の年代が与えられている。

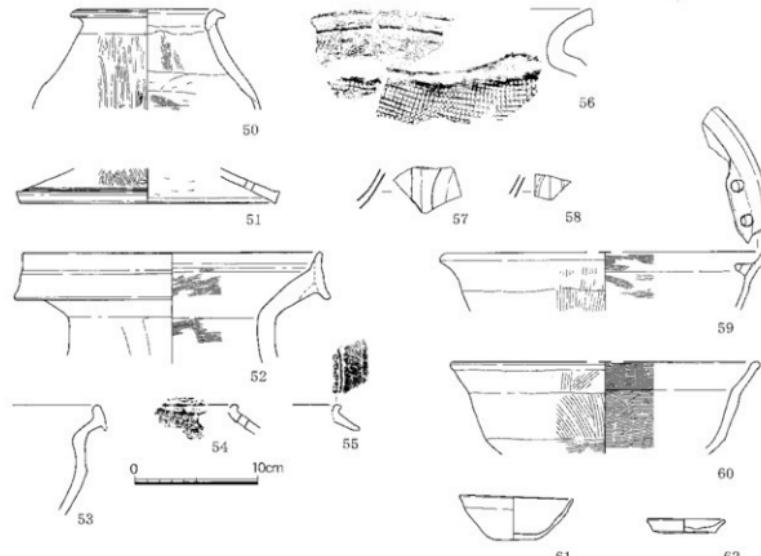


図63 第1郭I・II区出土土器類 (S=1/4)

る。この個体は、一部欠けているものの一つ所から集中的に採集でき、ほぼ一個体分が出土した。中世墓等を想定して周辺を精査したが、その確証は得られなかった。なお、第1郭から出土する亀山焼片は、形式的にはほとんど差異が見られず、同段階に属する一群と思われる。

図65は、第1郭Ⅲ～IV区出土の土器類である。Ⅲ・IV区は第1郭の西半部にあたり、大手側にあたる。64～86がⅢ区、87・88がⅣ区出土である。Ⅲ区出土物は多くが南側肩部からの出土である。64～70は土師質土器皿、73～74は小皿、71は亀山焼甕の口縁部、75・87は東播系捏ね鉢に相当する。ただし75が須恵質であるのに対して87は二次的に熱を受けているよう軟質である。また、口縁端部も丸く収まり、形状が異なる。75は東播系須恵器編年の第Ⅱ期（註5）、12世紀中葉～13世紀初頭の年代に想定できる。一方87はやや降る第Ⅲ期に相当しようか。80・81は青磁碗、77・78は土師質土器深碗であり、76に土師質土器壠。79は小皿である。83・84・86は弥生土器、85はフイゴ羽口である。82は瀬戸・美濃焼の端反皿、大窯第1段階ないし第2段階に相当（註6）すると思われる。16世紀前半ごろであろうか。

ここにあげた土器類は出土状況が様々であるが、基本的に造構に伴うものではない。しかし、Ⅲ区南方斜面出土の皿類（64～70）は、67・70を除外して胎土、調整痕に共通する特徴が認められ、まとまって廃棄された一群（図示されておらず未掲載であるがもう4個体分ほど出土している）と想定で

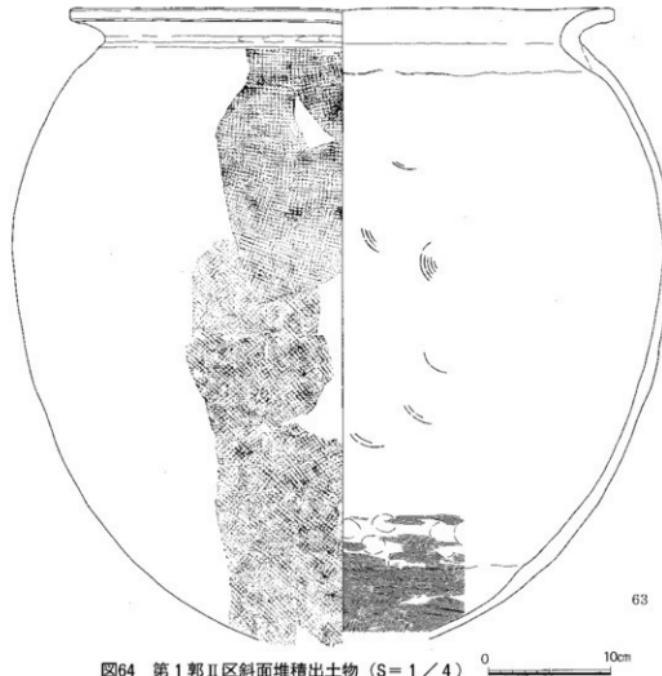


図64 第1郭II区斜面堆積出土物 (S=1/4)

きる。その根拠として挙げられるのは、他の土師質土器と異なり胎土が砂っぽく褐色を帯び、器壁が厚く重いなどである。器形は回転による成形で口縁部がやや外反する。底部外周にはヘラ切りの痕跡が見られる個体もあるが、ナデおよび押圧により不明瞭になっている。これら土器は古代後半～末の年代（およそ10世紀～11世紀代）と想定できようか。72も同様のまとまりの中で把握できる土器である。87・88はIV区出土の土器類である。

図66は、第1郭IV区出土の弥生土器をまとめた。段状造構Aやサブトレンチ出土物も混じるが、ほとんどが肩部の落としの中斜面堆積の出土である。89～93は壺口縁及び頸部、鏡像文で飾られている土器もある。94・95は底部、96は器台脚部であろう。器形としては大型の範疇に入る。97～99は装飾高环、100～102は高环である。103・104は小形壺あるいは壺で造りが丁寧である。104は胸部に穿孔があり、祭祀ないし埋葬に伴う土器類の可能性を示している。

これら弥生土器は、その採集された場所からして、あるいはその内容からして、図55で示した特に土壤3の土器を含むことは明らかである。したがって、図56で図示した弥生土器に、当土器を加えた器種構成が、土壤に埋納された当初の土器群の内容により近いと想定される。

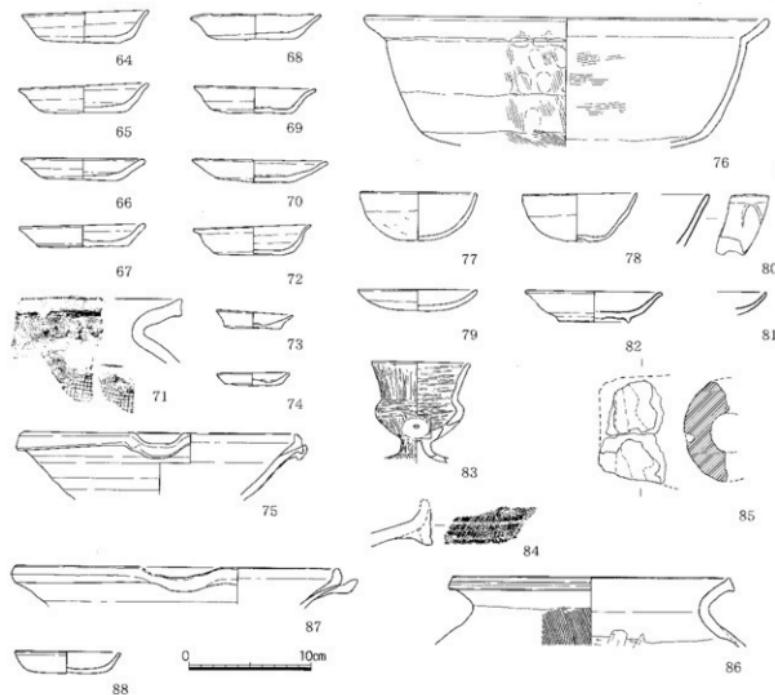


図65 第1郭III・IV区出土物 (S=1/4)

図67は第2・3郭からの出土土器のうち、古墳に関係する土器類を除いた一群をまとめた。上段(105~108)は第2郭、下段(109~111)が第3郭出土である。105は備前焼すり鉢、口縁端部が折れ曲がり上方に立ちあがる。摺り目はまだ多くない。備前焼編年IVBで15世紀代に相当すると思われる。106も備前焼で、壺の口縁部。端部が折れ曲がり扁平な玉縁を形成している。105と同様か若干先行する時期であろう。107は軟質化しているが、75と同類である。108は中世陶器の捏ね鉢の破片である。109は須恵器片、110は弥生土器器台であろう。111は高坏である。これは古墳関連の高坏であろう。

図68は、第1・2郭から出土した金属製品をまとめた。M20~M43が第1郭、M44~M47が第2郭

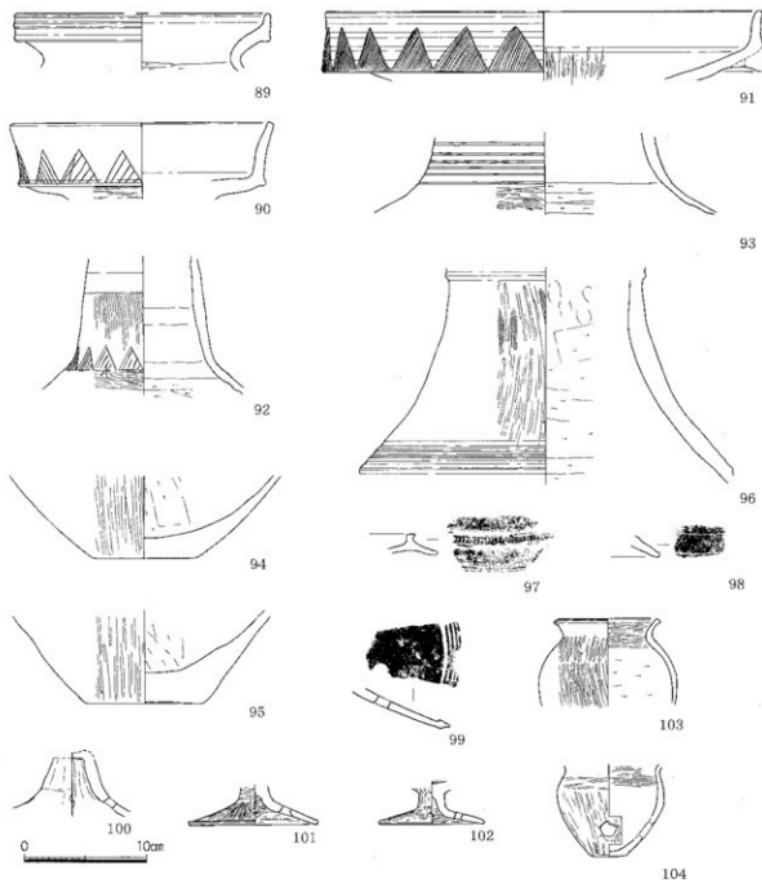


図66 第1郭 IV区斜面堆積出土土器類 (S=1/4)

の出土である。いずれも、表土・斜面堆積などからの出土で、遺構に伴うものではない。しかしながら、その中でもⅡ区南斜面、Ⅲ区斜面堆積の出土品は、段状遺構に示されるように中世後半の生活面を形成していた場所であるから、その時期の遺物が出土している可能性がある。そのためか、段状遺構出土品（図62）と類似する製品が多く見られる。ほとんどが釘や止め金具の部類であろう

が、鎌の刃先（M20）や、鉄鎌（M

36～M39、M41・M47）そして楔ないしノミ先（M24・M25・M30）らしき個体も見られる。また具体的用途が不明なM40のようなものも出土している。鉄釘には、大形・中形品だけでなく、M31～M33、M43・M45のような小形品も見られ、様々な部位で使用された状況が予想される。また、鉄鎌とした中には、二叉あるいは円環状の鎌と判断しているM41のような例もあるが、段状遺構出土品（図62M8～M10）でも想定しているように、鑿、突き鑿として用いられた工具があるかもしれない。

銅錢（図69） 一国山からは確認できるもので12枚の銅錢が出土している。その中の保存状態の良好な9個体を図示した。この銭種は、古寛永（M48）、新寛永（M49）、元豊通寶（M50・M51・M56）、元祐通寶（M54）、治平元寶？（M52）、熙寧元寶（M53）、治平通寶（M55）などが確認できる。明らかに江戸時代以降の寛永通宝を除き、北宋銭が主体である。また図示していないが、細片の中にもかろうじて文字が判読できる銭がある。寛永通寶（第1郭表採）、嘉祐元寶（第1郭I流土内）、下の字が「元」と読める銭（第1郭Ⅲ段状遺構A炭層直上）である。これら銅錢の大部分は表採、流土内からの出土である。しかし元祐通寶と不明銭とは、段状遺構A床面上層ないし炭層直上の出土であり、遺構に伴う出土である。両者共におそらく北宋銭であり、段状遺構の年代の参考資料となり得る。

石器類（図70） 一国山各郭から出土した石器類をまとめた。S1は硯、長方硯であるが陸側に広がり気味である。陸部は良く摺られていて光沢を有すが、特に左半分が顕著である。S2～S6は砥石、S7は石鎌で、弥生時代に属するものであろう。石器類の大半は第1郭の南斜面ないし肩部からの出土が多く、西側からのものが若干ある。表採・流土出土なので年代は不詳。しかし、同じく南斜面から14世紀代を中心とする土器類とともに出土していることから、やはりこれら砥石類も14世紀代と考えられる。また、S5は段状遺構A炭層から出土しているので、14世紀前半と想定できる。

註

(註1) 草戸千軒遺跡の土師質土器編年によると、碗C出現と碗Bとが併存するII期後半新段階に対応する。ただし碗Bは碗Cの器形に粘土を貼り付け高台としており、純粋な碗Bとは言い難い。II期後半の最新段階に至る過渡的段階と位置づけられる時期であろう。14世紀中葉に限りなく近いと推定。（鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V 中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究会編 1996）

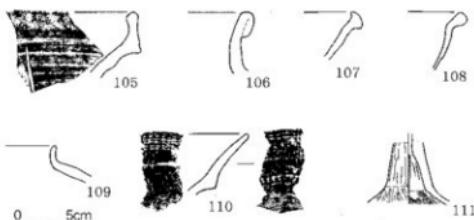


図67 第2・3郭出土土器類 (S = 1/4)

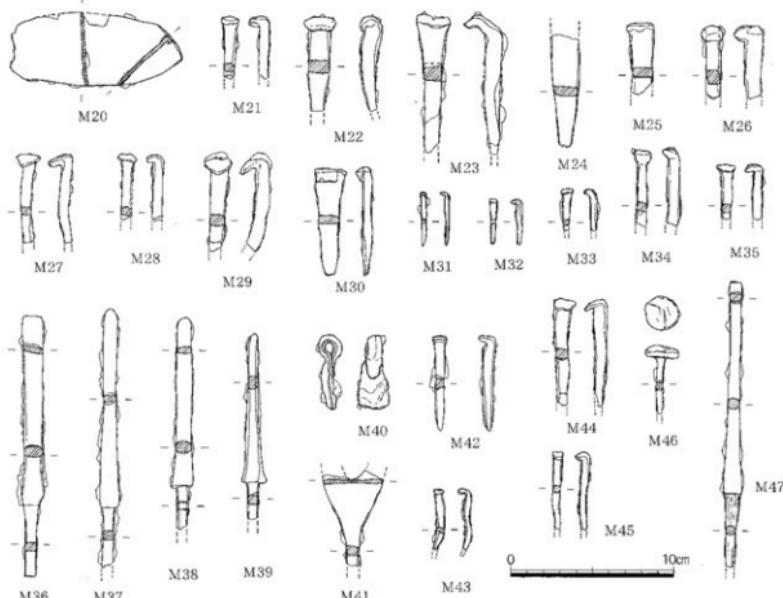


図68 第1・2郭出土金属製品 (S=1/3)



図69 一国山出土銅銭 (S=1/2)

(註2) 伊藤晃「沖の店遺跡2区溝および4区包含層の出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42 山陽自動車道建設に伴う発掘調査2-浅口郡鶴方町』 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1981年 草戸千軒町遺跡 S D760より後出的とする。また内耳付埴は草戸千軒町遺跡ではIV区後半新段階

(SD760)から出土するとする。IV区後半新段階は最近の年代観では15世紀末～16世紀初頭と想定されている。

- (註3) 綱本善光「中世土器について」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告1 山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡』建設省岡山国道工事事務所・笠岡市教育委員会 1987
- (註4) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69 山陽自動車道建設に伴う発掘調査3 亀山遺跡・西光坊遺跡・沢寺遺跡・道口遺跡・唐津池北遺跡・上竹西の坊遺跡』建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
- (註5) 森田稔「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編 1995
- (註6) 『瀬戸市史 陶磁史篇 四』瀬戸市 1993

第3節 まとめ

1. 一国山における遺跡の概況

一国山における遺跡の概況を報告してきた。特にIII・IV区の出土品からみると、一国山頂には弥生時代後期、古代後半、中世と各時代の遺物が、散発的ではあるが確認されている。それらを積極的に評価し一国山での歴史を辿ってみれば、弥生時代には土壙墓などが展開する墓地として利用されていたらしい。その傾向は尾根上に古墳が築かれるなど古墳時代にも継続していた。この時期居住の痕跡は見あたらない。それは古代に至っても同様である。ただ、古代後半になると土器が検出されるようになるので、この地で何らかの行動をした者がいたのであろう。中世後半になると、南側に段状遺構を構築するなど積極的に開発し居住し始める。大量の炭屑とフイゴの羽口の出土を関連づければ、炉跡は検出されていないが、鍛冶がこの地でおこなわれていたと想定できる。段状遺構に建てられていた建物は、そのような職に従事する者の住居と想定することは可能であろう。塙の出土は、少なくとも16世紀初頭ぐらいまでは、居住空間として機能していたことを示している。それから後に、城に関連する造成がおこなわれるようになる。土塁の築成は、塙の埋没を考慮すると16世紀前半以降となり、

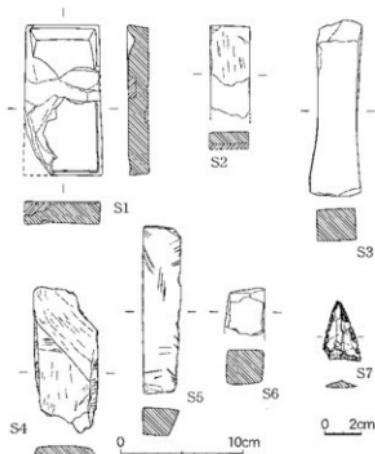


図70 一国山出土石製品 (S=1/4・1/3)

III(82)は一国山城の整備時あるいは直後の遺物となる。そして1582年、足守川を挟んで織田と毛利が対峙し幾多の攻防を繰り返したが、一国山にも織田勢の兵が配備され、眼前の冠山城を攻略する一翼を担って史料の世界に登場した。近世江戸期になると、寛永通寶などが出土しているが、資料は乏しくなる。第二次世界大戦中および戦後に、畠地として開墾の対象となった時期も存在していたが、現在まで山林として放置されていた。皮肉な事だが、山土採取地として消滅を前提に再び登場することとなった。

2. 段状遺構について

一国山の西に広がる足守平野は、嘉応元(1169)年に絵図が作成され後白河院に寄進された足守庄の庄域にあたる。この絵図には、山・川・田など地形の描写はもちろん、建物や家屋なども描

かれており、当時の景観を彷彿とさせる。足守庄に関しては、絵図の読解、文献資料の探査、現地との照合など研究がなされ、重要な成果が蓄積されてきている（註1）。絵図と現地との比定も、一部を除きほぼ確定している。一国山に引き寄せて絵図を見ると、注記されているわけではないが、三井谷と王子堂の所在する谷とに隠れるように描かれている山が、恐らく一国山である。平野部の周囲を取り巻く山々の裾には、寺、神社、住宅なども表現されており、その粗密などもきちんと描かれている。しかし一国山には家屋など特徴的情景は何も表現されていない。開発が及んでいない状況を示しているのである。第1郭南肩から出土する古代後半の土器は、絵図の描かれる遙か前の年代であるが、人の活動及び生活行動が辿れる痕跡である。しかし、絵図に残されるような普請や作事が行われることもなく、単発的な行動で終わってしまったのである。

莊域内の様子を窺い知ることのできる発掘調査が若干実施されている。足守深茂遺跡の事例（註2）である。ここでは、現在の畦畔の下に、中世前半及び後半と想定される畦畔と溝等が検出されている。絵図作成後の状況であろうが、溝は数次にわたって改修され使用されていたこと、護岸に杭列を打ち、水田への導水用として木樋も設置されていたことが判明している。莊域内の情景は絵図作成後もさほど変貌することはなかったが、経営や開発への努力は不斷に継続されていたのである。その一端が足守深茂遺跡の事例から読みとれる。一方、開発及び経営の安定化願望は、社寺の造営修復を通して希求されたことであろう。暦應元（1338）年、王子堂に建立された宝殿（註3）。また康安元（1361）年、足守八幡宮の石製鳥居（註3）などは、私的な繁栄をうちに秘めながらも、土地の豊饒を祈念する莊民の信仰の拠り所として整備されていったのである。鳥居を作事した大工沙弥妙阿は、鼓神社の宝塔も製作している。経済的富裕層の存在と活躍を基盤として、社寺の整備や莊域内の開発が活発におこなわれていた時代であることは疑いない。この時期は経済的に活発な環境にあったと言え、当然未開発地の開発も積極的に計画実施されていたことであろう。

14世紀前半から中葉は、段状遺構が造成され、遺構が残された時期に想定される。周辺の開発により新に出現してきた住人の居住地、あるいは絵図に表現されている既存の集落から独立してきた人々の居住の跡。さらに、大工沙弥妙阿らのような作事活動に従い移動する職人たちの居住地であった可能性も考えられる。この段状遺構は、中世土師質土器の一形式ほどの期間しか存続していなかった。この場所が定住の地ではなかった事を示していると同時に、ここに住居を構え居住するに至る契機がやはり特異であったことを示しているのである。

また14世紀中葉は、北条氏の執権政治が崩壊し、後醍醐天皇親政、そして足利氏による執政と変動の時期にあたり、ここ備中地域でも幾多の戦乱があった。突発的な戦乱を避けた避難所的機能を担っていた場所であったのかもしれない。

3. 一国山城について

一国山城跡は、遺跡的にも文献資料的にもほとんど顧みられることのなかった城跡で、わずかに「中國兵乱記」に登場するにすぎない。しかもその文献は、毛利方の經山城主中島大炊助元行による合戦体験記であり客觀性に乏しい。しかし、合戦参加の当事者による描写という点では、陣の状況や兵の配備に関して実態を反映していると思われる。ちなみに、冠山城攻防の項には陣城に関しては以下の表現が記されている。1. 龍王山・四塚・門前・妙現山の峰々=「陣城を構」、2. 金床山=「旗を立て並」、3. 三井谷南の敵・日指山の峰=「陣城を築」、4. 北の平・扇子谷山の峰・一国山の峰・朱福寺山=「人數を揃」と書き分けられているのである。この異なる表記が、文学的表現なのか、



図71 足守荘絵図トレース（鈴木氏作成に一部改変）

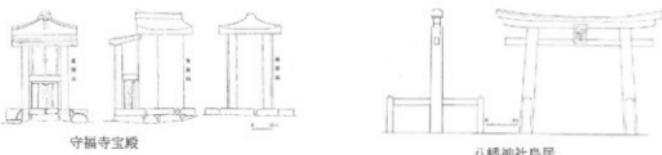


図72 守福寺宝殿・八幡神社鳥居実測図

あるいは現地の実態をある程度反映したものかどうか大いに関心がある。しかし、文献上の各陣城と現地との厳密な比定がなされておらず、また現状遺構の把握がされていない状況では、その客觀性を評価する状況はない。

さて、発掘調査の結果、一国山には、主郭と曲輪は認められるものの、その他の施設の所在は確定できなかった。また、主郭西側に確認される方形状の石列あるいは方形土壇も、中央部分に複数の土壇が重複して掘り込まれていることもあり、城に付設する施設であるかどうかは不明とするしかなかった。仮に一国山城に伴うものであるならば、櫓台あるいは狼煙台のような施設であったかもしれない。さきに一国山は、冠山城の戦いで前線指揮所の役割を果たしていたかもしれないと思定したが、そうであるならば、方形壇はまさに見張り所としての櫓台、ないしは連絡用の狼煙台との想定もあながち飛躍とは言えないだろう。

また、西に延びる尾根上に曲輪が連続するが、地形をみる限り、この方面が想定される登城のルートになると思われる。この想定される登城路が第1郭に接続する場所は、鍵の手を形成し

ているように見える。ただこの場所は、中世後半の居住遺構である段状遺構が所在していた場所であり、地形的にもその影響を受けていることは確かである。さらに、このルートは最近まで墓地から一国山山頂に至る登山道でもあったので、この鍵の手状の地形が城に係わる遺構との確証はとれない。どこまでが、先行する遺構の痕跡であり、どこまでが城の造作であったかの判断は難しい。それでも、先行する遺構の改変および再利用を図りながら、曲輪の形成、土塁の構築などの土木作業を実施していった可能性は高いと思われる。

一国山は、冠山城攻略時に秀吉方が兵を揃えた場所として初めて登場する。一方、同様に表記されている朱福寺山は、「宇喜多直家が備中へ攻め寄せた事」でも「朱福寺山へ引き揚」とか「朱福寺山に人数を揃」（註4）と繰り返し登場する。ということは、この辺り一帯が、兵の集結・待機場所として機能していたに違いない。一国山は陣城の機能・景観を備えていた。表記上は一国山と同格の朱福寺山も、応急的、突貫的ながらも砦の普請は実施されたと思われる。眼前に敵が対峙している緊張関係のもとでは、この周辺に登場する地名の場所には、なんらかの普請が行われていたと理解するのが自然であろう。

さて、冠山城（註5）は、主郭・曲輪の配置や乾堀、そして少なくとも3箇所ほどの出入口（註6）があるなど小規模ながら本格的な城構えを備えている。また、現在民家が建て込んでいる空間は、根小屋的な施設とかが展開していた場であったとも思われる。この城は、対織田方との「境目の城」と言うだけでなく、この辺り一帯を掌握していた領主層の經營拠点ないし在所として整備されていたからであろう。その意味では在地に根ざした、規模以上に堅固な城と言えようか。

一方、一国山は臨時的な砦であり本格的な城とは言えないから、主郭・曲輪の配置や堀切が見られない等、城郭構造が単純であるのは当然と言えるかもしれない。それでも、冠山城を攻撃対象とするとき、尾根が延びている方向が攻撃面となり、そちらに対して曲輪を整備している状況は、まさに攻撃しやすく、防御もしやすい構造を意図して築成されていると思える。一国山は織田・秀吉方の陣城であるが、まさに冠山城を眼下に見下ろせる位置にある。安全な場所でありながら、冠山城の様子が手に取るように観察でき、しかもすぐに攻撃に移ることもできる絶好の場所にある。対冠山城との戦闘で言うと、一国山は前線の見張り所ないし指揮所の役割を果たしていたと思われる。「中国兵乱記」に基づく攻撃ルートの想定（図73）（註7）からも、一国山の役割と評価について容易に理解することができる。

また、背後の朱福寺山は兵の集結及び避難する場所として認識されていたことは前述した。するとその前方に位置する一国山は、冠山城或いは毛利方からの視線を遮る屏風のような役割も果たしていたと言える。

1582年を前後する短い時間のなかで登場し、そして埋もれていった一国山（陣）城。その一国山（陣）城の発掘調査を通して、思い描いてきたことを、雑駁ながら述べてまとめてかえたい。

註

（註1） 鈴木景二「足守莊絵図および関連資料」「足守主関連（足守幼稚園）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会 1994 足守莊の研究史・文献資料などが簡潔にまとめられている。

（註2） 宇垣匡雅・高橋伸二「足守深茂遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報1』岡山市教育委員会 2002

（註3） 『岡山市の有形文化財資料集成I』岡山市教育委員会 1983

守福寺宝殿「暦應元年寅寅十一月二十三日 王子・・」(1338)

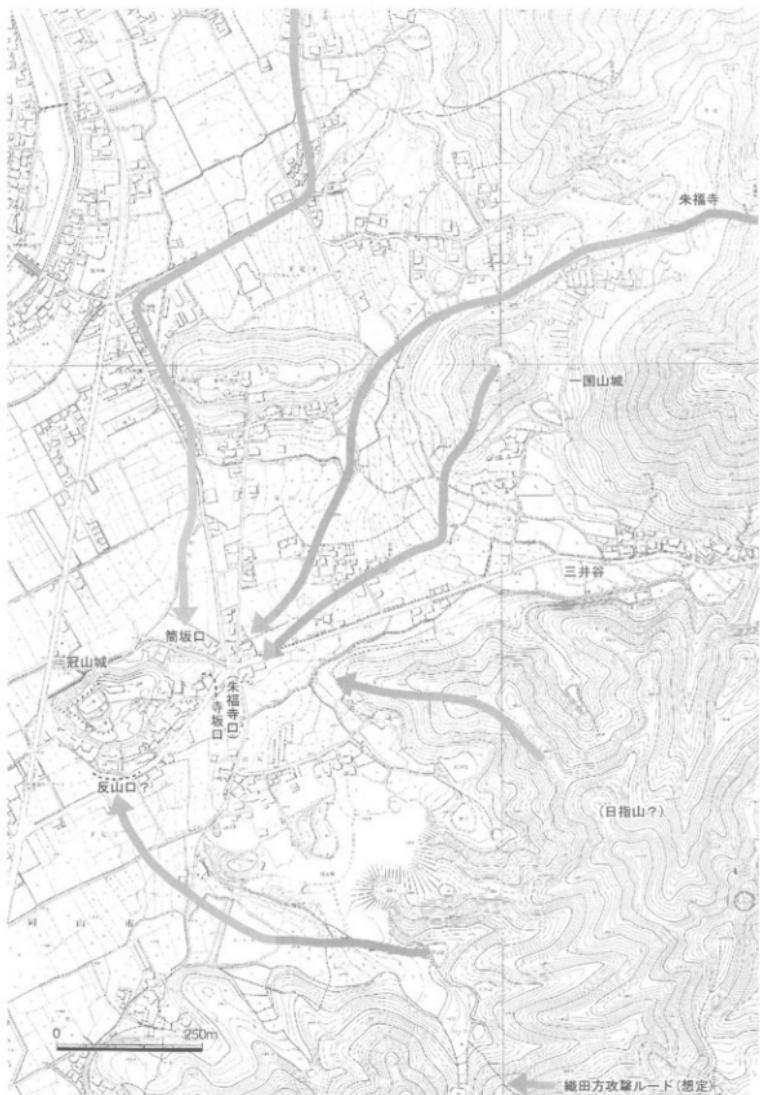


図73 冠山城と一国山城

八幡神社鳥居「康安元年辛丑十月二日願主神主賀陽重人 祝師僧額澄 大工沙弥妙阿」(1361)

(註4) 「中国兵乱記（宇喜多直家が備中へ攻め寄せた事、附毛利家より城に加勢を籠められた事）」「吉備群書集成」

(註5) 葛原克人「冠山城」「日本城郭大系13 広島・岡山」新人物往来社 1980 図73の冠山城の「繩張り図」は葛原図を引用。

(註6) 「中国兵乱記（秀吉卿備中冠山城攻城主禰屋七郎兵衛の事）」「吉備群書集成」「寺坂口、反山簡坂口押寄、三方より責懸り、三方の棚に付」とある。

(註7) 『そもそも山遺跡－城郭、中世幕、古墳の発掘調査報告一』岡山市教育委員会 1998

参考文献

1. 加原耕作編著「中国兵乱記」「新訳備中兵乱記」山陽新聞社 1987

2. 石井了節撰「備中集成志」「第拾八之巻 古戦場ノ部 一、秀吉冠山城ヲ攻ル事」吉備文化研究会 1943

3. 中国兵乱記抜梓 「秀吉卿備中冠山城攻城主禰屋七郎兵衛の事」

同年三月十七日、畿田潤次丸は龍王山へ構陣城入城、羽柴秀吉は四塚門前妙現山の峰々に構陣城¹、金床山に各家の旗を立並べ冠山城を遠巻仕、信長卿より為²両使³、杉原七郎左衛門・千石権兵衛を被レ遣、口上を、神主堀家掃部城内へ被。著越候。城主禰屋七郎兵衛事、武勇達人と被レ及⁴聞召⁵たり。今度属⁶信長⁷ 次丸秀吉と申談、西國の先鋒御頼波、成由波⁸仰下候。七郎兵衛御請に、信長卿任⁹御意¹⁰、度儀なれども、數年隨¹¹毛利家¹²、信長卿と御境目に在城仕、輝元・隆景懇意不¹³。凌處に、今度背¹⁴毛利家¹⁵、御身方仕候へば、失¹⁶忠義¹⁷候間、毛利家に罷有遂¹⁸防戦¹⁹其上にて切腹可²⁰仕由御返答申上候へば、三月二十日寅の刻未横雲の不²¹引に、三井谷南のうね日指山の峰に築²²陣城²³、北の平・扇子谷山の峰、一國山の峰、朱福寺山へ人数を備へ、寺坂口、反山簡坂口押寄、三方より責懸り、三方の棚に付、乾堀へ飛入り、堀櫓を引破らんとする。城内も侍向ふ敵なれば少も不²⁴疾、將軍義昭公御旗輝元卿の赤旗城中に押立、矢倉狭間より鐵炮を打懾る事如²⁵雨降²⁶、上方勢あぐみ漂ふ間に、死亡手負数を不²⁷知。朱福寺口は、秀吉卿御旗本杉原七郎衛門先手にて、御敷貢給ふ。城兵も手腻り能く、禰屋興七郎・同孫市郎・佐野和泉・庄九郎・守屋新之丞隊²⁸防戦²⁹、籠城堅固に相抱処に、三月二十四日夜、伊賀忍者城中へ火を付くれば、鐵砲の薬蔵に火移り騒動なし、寺口の堀を乗越³⁰秀吉卿軍勢城内へ乱入る時、加藤虎之助は城兵武井得監と相戦ひ、得監を討捕、杉原七郎座衛門・内山久蔵・美濃部與藤次、城兵秋山新四郎と追合ひ、秋山を討捕り、上勢城内へ入乱る。伊賀・甲賀の者所々に火を付け候時、禰屋七郎兵衛申すは、敵以³¹數萬騎 口々を相押候へば、不³²適時到来也。各某と不³³難一手に退給はゞ、秀吉卿の旗本へ切入³⁴、敵の大将不³⁵討捕³⁶は我々可³⁷。枕並と堅約し、果喰山迄退ける。此所に荒木平太夫・堀尾茂助有³⁸、備、城兵を取巻き討んとす。禰屋七郎兵衛・松田左門・三村孫太郎大勢切て入相戦ふ。城大将禰屋七郎兵衛父子・同孫市郎・烏越左兵衛・林三郎左衛門・岩田内膳、果喰山扇の内に剣菱の赤旗押立て、身方を待居けるに、首二つ三つ不³⁹持參⁴⁰はなし。禰屋父子其外も五カ所七カ所手負ひ、備自由不⁴¹。成に付、禰屋孫市郎を御本陣へ遣し、御注進申上候。『吉備群書集成』

第5章 一国山古墳群

第1節 調査の経過

本古墳の立地する一国山は、遺跡地図（註1）によると、頂上に城郭遺構が記載されているのみであり、古墳群の所在は確認されていなかった。第4章で述べた、一国山城の調査に伴いトレンチを設定し掘り下げたところ、第3郭平坦面上から組合せ式箱式石棺を2基確認し、一国山1号墳と命名した（石棺1・2）。また、第3郭の調査が進行すると1号墳の東南から、破壊された石棚及びその周囲の外護列石が確認されたため、一国山2号墳と命名し、2基同時に一国山城と併行して調査を実施した。

一国山城第3郭の南西側斜面は、マウンドも確認されず、古墳の存在を想定していなかったが、一部に小規模な段状の遺構が認められ、新たな郭の存在を想定して、周辺に北東—南西方向のトレンチを設定し確認調査を行った。その結果段状地形の形態や規模から新たな郭の可能性は否定されたが、5基の組合せ式箱式石棺が検出された（石棺3～7）。そのため新たな古墳の存在を想定して、周囲の表土を除去したところ、3基の古墳を検出し、一国山3・4・5号墳と命名した。3・4・5号墳の立地する尾根筋の北西、南東側は、急斜面となっており、南西部は竹藪造成によって大きく削平されており他に古墳は確認できなかった。

一国山1号墳と一国山3・4・5号墳は、主体部長軸の方向が異なり、また距離にして約15m離れている。さらにその間に他の古墳が確認できないため、別個の古墳群として扱うべきであろうが、便宜上本書では1つの古墳群とした。

1・2号墳の調査は平成17年1月～3月まで一国山城の調査と併行して行い、3・4・5号墳の調査は同年3月末まで行い、4月以降当教育委員会職員のみで残務処理に当たった。

（註1） 改訂岡山県遺跡地図第6分冊 岡山県教育委員会 2003 による

第2節 遺構と遺物

第1項 一国山1号墳

一国山1号墳の概要 一国山1号墳は前述した一国山城の第3郭平坦面のほぼ中央付近、標高約73mに位置する。後述する一国山2号墳と北端ではほぼ接し、同3～5号墳の位置する斜面からは約15m離れている。（図74）

墳丘 墳丘上面は一国山城第3郭築成に伴って削平されたと考えられ、マウンドは不明瞭である。第3郭上の表土（図76第1層）直下より石棺1の蓋石が検出されていることから、墳丘築造当時は現在よりも高かったと考えられる。主体部の箱式石棺は第2～4層を掘り込んでおり（図76）、この3層

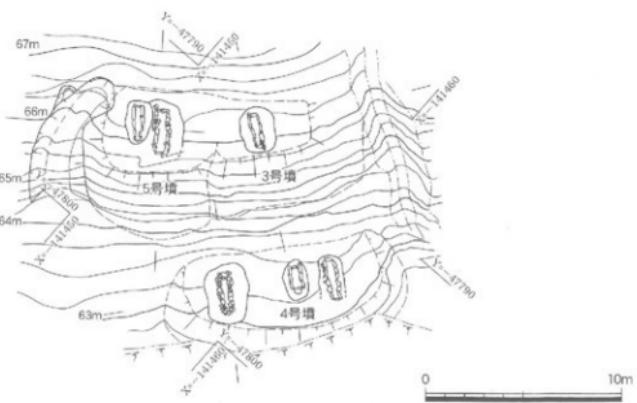
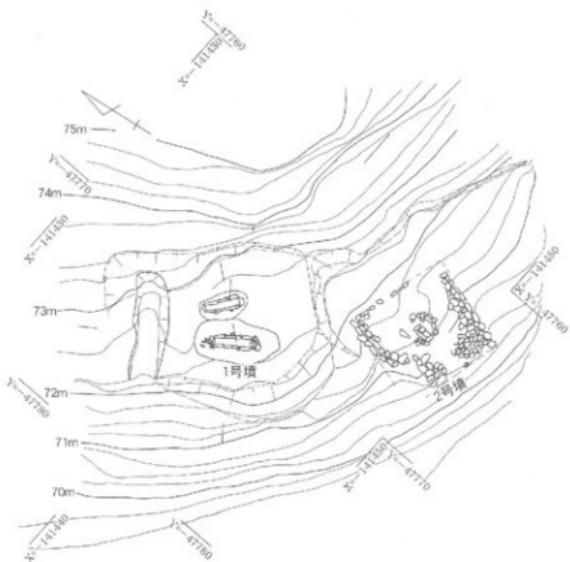


図74 一国山古墳群造構配置図 ($S = 1/250$)

圖75 — 國山1・2号地形測量図
(S = 1 / 150)



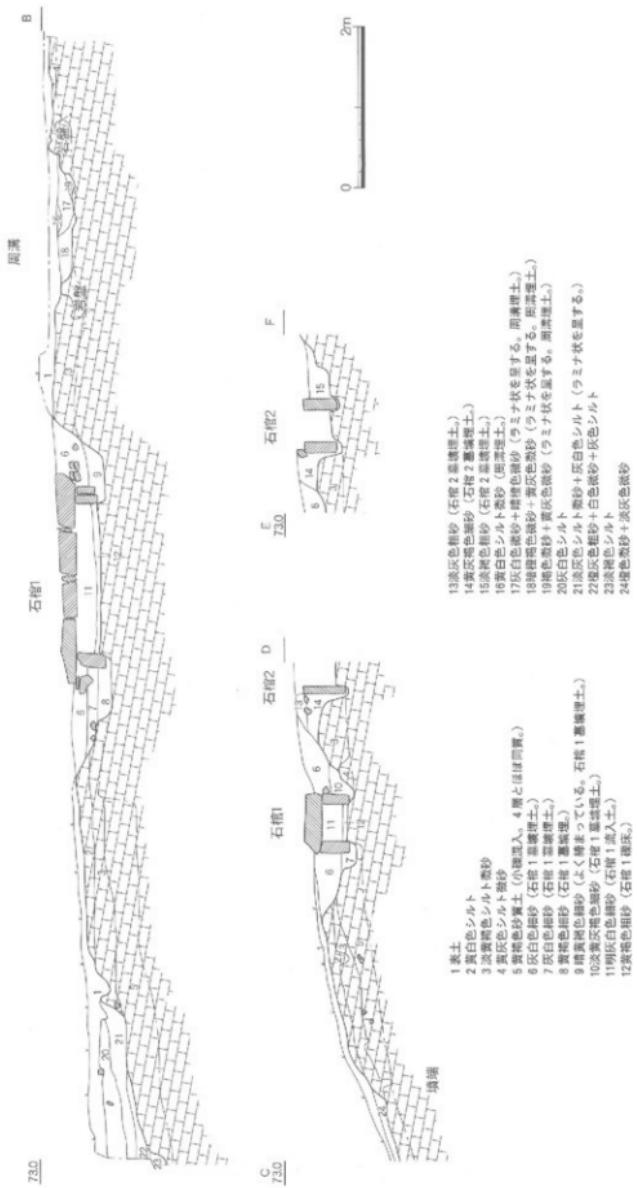


図76 一里山1号墳墳丘土壤断面図 (S=1, /60)

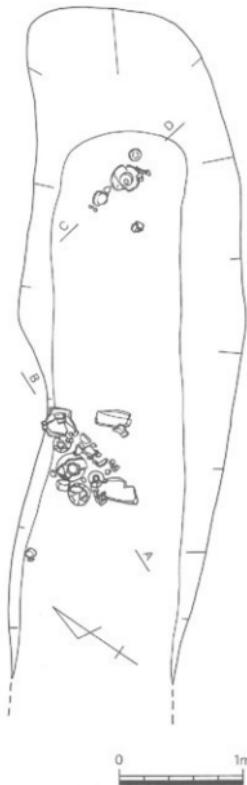


図77 一国山1号墳周溝平面図 ($S = 1/40$)

は第3郭の西～北に広く堆積しているところから、現存しているマウンドは、自然堆積層を整形して築かれていると推測される。

墳丘の東側は、南北約9mにわたり、一部露岩を含む地面を段状に削りだし墳頂の平坦面を構築している。また墳丘の北側では、東から西へ延びる溝が検出された(図75)。この溝は主体部との位置関係から周溝と考えられ、これらの遺構から本古墳は東西約7m、北端は一国山2号墳築成に伴い削平されていると考えられるが、南北9m以上の方墳と考えられる。

周溝 西端を第3郭石列により破壊されているが、長さ6m以上、幅約1.3m標高約64.25m付近から東へ延び標高66.5m付近、墳頂平坦面造成のため、斜面を段上に削りだしたところで途切れています、深さ約0.15mの直線上の溝が検出されています。この溝からは古墳時代中期の須恵器及び土師器が、大きく2カ所に固まって、底に置かれた状態でまとめて出土している(図77)。完形のものも見られる。埋土は4層(第16～18層)で自然に埋没したものと推測される。

主体部(箱式石棺1) 本古墳の墳頂部、地山整地面の中央に、箱式石棺2と並んで築成されている。地山を掘り込んだ墓壙は二段に掘られた可能性があり、内側の墓壙は長辺約2.7m、短辺約1.2m深さ約0.4mである。また石棺の床面には置き土等は確認できず、地山掘削停止面が棺床とみられる。

蓋石は大型の板石4枚で構成され、蓋石の隙間は小礫を充填している。このような出土状況から本石棺は未盗掘である

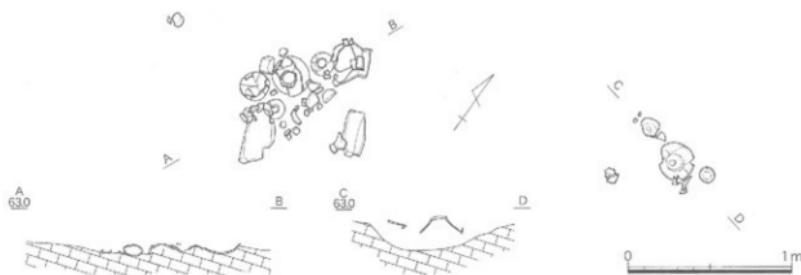


図78 周溝内遺物出土状況平・断面図 ($S = 1/30$)

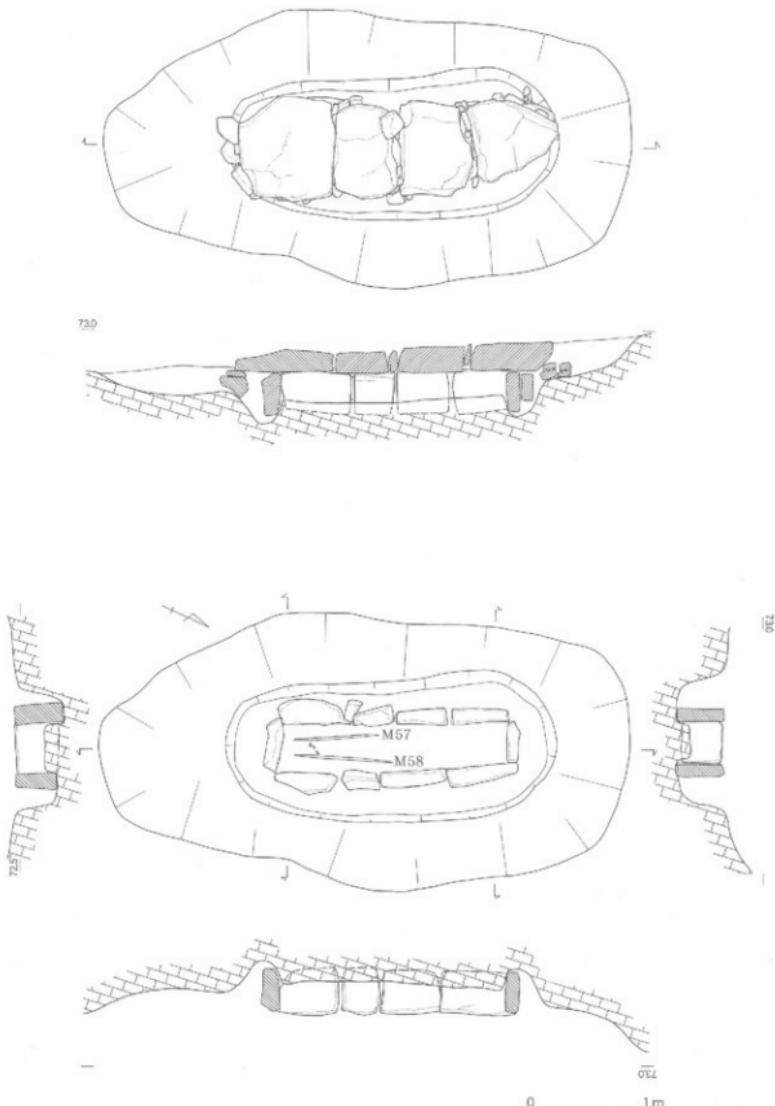


図79 一国山3号墳石棺1平・断面図 ($S = 1/40$)

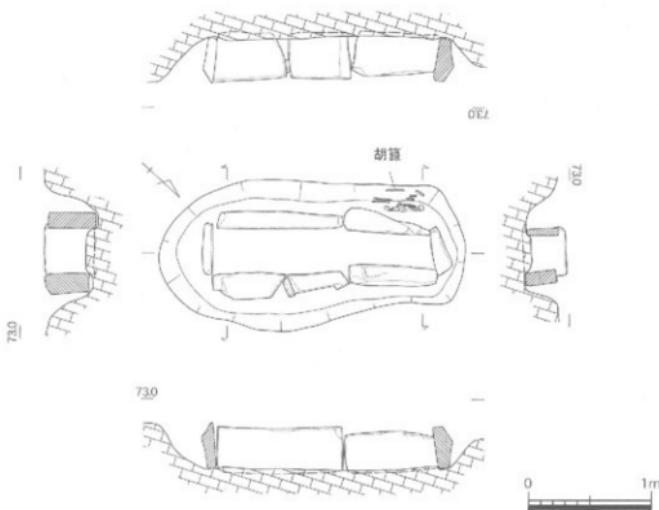


図80 一国山1号墳石棺2平・断面図 ($S = 1/40$)

と考えられる。石棺の側石は比較的形の整った板石を、各短辺に1枚、各長辺に4枚並べる。短辺の側石を挟み込まず、角を合わせるように側石を組んでいる。また、一方の小口面を狭くするような工法を意図した形跡はみられない。

棺の内法は長さ約1.9m、幅約0.3mである。石棺の長軸中心線はN24°Wを示しており、尾根方向に対して直行して築かれている。棺内に人骨等の有機物は残っていなかった。

副葬品として石棺内から鉄刀2本、管玉5点、勾玉が1点、ガラス小玉が26点が出土した。鉄刀は2本とも切先を北に向けて並んだ状態で出土し、その並んだ鉄刀の間から勾玉と管玉とガラス小玉がまとめて出土しており、本来一体であったと考えられる。これら副葬品の出土状況から、被葬者の頭位は南と考えられる。

主体部（箱式石棺2） 箱式石棺1の東に隣接して構築されている。石の組み方は箱式石棺1と類似するものの、蓋石は伴っていないかった。墓壙は地山を掘り込んで形成されており、規模は長さ2.5m、幅1.2m、深さ0.4mである。石棺の長軸中心線はN42°Wを示しており、尾根方向に対して直行して築かれている。

棺内は流入した土砂で埋まっていた。石棺側石の構築方法は箱式石棺1とよく似ているが用いられた石は大型で、一部に切石とみられるものもある。北側短辺の幅がやや狭くなっている点と箱式石棺1の状況からみて、埋葬頭位は南であったと考えられる。棺内から副葬品は出土しなかったが、墓壙内北西隅から鉄鏃を納めた胡簾が出土している。

出土遺物 図81は箱式石棺1の出土遺物である。

鉄刀（M57・58）は2本とも直刀である。M57は茎の端部をわずかに欠損しているが完形品である。



圖81-1 一國山1號墳石棺1出土遺物 ($S=1/4$)

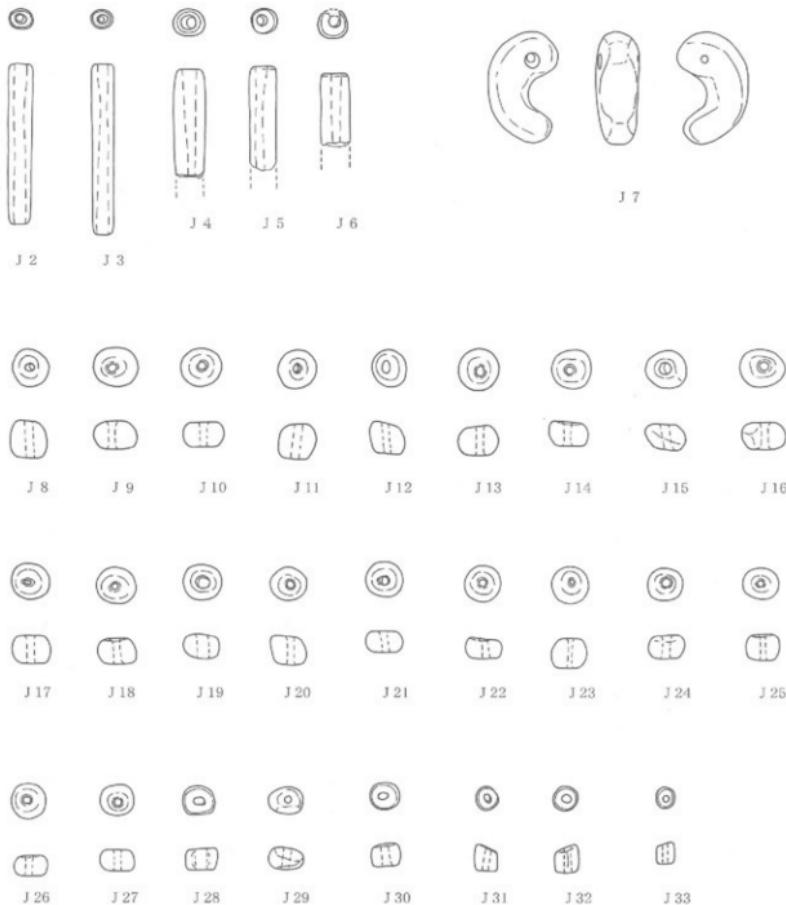


図81-2 一国山1号墳石棺1出土遺物 (S=1/1)



茎部を含めた全長は737mmで刃部は全長591mm 幅27mm、背幅6.5mmを測る。関は刃側に段が作られている。M58は完形品で、刃部と茎部に木質がわずかに覗みられ、副葬時は鞘に収まっていたことが窺える。茎部を含めた全長は804mmで、刃部は全長664mm、幅265mm、背幅は最大で6mmを測り、M57よりひとまわり大型である。関は刃側に段が作られる。また茎部に目釘穴を有している。

管玉は碧玉製 (J 2・3) と緑色凝灰岩製 (J 4~6) で、それぞれ濃緑色・淡緑色を呈している。

勾玉（J7）は蛇紋岩製で片面穿孔である。ガラス玉（J8～J33）は青色を呈する。すべて勾玉の周辺から出土しており、本来は管玉・勾玉と一体であったものとみられる。

図82は箱式石棺2墓壙内、石棺内、そして石棺の周囲に散らばって出土した遺物である。

鉄鎌（M60～67） 箱式石棺2は盗掘を受けたためか、棺内から出土した遺物は乏しかった。しかし、墓壙の掘り方から胡簾に収められた矢束が出土した。掘り方上面は削平を受け胡簾本体は腐食が進み、一部原形をとどめているにすぎなかった（M59）。図示した鉄鎌は矢束からわずかに遊離した状態で出土しており、本来は矢束の一部を構成したものとみられる。鉄鎌はいずれも尖根系の長頭式である。M62・M63は柳葉式、M60・M61は片刃箭式である。

鋤先（M69） U字型鋤先の一部と思われる。石棺の埋土から出土した。同形式の鋤先が本石棺北西の周溝付近の流土より出土している。

帶金具（M70・M71） 帯の結束部の一部と思われる。石棺内より出土した。被葬者に装着されたものあるいは胡簾の部品の可能性もある。

胡簾（M75～M77） 矢束のクリーニング中に確認した。矢束を取り扱むように付着しており、鉄鎌の収納具である胡簾と考えられる。

その他（M72～74） 石棺埋土から出土した。M72は鉢留がみられ、M73はD字状の金具である。総社市法蓮40号墳でも同形の鉄器が出土しており（註1）、それらは弓矢の収納具との関連が指摘さ



図82-1 一国山1号填石棺2墓壙内出土胡簾（S=1/3）

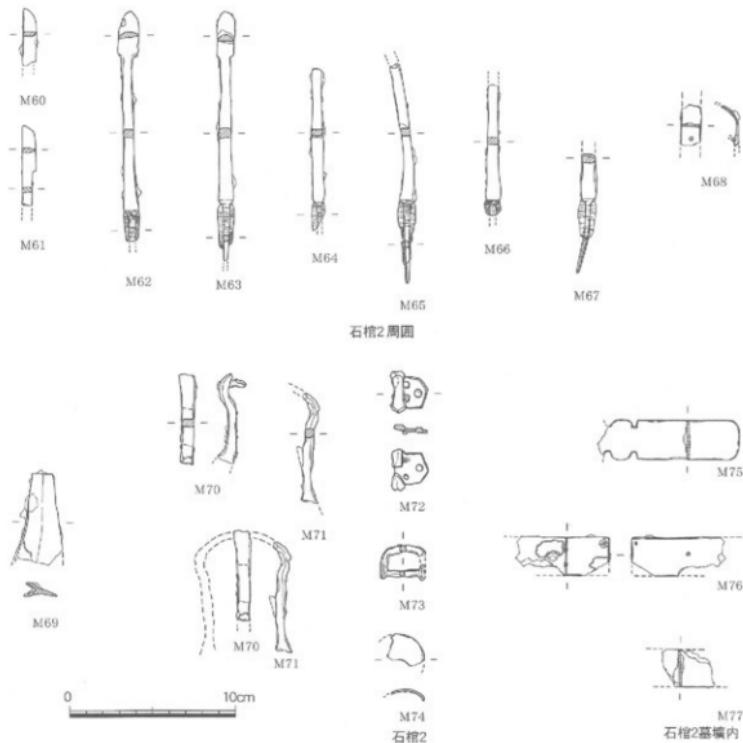


図82-2 一国山1号墳石棺2出土遺物 (S=1/3)

れている。出土状況が異なるものの、本資料も出土した胡簾と関連する可能性がある。

図83は、周溝内からの出土遺物である。

112~124はまとまって出土した、供獻と推測される土器である。112~122は土師器、123~124は須恵器である。123は高環である。環部外面には波状文が巡り、その文様帶の下部には、出土時点では失われていたが、両側に断面円形の把手がついていた痕跡が認められる。脚部はハの字形に開き、台形状のスカシ窓が3カ所に認められる。124は肩の張りが弱いタマネギ形の体部に、短い頸部を持つ、小型の甌である。口頸部の基部と稜の間に2本の波状文による文様帶が、稜の上面に凹線が巡る。

土器の他には、M78の鉄鐸、S8の蛇紋岩製の紡錘車が出土した。両方とも出土状況から、土器に伴うものではなく、周溝内に流れ込んだものと推測される。鉄鐸は、厚さ約1.5mmの鉄板を円錐形に丸め、薄い面であわせており、下端は上に抉れている。上部端は径4mm、下部端は径26mmを測る。断面は円形を呈する。舌は認められなかった。

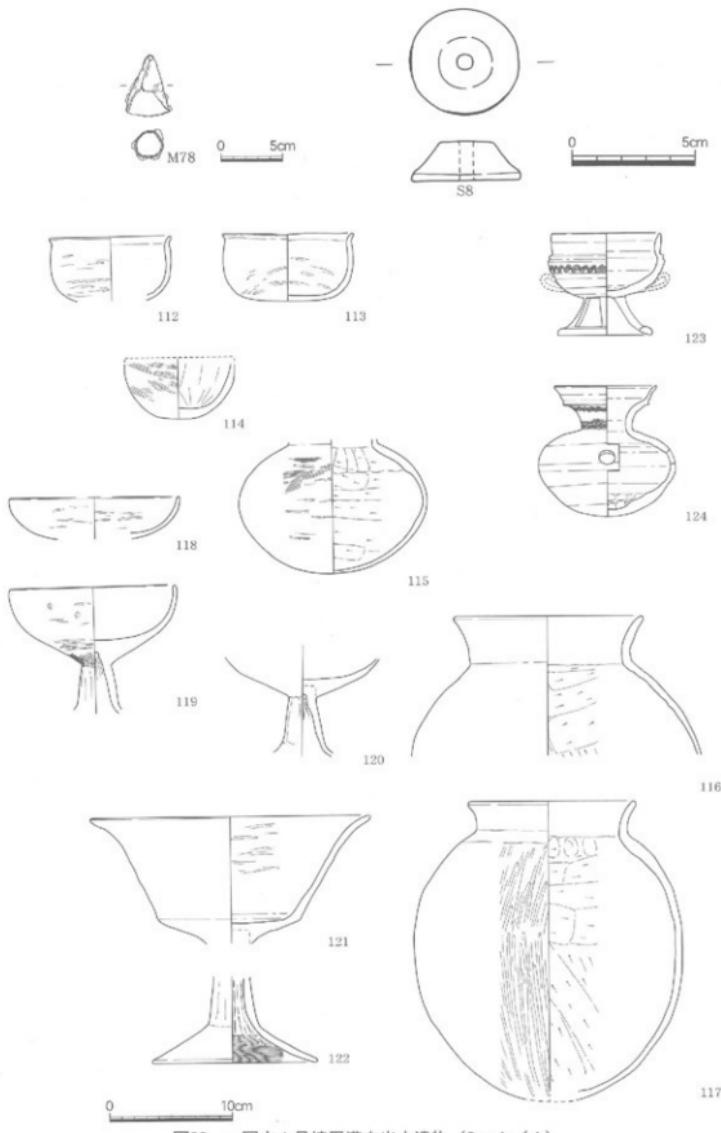


图83 一国山1号填周沟内出土遗物 (S=1/4)

第2項 一国山2号墳

墳丘 一号墳の南東に築かれた一辺約5mの方墳である。残存高は、南側の外護列石から測って約2.0mである。墳丘は斜面南から列石を配しながら、傾斜を緩めるように盛土を施して築造されている。墳丘を画する外護列石の遺存状態が良好であったにもかかわらず、石櫛は大きく破壊されており、また盛土の残りも良くないため、墳丘の高さは不明である。墳丘断面の観察結果から、石室は墓壙を掘り込んで形成しておらず、墳丘の造成と平行して構築されたものとみられる。

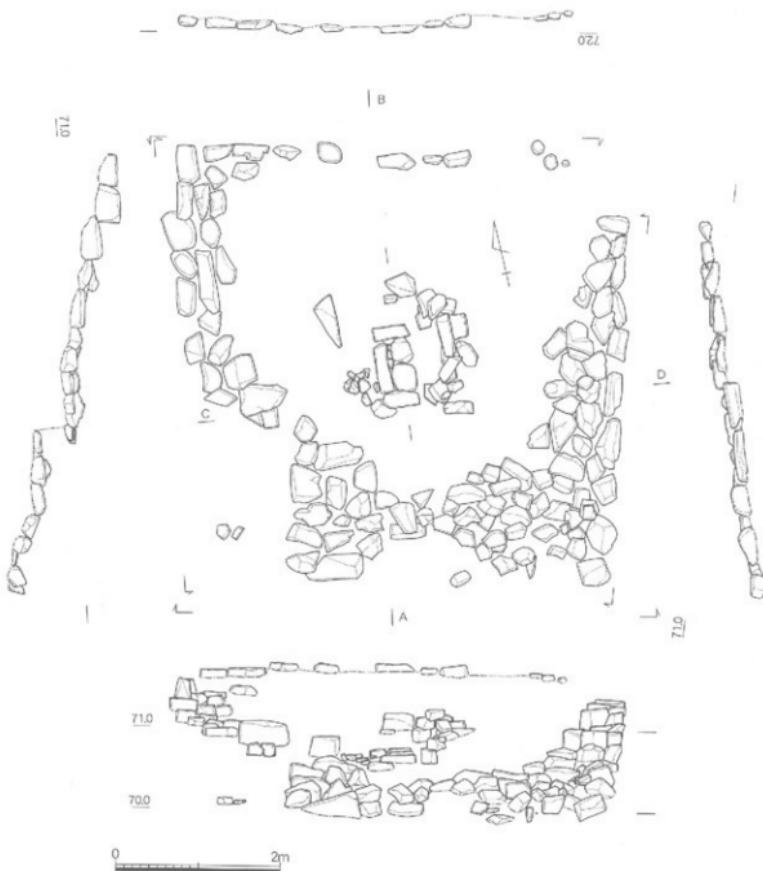


図84 一国山2号墳平・立面図 ($S = 1/60$)

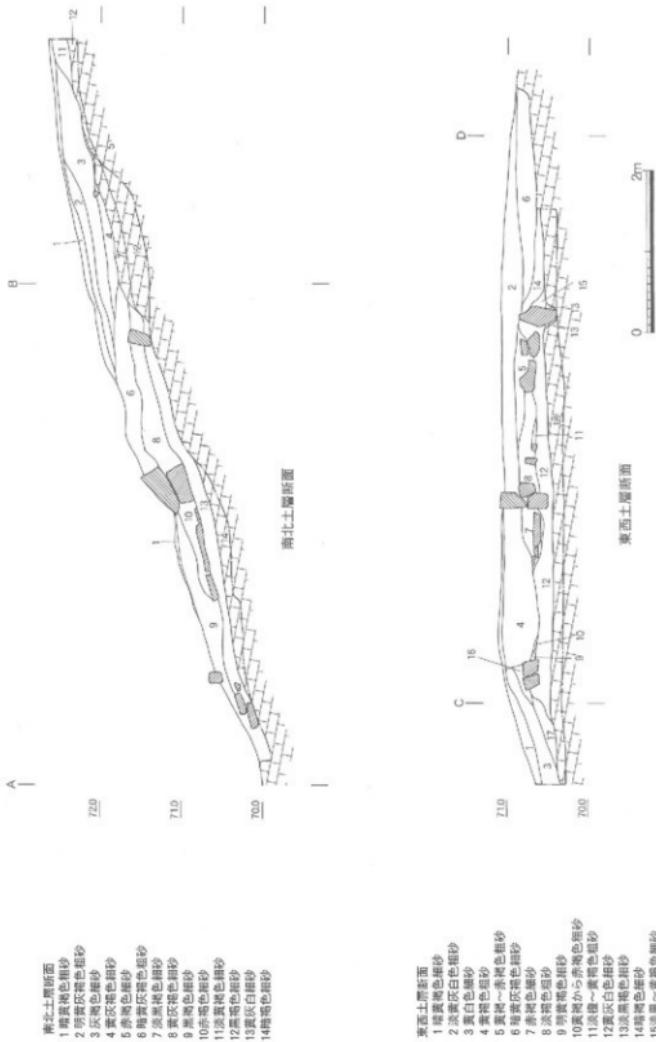


図85 一国山2号填埋丘土壤断面図 ($S = 1/60$)

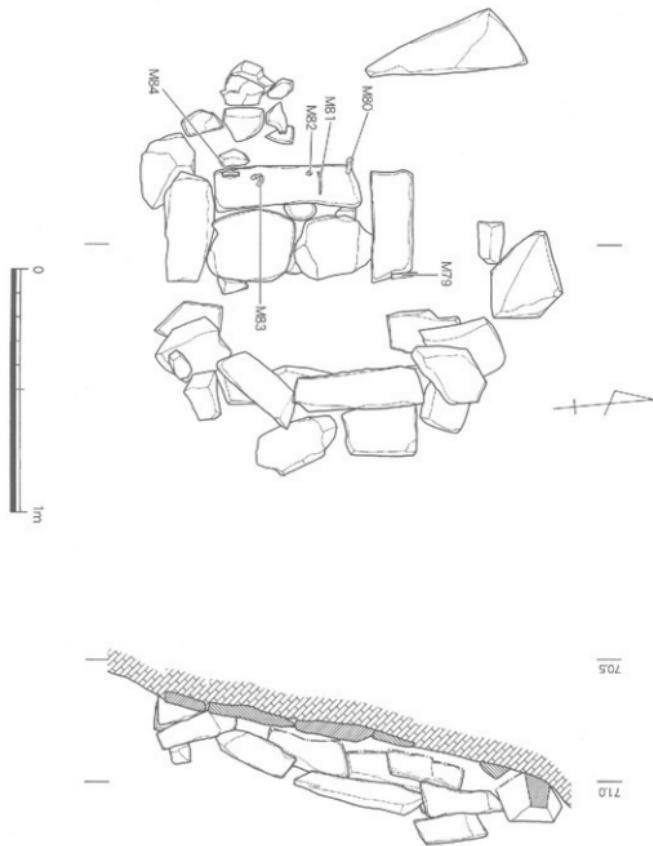


図86 一国山2号墳石擡平・立面図 (S = 1/20)

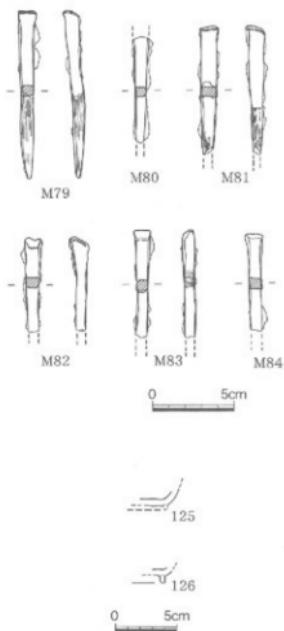


図87 一国山2号墳石室内出土遺物
(S=1/3・1/4)

M79~84は石室床面から出土した鉄釘である。125・126は、石室流入土（赤褐色細砂。図85第10層）から出土した、須恵器の細片である。須恵器片は2点とも、坏身あるいは長頸壺の底部とみられ、高台の特徴から8世紀代のものと推測される。

第3項 一国山3号墳

一国山3号墳の概要 一国山頂上から南西にのびる尾根筋上に位置している。一国山1号墳の約15m南西に位置し、一国山3号墳の約2m北東、5号墳と北西部で接しており、この3基の古墳で1つのまとまりをなしている。主体部は1基確認された（石棺3）。

墳丘 本古墳の主体部は、腐植土直下、GL-10cm付近で検出されているところから墳頂部はかなり削平されていると考えられる。また傾斜角15°~20°の斜面上に立地するため、墳丘全体がかなり流出していると考えられ、マウンドは非常に不明瞭である。

土層観察によると主体部の石棺は、標高66m付近の地山面（図89第2層）を整形した平坦面に墓壙を掘り、構築されている。マウンドも同様に地山を削りだしており（図89第2・4~6層）、標高64.

墳丘を巡る外護列石は、南に比較的大きな角礫を配置し、北に進むほど小さく、積み方も粗くなってくる。外護列石は、一部地山を掘削して置かれたものもみられるが、基本的に墳丘造成と併行して配置されたようである。現状からみて、低い部分となる主体部から南半は礫を積み上げ、一方高い部分となる主体部から北半は盛土を施して、墳丘を形成していると推測される。

埋葬施設 墳丘中央に構築された主体部は破壊されているため、その形態と規模を明らかにする事はできない。しかし、主体部の流土内から出土した須恵器の破片の時期、および外護列石の周り方からみて、南に開口する横口式石室であった可能性がある。埋葬施設は現状で、長さ1.3m、幅1m、高さ0.5mを測る。残存する東側の側壁は、板状に近い角礫を平積みにして構築されている。埋葬施設内部の床面は南にやや傾斜しており、その床面には5枚の板石が残存していた。それらの板石の直上から、鉄釘が出土した。（図86）

墳丘の規模及び主体部の造り、また鉄釘の出土状況からみて、石室は小規模なもので木櫃に収められた骨蔵器が安置されていたと推測される。

築造時期は、墳丘・埋葬形態および出土遺物からみて、8世紀代の所産と考えられる。

出土遺物 図87は、一国山2号墳出土遺物である。

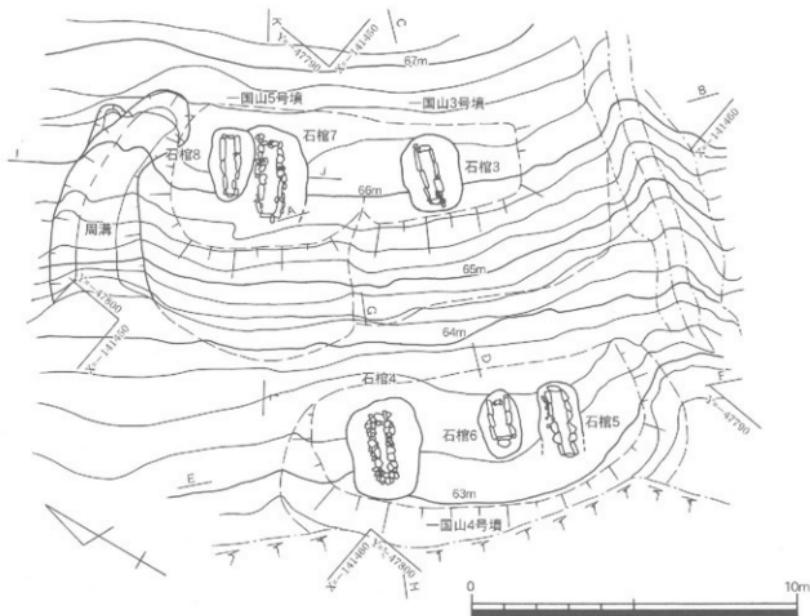


図88 一国山3・4・5号墳地形測量図 ($S = 1/150$)

3m付近に墳端が認められる。墳端が認められる部分は、尾根の傾斜角が若干緩やかになる傾斜変換点付近に当たり、この部分の地山を整形して墳端を築いたと考えられる。北西側には5号墳が接して築かれており、また主体部より約5m北東には、南西～北東へ上の山道がのびているため、尾根に直交する方向の墳端は不明である。しかしこの山道の延びる方向と、主体部長軸中心線とはほぼ平行であるところから、周辺部の微地形と併せてこの山道が、当古墳の墳端ラインを利用した可能性は高いと考えられる。

以上のことから当古墳は尾根筋に平行する方向（北東～南西）約5.2m、山道が墳端と仮定するなら直交する方向（北西～南東）は8m以上、最大高約1.6mの方墳と考えられる。

主体部(箱式石棺3) 本古墳の墳頂部、地山整地面の中央に築成された組合せ式石棺である。長辺最大長約2.30m、短辺最大長約1.75m、深さ約0.3～0.45mの、隅丸方形の墓壙を掘り、その中央に長方形の組合せ式箱式石棺を構築している。小口石及び側石の下にはくぼみ状の掘り方は認められない。石棺の長軸中心線は、N44°Eを示しており、尾根走向に平行して築かれている。

蓋石は7石で、 $0.55\text{~}0.8\text{m} \times 0.20\text{~}0.30\text{m}$ の直方体に近い割石を用いているが、頭位と推測される



図89 一圓山 3号填埋丘土壠断面図 (S = 1 / 60)

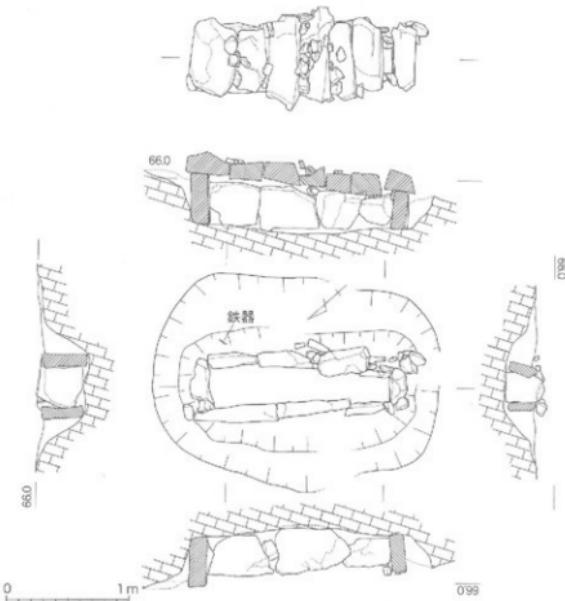


図90 一国山3号墳石棺3平・断面図 (S=1/40)

北東端部の蓋石は、 $0.66\text{m} \times 0.36\text{m}$ とやや幅広の石材を用いている。蓋石と蓋石の間には、小割石が置かれている部分もあるが、後述する石棺4・5・6のように割石を積み重ねた様子は認められない。

石棺内部は、蓋石の間から木根が侵入しており、かなり攪乱された様相を呈していた。側石の中にはそれによって前傾しているものもみられる。石棺身部は、厚さ約 0.15m の板状の割石で構築されている。内部の大きさは、全長 1.46m 、幅 $0.20\sim 0.34\text{m}$ 、深さ $0.30\sim 0.35\text{m}$ を測る。北東小口側は南西側よりも幅広く構築していることから、この方向が頭位と推測される。床面に整地層は認められず、墓壙の底が棺底と考えられる。棺底は、標高 $65.5\sim 65.6\text{m}$ 付近であり、中央部が低く両小口石に向かってあがっていく様相を呈している。

棺内からは破鏡1、管玉2、石杵1が流入土内から遊離した形で出土した。また石棺外の墓壙埋土内からは鉄器が1点出土している。

出土遺物 図91は石棺内からの出土遺物である。J34・35は碧玉製の管玉である。J34は全長 35.0mm 、径 7.0mm 、J35は残存長 14.4mm 径 5mm である。2点とも深緑色を呈するが、J35の方が若干深い。M85は、銅鏡の破片で、獸形鏡あるいは獸帶鏡の可能性があるが外縁付近しかないと明確ではない。外区に浅い溝を挟んで2列に鋸歯文が巡り、その内側には櫛歯文帯が巡る。その内側には銘帯が巡っていると思われるが、判読できない。割れ口はなめらかで、破片の状態で副葬されたと推測される。復元径は約 12cm である。S9は、朱の精製に使用された石杵と考えられる石器である。長楕円形の凝

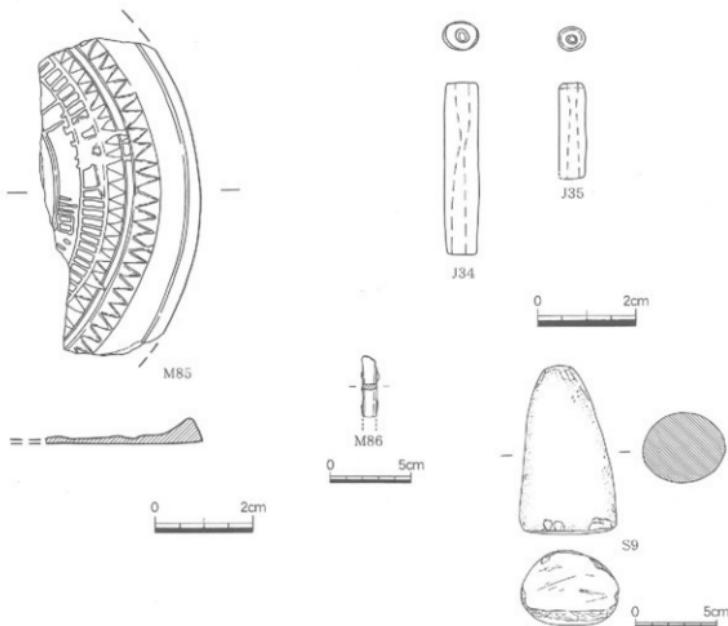


図91 一国山3号墳石棺3出土遺物
(M86・J34・35 : S = 1 / 1 M86・S9 : S = 1 / 3)

灰岩を切断し、その面を使用したと考えられる。長さ10.5cmの棒状で、面の部分は $5.7 \times 4.5\text{cm}$ のやや三角形がかった梢円形である。面の長軸方向に擦痕がある。ただし面及びその周辺に赤色顔料の遺存が認められないため朱の精製以外に使用した可能性もある。M86は、墓壙から出土した鉈と推測される鉄器である。

第4項 一国山4号墳

一国山4号墳の概要 本古墳は3号墳の南西部、同じ尾根筋上に位置している。3号墳墳端から約2m離れて墳頂部の平坦面が築かれ、かなり近接した位置にある。墳頂部は、標高63.0~63.5m付近にあり、3・5号墳の墳頂部の比高差は約3mを測る(図88)。主体部は3基確認された(石棺4・5・6)。

墳丘 本古墳は、傾斜角 20° の斜面上に位置しており、また主体部蓋石は、いずれも腐植土直下(GL-約10cm)のところで検出されていることから、マウンド全体が流出している可能性がある。

土層観察の結果から(図92)、本古墳は北西・東・南東側は基本的に地山層(第3・5層)を整形し、南西側は古墳築造前の地表面と推測される土層(第10層)の上に盛土(第8・9層)をおこなってマウンドを構築していることが確認された。また、墓横掘り方(第6層)が、南西側は盛り土(第8層)を掘り込んでいることから、盛土をおこなった後に主体部を構築したことも確認された。

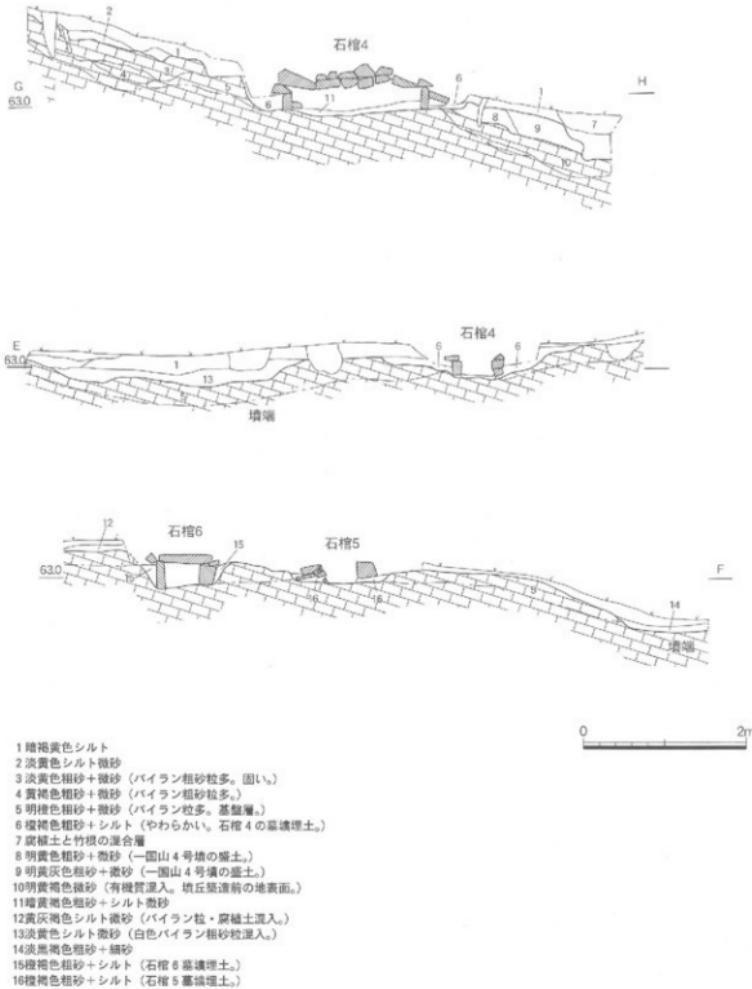


図92 一国山4号墳埴丘土層断面図 (S = 1 / 60)

現存する墳丘の規模は、尾根筋に直交する方向（北西—南東）約12m、尾根筋に平行する方向（北東—南西）は南西側墳端が後世の竹林造成により破壊されていたが、残存長約5mである。なお残存高は約0.7mである。墳形は、南西部が破壊されていて不明瞭だが、墳頂部平坦面の形から方墳の可能性が考えられる。周溝等区画する施設は確認されなかった。

主体部（石棺4） 本古墳の内部主体の内、一番西側に築成された組合せ式石棺である。墳丘地山整地面に隅丸方形の墓壙を掘り、その中に長方形の組合せ式箱式石棺を構築している。墓壙の規模は東西最大幅約2.2m、南北最大幅約2.9m、深さ約0.4mを測る。小口石及び側石の下にくぼみは認められない。

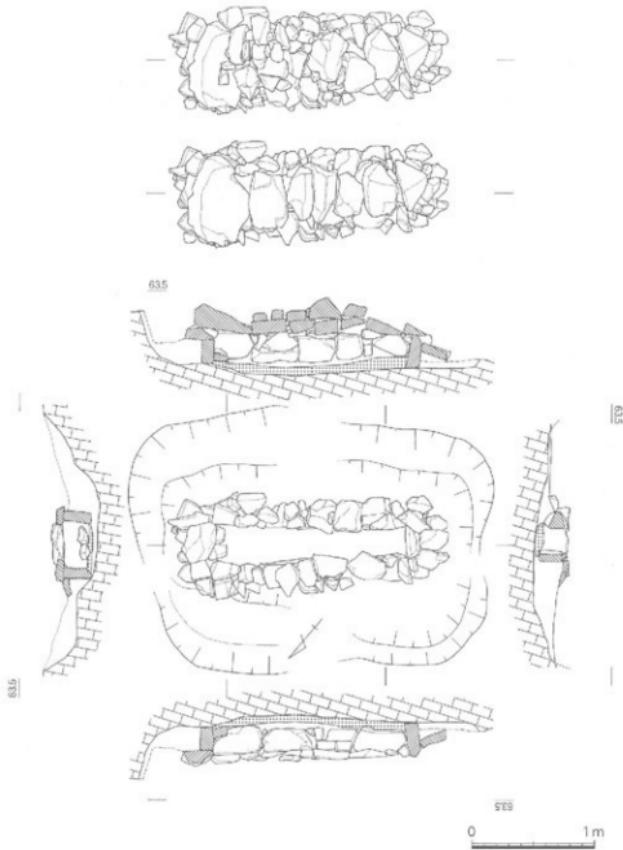


図93 一国山4号墳石棺4平・断面図 ($S = 1/40$)

石棺の長軸中心線はN50°Eを示しており、尾根走向に平行して築かれている。

蓋石は7石で、40~50cm×20~30cmの不整形な割石を使用しているが、頭位と推測される北端の蓋石は70cm×50cmと一回り大きな石材を用いている。蓋石は石棺身部に接して、やや透き間を空けた状態で並べられており、その上には蓋石よりもやや小さめの割石が、棺全体及びその周辺まで覆うように積み重ねられている。

石棺内部は蓋石の下に、土砂や木根の侵入もみられるが、側壁・内面ともよく原況を保っている。石棺身部は、板状をのもの、内面に相当する部分のみを整形したものなど様々な形態の割石を使用している。石棺身部は墓壙内に小口の石材を南北に立てた後、それを挟み込むように両側石を並べて構築し、さらに南側小口石が若干高いため、小振りの割石を並べて上面を水平に揃えている。石棺内部の大きさは、全長1.55m、幅0.25~0.4m、高さ0.28~0.36mを測り、枕石のある北小口側を南小口側よりも広く構築している。床面は、地山の土が混じる暗黄褐色粗砂+シルト微砂によって、南側小口付近をやや高く整地している。

棺内からは東小口石に接して枕石を2石確認した。出土遺物はない。

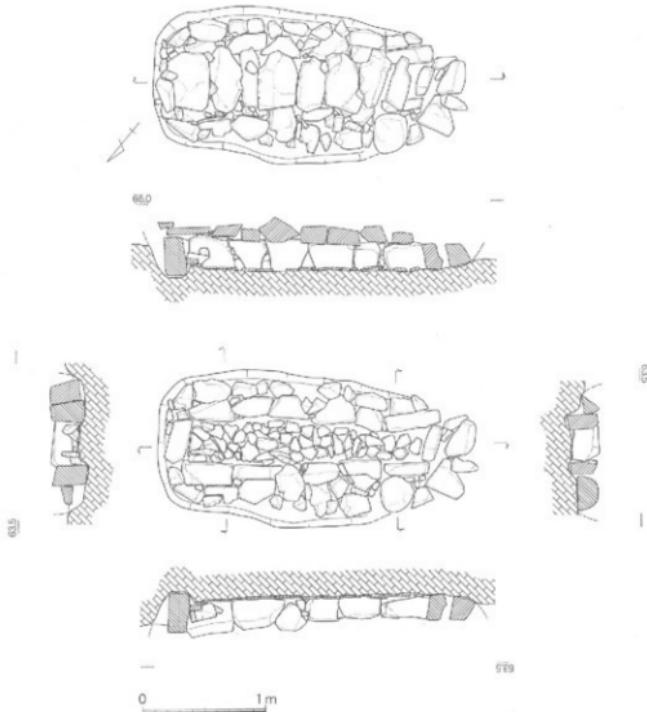


図94 一国山4号墳石棺5平・断面図 (S=1/40)

主体部（箱式石棺 5） 本古墳の主体部のうち、一番東側に築成された箱式石棺である。墳頂部の地山を整地した後に墓壙を掘り込み、石棺を構築している。

墓壙は、現状で長さ約2.7m、最大幅約1.3m深さ約0.4mを測るが、墳丘が流失しているため、一部はすでに失われている。蓋石は8枚で構成され、残存状況から、この石棺は未盜掘であったと考えられる。

石棺の長軸中心線はN49°Eを示す。側石は1号墳の石棺に比べると小振りの石材を用いている。また、側石を囲むように墓壙の隙間に礫を充填し、側石を固定している。石棺内は、板状の割石を一面に敷き詰めて床面を形成している。枕石が石棺の北側に配されている点から、埋葬頭位は北東と推測される。石棺の内法は長さ約1.9m、最大幅約0.4m、深さ約0.3mを測る。出土遺物は、棺内外ともに認められなかった。

一国山古墳群中、床に板石を敷いてある箱式石棺は本石棺のみであり、また側石は角の取れた河原石状の石材を用いている。これらの点からみて、本石棺は一国山古墳群の箱式石棺の中では、異質な印象が強いといえる。

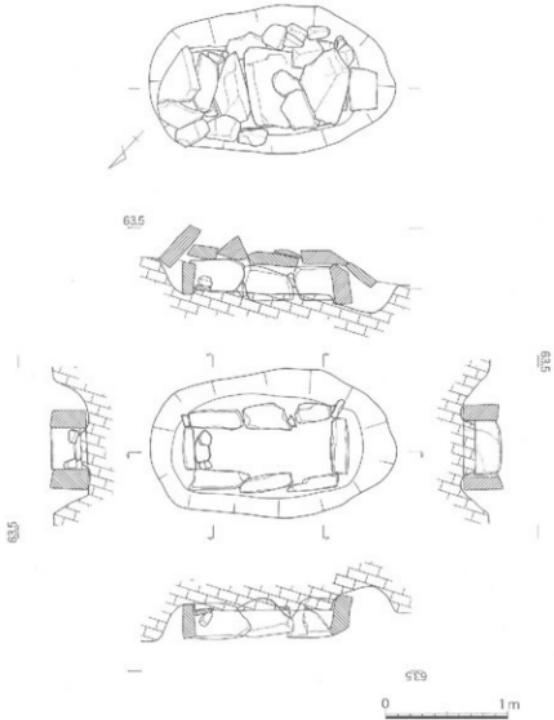


図95 一国山4号墳石棺6平・断面図 (S=1/40)

主体部（箱式石棺6） 箱式石棺5の西に隣接して築成されている。墓壙は長さ2.0m、最大幅1.2m、深さ0.4mである。石棺の長軸中心線はN48°Eである。蓋石は6枚で構成され、隙間に小礫によって充填されている。蓋石の状況から未盗掘とみられる。

石棺の内法は長さ約1.1m、最大幅約0.4m深さ約0.3mであり、一国山古墳群の箱式石棺群の中では、最も小さい石棺である。床面に整地層はみられず、墓壙の底が棺底と考えられる。枕石は石棺の北側に配されている点から、埋葬頭位は北東といえよう。出土遺物は、棺内外ともみとめられなかった。

第5項 一国山5号墳

一国山5号墳の概要 本古墳は3・4号墳の所在する同じ尾根上、3号墳の北西部に隣接し、4号墳の約1.5m北に所在する。墳頂部は標高65.50～66.25m付近であり、3号墳とほぼ同じ高さである。主体部は2基確認された（石棺7・8）。

墳丘 本古墳は隣接する3号墳と同様、傾斜角15～20°の斜面上に立地し、また主箱式石棺の蓋石も腐植土直下より出土している。特に石棺7は南西部小口石付近が完全に露呈している。従って墳丘全体、特に墳頂部周辺はかなり流出している可能性が高く墳形は不明瞭である。

主体部は、標高66.30m付近の地山を平らに整形した上に盛り土された明黄灰色粗砂（図89第15層、図96第3層）を掘り込んで構築されている。この盛土は石棺7の周辺のみに認められ、南西側（谷側）や北西側は、地山を整形することによってマウンドが構築されている。

南西側の墳端は、標高63.8～64.0m付近にあり、3号墳同様傾斜変換点付近の地山（図96第7・8・9層）を整形して築かれている。南東部及び北東部の墳端はかなり不明瞭であるが、上述した盛土の広がる範囲及び周囲の微地形から判断して、南東部は石棺7の墓壙より約2m、北東部は約1m離れた辺りと推測される。石棺8の墓壙から約2m北西には北東へ延び、途中から東へ向きを変える周溝が確認された。

以上から本古墳は、尾根筋に直交する辺が約7m、平行する辺が約8mを測るいびつな方墳と推測される。

周溝 北西端部に検出された、幅0.7～1.2m、断面は浅皿状を呈し、深さは深い部分で約0.40mを測る溝で地山を掘り込んで築かれている。斜面の傾斜変換点、標高約64.25m付近から北東へ約4m延び、そこから鈍角に方向を変えて東へ約2.5m深さを減じながらのびた後、石棺8の墓壙より約1m北側で途切れている。周溝下層には数層の埋土（図96第14～16層）が認められるが、上層部分は木根による擾乱により残りはよくない。

主体部（箱式石棺7） 本古墳の主体部2基のうち東側の組合せ式石棺である。尾根筋の平坦面に長辺2.80m以上短辺最大1.90mを測る長方形の墓壙を掘り、その中央に長方形の組合せ式箱式石棺を構築している。土層断面観察から元来盛り土（図96第3層）の上から掘削されたと推測される。また石棺8の墓壙により切られており、本主体部の方が先行して築かれていることが判明した。

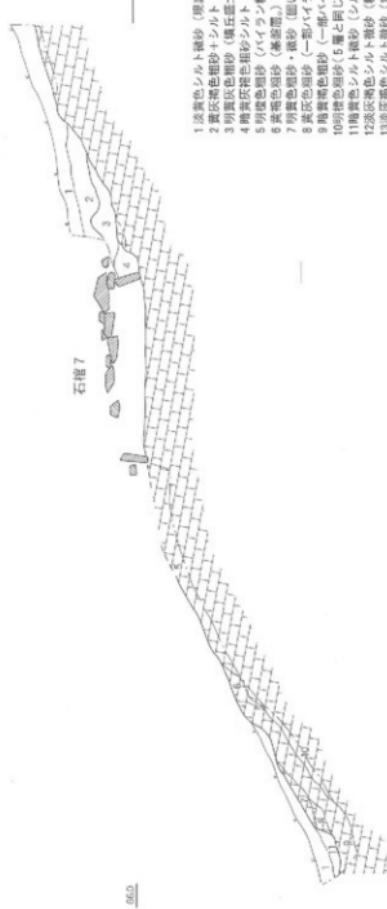
墓壙の南西側の掘り方は、墳丘が流出しており全体のプランは不明瞭である。小口石及び側石の下を掘り窪めた様相は認められない。

石棺の中心軸中心線は、N58°Eを示しており、尾根走向に平行して築かれている。

石棺は墳丘が流出しているため、全体の半分近くは地表面に露呈していた。蓋石は、0.60～0.80m×0.4～0.5mの不整形な割石を使用し、北東側4石が残存している。石棺が露呈していた部分は消失

L
060

K



- 1 浅黄色シルト層砂（漂表土上、簡便土、木根多い。）
- 2 黄灰褐色細砂シルト
- 3 真灰色細砂（礁丘蓋土。）
- 4 海浜灰褐色粗シルト（5層のバイラン粒混入。石棺7蓋土性土。）
- 5 例褐色粗砂（バイラン粗砂粒多。基盤層。）
- 6 黄褐色粗砂（基盤層。）
- 7 例褐色粗砂（細い、基盤層。）
- 8 黄灰褐色粗砂（5層のバイラン粗砂粒混入。固い、基盤層。）
- 9 海浜褐色細砂（一般バイラン粗砂粒混入。固い、基盤層。）
- 10 例褐色粗砂（5層と同様であるが若干明い。基盤層。）
- 11 海浜褐色粗砂（シルトと砂の互層。）
- 12 洋灰褐色シルト層砂（粗砂粒、石棺混入、軟かい。）
- 13 洋灰褐色シルト層砂（12層とほぼ同じであるが若干明い。）
- 14 例褐色粗砂シルト（礁蓋土。）
- 15 例褐色粗砂（礁砂（明蓋土。）
- 16 例褐色粗砂（礁砂（明蓋土。）
- 17 黄灰色シルト層砂（白色砂吹きに満ちた土。）
- 18 海浜褐色粗砂シルト（石棺 8 蓋土性土。）

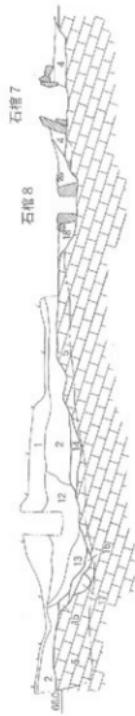


図96 一国山5号墳填丘土層断面図 (S=1/60)

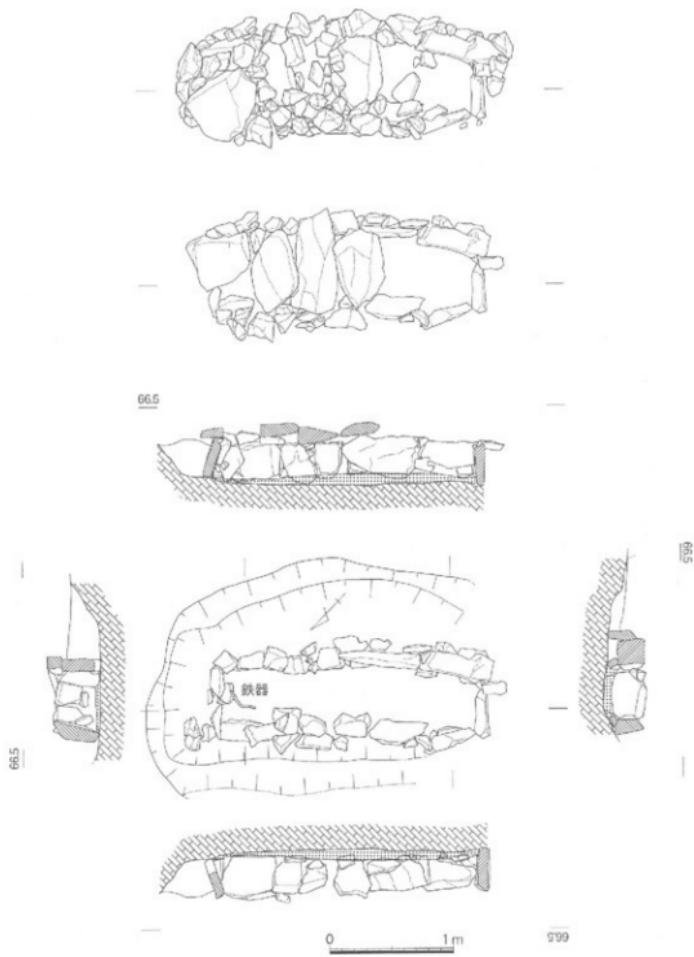


図97 一国山5号填石棺7平・断面図 ($S = 1/40$)

しており、北東端部の蓋石は、大きく東側へずれ、棺身が露呈している。蓋石の上には小型の割石が積み重ねられているが、蓋石が消失したり動いていたりして、擾乱・盗掘をうけている可能性がある。

石棺内部は流入土が蓋石直下まで堆積しており、また木根により擾乱されている。石棺身部は、割石を用いて構築されているが、形態・大きさとも様々である。また北東側と南西側における小口石の数が異なり、周囲の石棺3・6・8に比べ粗い造りである。内部の大きさは全長約2.10m幅0.45~0.5m深さ0.28~0.40mを測り、露呈していた部分は石材が動いている可能性がある。北東部の小口石や、北西側の側石もかなり前傾しているが、側石の中には底部を小割石で押さえている箇所も認められ、石棺構築時よりすでに側石が前傾していた部分が存在していたと考えられる。床面は暗橙褐色粗砂混じりシルトを用いて、標高65.90~65.95m付近まで整地されている。

石棺内からは、図99の鉄器が出土している。

箱式石棺8 本古墳の墳頂部、箱式石棺4の北に隣接して築成された箱式石棺である。墓壙は地山整

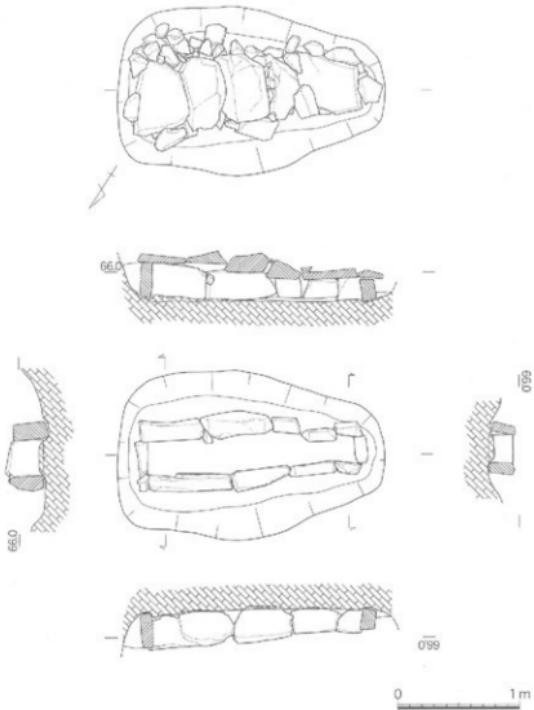


図98 一国山5号墳石棺8平・断面図 (S=1/40)

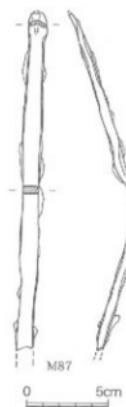


図99 一国山5号墳石棺7出土遺物
(S=1/3)

地面から掘られており、現状で長さ約2.2m、最大幅約1.4m、深さ約0.4mを測る。蓋石は5枚で構成され、隙間は小砾で充填している。出土状況から、未盗掘であると考えられる。石棺内部は流入した土砂が充満していた。側石に利用されている石は埋葬頭位とみられる東から、西に進むに従って小型になる。また側石を据えるための掘り込みは浅い。床面に整地層はみられず、墓壇の底が棺底出会ったとみられる。石棺の長軸中心線はN 57° Eであり、尾根方向に対して平行に築かれている。なお、出土遺物はみられなかった。

出土遺物 図99は石棺7の流入土層内から、整地面より10cmほど浮いた状態で、出土した鉈と推測される鉄器である。長さは約22cm、断面形は11.7×4mmの平たい長方形を呈し、両端が欠損している。基部は先端に向かって少しずつ細くなり、刃部でやや太くなる。刃部は厚さ2mmと薄くなり、わずかに反りが認められる。両縁に刃をつけていたと推測されるが、銹化が進んでおり不明瞭である。

第6項 弥生時代後期の遺構・遺物

溝1 一国山5号墳の北西に位置する溝で、5号墳の周溝に切られた形で検出されているため、古墳築造前の遺構と考えられる。大部分が周溝の掘削により破壊されているため、全長・形態は不明であるが、3・5号墳の北西—南東の土層断面にも当遺構の掘り方(図96第7層)が確認されるところから、少なくとも3m以上南北へのびていたと推測される。幅は約0.7m深さ約0.3mを測る。断面形は楕円形を呈し、埋土は黄灰色シルト微砂1層である。(図100)

出土遺物 図101は直口壺である。底部は焼成前に穿孔

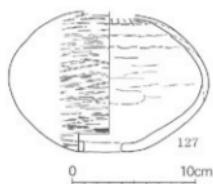


図101 溝1出土遺物 (S=1/4)

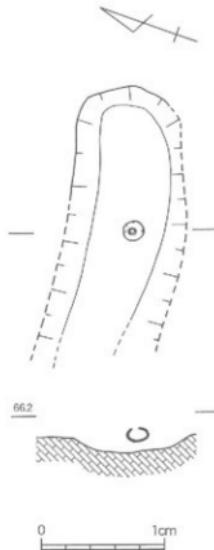


図100 溝1平・断面図 (S=1/40)

している。また頸部も打ち欠かれていると推測される。外面に丹の塗布は認められない。当初は5号墳に伴う遺物と考えていたが、上記の埋土中から出土しているため、本遺構に伴うと判断した。遺物の時期から、本遺構は弥生時代後期後半の範疇にあると推測される。

第7項 その他の遺物

一国山古墳群は、1・2号墳と、3・4・5号墳の2箇所に分かれて立地している。古墳に伴わない遺物もそれぞれの支群の周囲から出土しているため、本項でも二つに分けて記述する。

図102の上半分、M88～93および128は1号墳周辺の表土及び流土除去作業中に出土した遺物である。

M88は長頸鐵であり、頸部と莖部の間には台形状の闊が認められる。M88～91はU字形鋏先で、M89・90は側面部分、M91は刃先の部分である。M92は、鉄鐸であり、厚さ2mmの鉄板を円錐形に丸め、

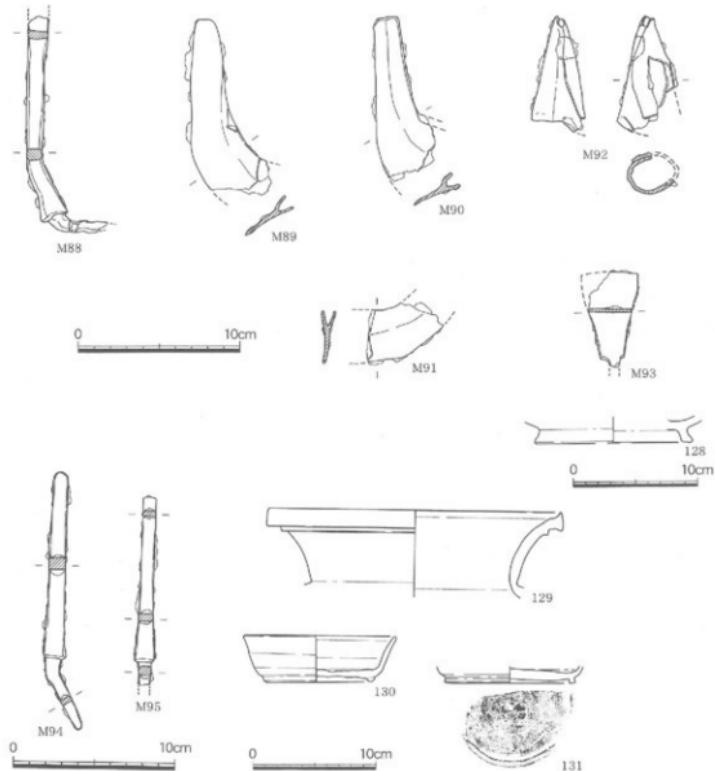


図102 その他の遺物 (S=1/3+1/4)

合わせ目は1cmほど重ね合わせている。上部端は径7mm、下部端は一部破損しているが径32mmを測り、断面形は若干橢円形気味である。舌は認められない。M93は平根式方頭鎌の鎌身と推測される。身幅は35mm、身長は54mmを測り、鎌身関部は斜めである。

128はハの字に開く高台を持つ須恵器の長頸壺の底部と推測される。時期は古代であろう。

下半分は3・4・5号墳周辺部の流土、表土中から出土した遺物である。

M94は石棺8の西側斜面流土中から出土した長頸鎌である。M95は石棺5の北側流土中から出土した同じく長頸鎌である。両方とも頭部と茎部の間には、台形状の闇が認められる。

129は甕の口縁部であり時期は5世紀後半と推測される。130及び131は高台を持つ环身であり、132には高台内部にへら記号が見られる。時期は8世紀前半と推測される。

註

(註1)『総社市埋蔵文化財発掘調査報告4 法蓮40号墳』総社市教育委員会1987

第3節　まとめ

一国山古墳群は、立地及び築造年代により大きく3分される。すなわち一国山1号墳、一国山2号墳、そして一国山3号墳・4号墳・5号墳の3つである。以下まとめは3つに分け記述する。なお各群の築造時期もそれぞれ記述する。

第1項　一国山1号墳について

立地について　一国山1号墳は、南西方向へ下る一国山の斜面上に築かれている。墳丘の南西は現在草木が繁茂しているが、元来大きく開け、八幡山より南側の足守平野を広く見下ろすことができ、築造当時も南西方向の眺望は良好であったと推測される。

副葬品及び築造年代について　当古墳の主体部は箱式石棺で2基あり、尾根筋に直交して築かれている。このうち南西側の箱式石棺1は未盗掘で、副葬品の鉄刀、勾玉、管玉、ガラス小玉が良好に残存していた。これらの副葬品の内、管玉は、径約5mmを測り、長さには約2.5cmのものと約3.5cmのものの2種類がある。そのうちの短い方であるJ4・5・6は、やや軟質の粗い緑色凝灰岩製で、5世紀代のものと推測される(註1)。

北東側に位置する石棺2の墓壙内から、ほぼ元位置で出土した胡算に納められた鉄鎌は、長頸鎌であり、刃先からM61・62の片刃の鎌とM63・64の両刃の鎌に分けられる。これら2種類の鎌は、杉山秀宏氏の分類によると(註2)、後者はB-IV-2-A-2形式であり、前者は鎌身部しか残っていないが恐らくC-IかC-III形式と推測される。杉山氏の編年では後者はⅦ期に相当し、前者はⅦ～Ⅷ期に相当すると考えられることから、鉄鎌の時期は5世紀後半と考えられる(註3)。

周溝内からは、供獻土器と考えられる須恵器・土師器及び、蛇紋岩製紡錘車そして鐵鐸が出土している。須恵器はT.K208相当期(註4)、土師器は高畠・平井・柴田編年の第VI期に相当すると推測される(註5)。

これらの遺物の年代から、一国山1号墳の築造年代は5世紀後半頃と推測される。

石棺1及び石棺2周辺からは各種の鉄器が散らばる形で出土している。これらにはM88のように杉山氏の分類でB-4-II形式と推測される鉄鎌が含まれており、これは胡算に納められていた鉄鎌と同じ形式と推測される。胡算は下半分のみの出土しており、上半は削平されたと考えられ、M88は胡